

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (132)

一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (II)

わし が さこ  
鷺ヶ迫遺跡  
(根木原遺跡B地点)

きた はら なか  
北原中遺跡  
(C地点)

う と うえ  
宇都上遺跡  
(F地点)

(鹿屋市花岡町)

2008年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター





## 序 文

この報告書は、一般国道220号古江バイパス道路建設に伴って、平成11年度から18年度にかけて実施した鹿屋市花岡町に所在する鷺ヶ追遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡の発掘調査の記録です。

調査の結果、鷺ヶ追遺跡では旧石器時代・縄文時代・古墳時代、北原中遺跡では縄文時代から古墳時代、宇都上遺跡では縄文時代・古墳時代・古代から近世までの遺構・遺物が発見されました。なかでも、旧石器時代から縄文時代の落とし穴や古墳時代の竪穴住居跡は、南九州における当該期の研究を進めるうえで貴重な資料を提供したものと考えています。

本報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の啓発・普及の助になれば幸いです。

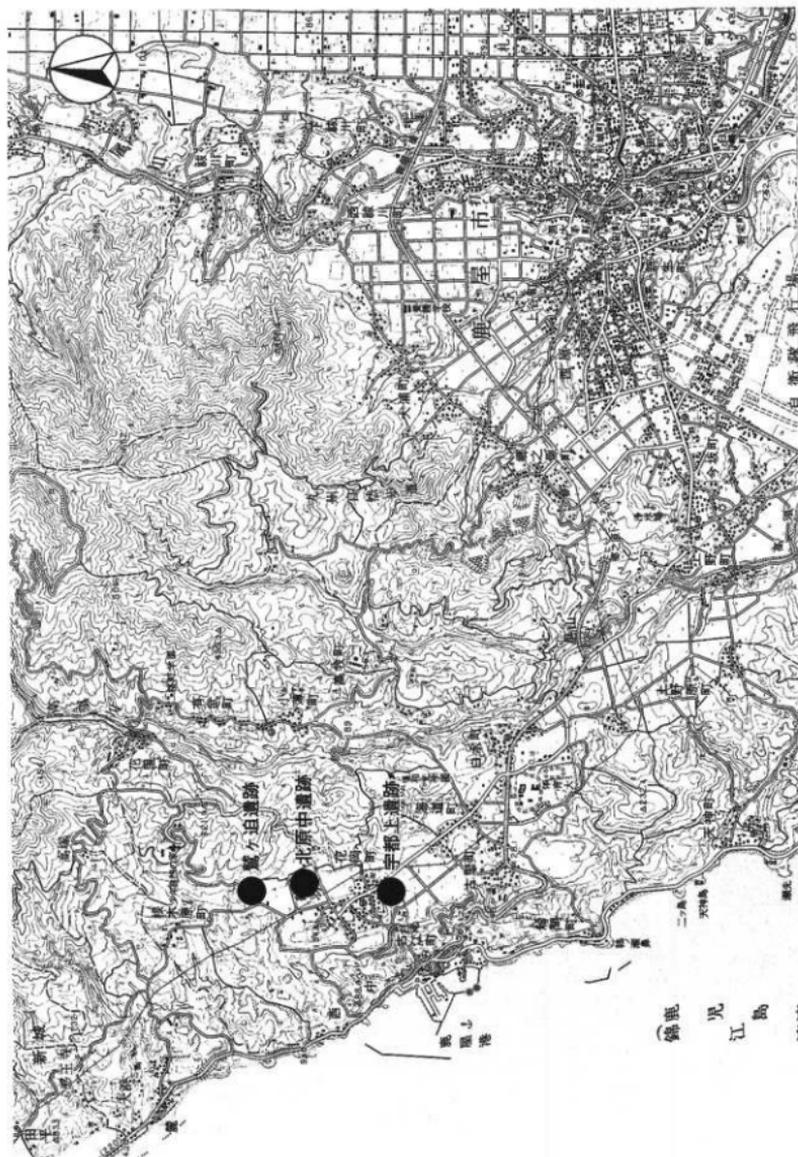
最後に、調査に当たりご協力いただいた国土交通省大隅河川国道事務所、鹿屋市教育委員会及び発掘調査に従事された地元の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所長 宮原景信

# 報告書抄録

ふりがな	わしがさこいせき      きたはらなかいせき      うとうえいせき							
書名	鷺ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡							
副書名	一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	132							
編集者名	牛ノ濱 修・橋口 拓也							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (遺跡面積) ㎡	調査起因
		市町村	遺跡番号					
わしがさこ 鷺ヶ迫遺跡				31° 25′ 04″	130° 46′ 34″	藤原・木調査 19990524～ 20000301 20000508～ 20010316 20010111～ 20050325 20050509～ 20070320 20010507～ 20020315 20041105～ 20050128 20060509～ 20061027	26,500 (14,750)	一般国道 220号 古江バイ パス建設
きたはらなか 北原中遺跡	ふしがさこいせきの 鹿児島県鹿尿市 はらなかの 花岡町	462039	12-240	31° 24′ 54″	130° 46′ 39″		7,950 (3,800)	
うとうえい 宇都上遺跡				31° 30′	130° 46′ 30″		5,400 (2,700)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鷺ヶ迫遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代  古墳時代	環状 落し穴10, 遺跡1  土坑7, 集石1 竪穴住居跡5, 溝7, 土坑4		尖頭器, 台形石器ほか 石板式・平椀式・曾畑式・ 春日式土器, 石鏃ほか 成川式, 石皿・磨石, 軽石製品ほか			
北原中遺跡	集落	縄文時代  古墳時代 古代・中世	集石6, 溝1, 土坑4  竪穴住居跡10 溝2, 円形土坑2		入佐式・黒川式土器, 石鏃・石斧・磨石ほか 成川式 陶磁器, 石帯			
宇都上遺跡	散布地	縄文時代 古墳 古代・中世 近世以降	集石1  土坑, 溝, 遺跡 土坑10, 防空壕		成川式土器 陶磁器, 須恵器ほか 陶磁器, 古銭, 煙管			
遺跡の概要	<p>鷺ヶ迫遺跡は、旧石器時代・縄文時代中期・古墳時代の遺構・遺物が主に出土した。旧石器時代の標群やナイフ形石器・台形石器・細石刃等と出土した植刃器は貴重なものである。また、春日式土器が形式的に分類できたものも大きな成果であった。鷺ヶ迫遺跡・北原中遺跡では、古墳時代の住居跡、土坑、溝状遺構が検出され、古墳時代の集落が発見されたことは注目される。北原中遺跡では、縄文時代晩期土器の良好な資料が得られた。宇都上遺跡では、調査面積が少なかったが、中世から近世にかけての土坑、溝状遺構などが検出された。</p>							



第1図 鷺ヶ泊遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡位置図 (1:50000)

鶴見江島

## 例 言

- 1 この報告書は、一般国道220号占江バイパス建設に伴う鶯ヶ追遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿屋市化岡町に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査の任にあたった。
- 4 発掘調査事業は平成11年5月から平成19年3月にかけて実施し、報告書作成事業は平成18・19年度に実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の遺物番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 8 発掘調査及び現場における図面の作成・写真の撮影は、調査担当者が行った。
- 9 石器の実測・トレースは熊本九州文化財研究所・大成エンジニアリング㈱に委託した。
- 10 遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事吉岡康弘と橋口拓也が行った。
- 11 本書の執筆・編集は牛ノ濱修・橋口拓也で行った。
- 12 遺物は、当センターで保管し、展示・活用する予定である。

# 目 次

巻頭カラー

序文

抄録

第Ⅰ章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	2
第3節 調査の経過（日誌抄）	4
第Ⅱ節 遺跡の位置及び環境	11
第1節 位置及び自然環境	11
第2節 歴史的環境	12
第Ⅲ章 発掘調査の概要	21
第1節 調査の概要	21
第2節 層位	25
第Ⅳ章 鷺ヶ迫遺跡（根木原B地点）	31
第1節 発掘調査の概要	31
第2節 旧石器時代の調査	31
第3節 縄文時代の調査	48
第4節 古墳時代の調査	107
第Ⅴ章 北原中遺跡（根木原C地点）	143
第1節 発掘調査の概要	143
第2節 縄文時代の調査	143
第3節 古墳時代の調査	182
第Ⅵ章 宇都上遺跡（根木原F地点）	221
第1節 発掘調査の概要	221
第2節 縄文時代の調査	221
第3節 古代～中世の調査	237
第Ⅶ章 発掘調査のまとめ	244
科学分析	249
図版	265
あとがき	

## 挿 図 目 次

第1図	鷺ヶ追遺跡ほか位置図(5万分の1)	
第2図	年度別調査地点	19・20
第3図	周辺遺跡	14
第4図	鷺ヶ追遺跡周辺地形図	22
第5図	北原中遺跡周辺地形図	23
第6図	宇都上遺跡周辺地形図	24
第7図	基本土層模式図	25
第8図	周辺遺跡土層比較図	26
第9図	鷺ヶ追遺跡土層図(1)	27
第10図	鷺ヶ追遺跡土層図(2)	28
第11図	鷺ヶ追遺跡土層図(3)・北原中遺跡土層図(1)	29
第12図	北原中遺跡土層図(2)・宇都上遺跡土層図	30
	(鷺ヶ追遺跡)	
第13図	Ⅶ層検出遺構配置図	32
第14図	礫群	33
第15図	落とし穴	34
第16図	Ⅶ層出土状況	35
第17図	ナイフ形石器・台形石器	37
第18図	二稜尖頭器・スクレイパー・挟入石器	38
第19-1図	細石刃	39
第19-2図	槌刃器	39
第19-3図	草創期上器	40
第20図	細石刃核・ブランク・剥片	40
第21図	楔形石器・切断剥片・使用痕剥片	41
第22図	縄文時代遺構	45
第23図	落とし穴1号	46
第24図	落とし穴2号	47
第25図	集石	48
第26図	土器出土状況	51
第27図	曾畑式	52
第28図	I類土器	53
第29図	II類土器1	54
第30図	II類土器2	55
第31図	II類土器3	56
第32図	II類土器4	57
第33図	III類土器1	58
第34図	III類土器2	59
第35図	III類土器3	60
第36図	III類土器4-1	61
第37図	III類土器4-2	62
第38図	III類土器5	63
第39図	III類土器6	64
第40図	III類土器7	65
第41図	IV類土器1	66
第42図	IV類土器2	67
第43図	IV類土器3	68
第44図	IV類土器4	69
第45図	IV類土器5	70
第46図	IV類土器6	71
第47図	IV類土器7	72
第48図	IV類土器8	73
第49図	IV類土器9	74
第50図	IV類土器10	75
第51図	底部	76
第52図	遺構内出土土器	77
第53図	住居内出土遺物	78
第54図	石器出土状況	79
第55図	磨製石鏃・打製石鏃(1)	85
第56図	打製石鏃(2)	86
第57図	打製石鏃(2)・(3)	88
第58図	石槍・石匙	89
第59図	スクレイパー(1)	90
第60図	スクレイパー(2)	91
第61図	二次加工剥片・微細剥離痕剥片	92
第62図	楔形石器・石鏃	94
第63図	石核・残核	95
第64図	磨製石斧・局部磨製石斧	96
第65図	打製石斧	98
第66図	凹石・敷石・磨石	99
第67図	石皿	100
第68図	砥石	101
第69図	軽石製品	102
第70図	古墳時代遺構配置図	109
第71図	1号住居跡	110
第72図	2~4号住居跡	111
第73図	2~4号住居跡	112
第74図	3号住居跡	113
第75図	5号住居跡	114
第76図	6号住居跡	115
第77図	1・2・3号住居跡出土遺物	117
第78図	3号住居跡出土遺物(2)	118
第79図	3号住居跡出土遺物(3)	119
第80図	3号住居跡出土遺物(4)	120
第81図	3号住居跡出土遺物(5)	121
第82図	3号住居跡出土遺物(6)	122
第83図	5号住居跡出土遺物(1)	124
第84図	5号住居跡出土遺物(2)	125
第85図	5・6号住居跡出土遺物	126
第86図	古道跡	129
第87図	溝状遺構(1)	130

第88図	溝状遺構 (2)	131	第133図	7号住居跡	192
第89図	土坑 1～6	132	第134図	焼土	193
第90図	土坑 7・8、円形土坑	133	第135図	土坑	194
第91図	ピット位置図	134	第136図	ピット	195
第92図	遺構出土石器 (1)	136	第137図	溝状遺構	196
第93図	遺構出土石器 (2)	137	第138図	1号住居内出土遺物	198
第94図	遺構川出土石器 (3)	138	第139図	2号住居内出土遺物 (1)	199
第95図	遺構川出土石器 (4)	139	第140図	2号住居内出土遺物 (2)	200
第96図	畝跡	141	第141図	3号住居内出土遺物 (1)	201
(北原中遺跡)					
第97図	遺構配置図	144	第142図	3号住居内出土遺物 (2)	202
第98図	集石 (1)	145	第143図	3号住居内出土遺物 (3)	204
第99図	集石 (2)	146	第144図	4・5・6号住居内出土遺物	205
第100図	IV層遺物出土状況	147	第145図	7号住居内出土遺物	206
第101図	晩期土器 1	148	第146図	埋設土器	207
第102図	晩期土器 2	149	第147図	IV層出土土器 (1)	211
第103図	晩期土器 3	150	第148図	IV層出土土器 (2)	212
第104図	晩期土器 4	151	第149図	IV層出土土器 (3)	213
第105図	晩期土器 5	153	第150図	IV層出土土器 (4)	214
第106図	晩期土器 6	154	第151図	IV層出土土器 (5)	215
第107図	晩期土器 7	156	第152図	遺構内出土石器 (1)	218
第108図	晩期土器 8	158	第153図	遺構内出土石器 (2)	219
第109図	晩期土器 9	159	第154図	遺構内出土石器 (3)	220
第110図	晩期土器 10	161	(宇都上遺跡)		
第111図	晩期土器 11	162	第155図	集石 (1)	222
第112図	晩期土器 12	163	第156図	Ⅲ層遺物出土状況	223
第113図	石器出土状況 (1)	167	第157図	IV層遺物出土状況	224
第114図	石器出土状況 (2)	168	第158図	縄文土器 (1)	226
第115図	石鏃	169	第159図	縄文土器 (2)	227
第116図	スクレイパー (1)	170	第160図	縄文土器 (3)	228
第117図	スクレイパー (2)・二次加工剥片・石鏃	171	第161図	出土石器 (1)	232
第118図	磨製石斧・打製石斧 (1)	172	第162図	出土石器 (2)	233
第119図	打製石斧 (2)	173	第163図	出土石器 (3)	234
第120図	打製石斧 (3)	174	第164図	出土石器 (4)	235
第121図	打製石斧 (4)	175	第165図	遺構配置図	238
第122図	打製石斧 (5)	176	第166図	集石 (2)・防空壕跡・溝状遺構①～⑦	239
第123図	凹石・蔽石	177	第167図	土坑	241
第124図	蔽石・磨石・軽石製品	178	第168図	中世出土遺物	242
第125図	古墳時代遺構配置図	183	<b>表 目 次</b>		
第126図	H11年、2号住居跡	184	第1表	年度別発掘調査一覧表	1
第127図	H11年、3号住居跡	185	第2表	周辺遺跡 (1)	15
第128図	1号住居跡	186	第3表	周辺遺跡 (2)	16
第129図	2号住居跡	188	第4表	周辺遺跡 (3)	17
第130図	3号住居跡	189	第6表	旧石器遺物観察表 (1)	43
第131図	4号住居跡	190	第7表	旧石器遺物観察表 (2)	44
第132図	5号住居跡	191	第8表	縄文土器観察表 (1)	80

第9表	縄文土器観察表 (2)	81
第10表	縄文土器観察表 (3)	82
第11表	縄文石器観察表 (1)	103
第12表	縄文石器観察表 (2)	104
第13表	縄文石器観察表 (3)	105
第14表	縄文石器観察表 (4)	106
第16表	遺構内遺物観察表 (1)	127
第17表	遺構内遺物観察表 (2)	128
第18表	遺構内石器観察表	140
第19表	縄文土器観察表 (1)	164
第20表	縄文土器観察表 (2)	165
第21表	縄文石器観察表 (1)	180
第22表	縄文石器観察表 (2)	181
第24表	出土土器観察表 (1)	209
第25表	出土土器観察表 (2)	210
第26表	包含層成川式土器観察表	216
第27表	住居内出土石器観察表	217
第28表	縄文土器観察表	229
第29表	石器観察表	236
第30表	中世出土遺物一覧表	243
第31表	縄文時代磨製石鏃一覧表	246

## 図版目次

巻頭グラビア1	遺跡遠景	
巻頭グラビア2	出土遺物	
図版1	遺跡遠景	265
図版2	遺跡遠景	266
(鷺ヶ追遺跡)		
図版3	土層	267
図版4	落とし穴1~4	268
図版5	落とし穴4~9号	269
図版6	落とし穴9~13号	270
図版7	落とし穴14・15号	271
図版8	鏃群・旧石器時代地形	272
図版9	縄文時代遺物出土状況	273
図版10	縄文時代落とし穴1・2号	274
図版11	古墳時代住居跡	275
図版12	古墳時代住居跡	276
図版13	土坑	277
図版14	遺物出土状況	278
(北原中遺跡)		
図版15	縄文時代遺構	279
図版16	土層	280
図版17	古墳時代住居跡	281
図版18	古墳時代住居跡	282
図版19	古墳時代住居跡	283
図版20	遺物出土状況	284

(宇都上遺跡)		
図版21	土層・遺構・遺物出土状況	285
図版22	発掘風景	286
(鷺ヶ追遺跡)		
図版23	鷺ヶ追遺跡 旧石器 (1)	287
図版24	鷺ヶ追遺跡 旧石器 (2)	288
図版25	鷺ヶ追遺跡 縄文土器 (1)	289
図版26	鷺ヶ追遺跡 縄文土器 (2)	290
図版27	鷺ヶ追遺跡 縄文土器 (3)	291
図版28	鷺ヶ追遺跡 縄文土器 (4)	292
図版29	鷺ヶ追遺跡 縄文土器 (5)	293
図版30	鷺ヶ追遺跡 縄文土器 (6)	294
図版31	鷺ヶ追遺跡 縄文土器 (7)	295
図版32	鷺ヶ追遺跡 縄文土器 (8)	296
図版33	鷺ヶ追遺跡 縄文土器 (9)	297
図版34	鷺ヶ追遺跡 縄文石器 (1)	298
図版35	鷺ヶ追遺跡 縄文石器 (2)	299
図版36	鷺ヶ追遺跡 縄文石器 (3)	300
図版37	鷺ヶ追遺跡 縄文石器 (4)	301
図版38	鷺ヶ追遺跡 縄文石器 (5)	302
図版39	鷺ヶ追遺跡 縄文石器 (6)	303
図版40	鷺ヶ追遺跡 縄文石器 (7)	304
図版41	鷺ヶ追遺跡 遺構内出土石器 (8)	305
(北原中遺跡)		
図版42	北原中遺跡 縄文土器 (1)	306
図版43	北原中遺跡 縄文土器 (2)	307
図版44	北原中遺跡 縄文土器 (3)	308
図版45	北原中遺跡 縄文土器 (4)	309
図版46	北原中遺跡 縄文土器 (5)	310
図版47	北原中遺跡 縄文土器 (6)	311
図版48	北原中遺跡 縄文土器 (7)	312
図版49	北原中遺跡 縄文石器 (1)	313
図版50	北原中遺跡 縄文石器 (2)	314
図版51	北原中遺跡 縄文石器 (3)	315
図版52	北原中遺跡 縄文石器 (4)	316
図版53	北原中遺跡 縄文石器 (5)	317
図版54	北原中遺跡 縄文石器 (6)	318
図版55	北原中遺跡 古墳時代土器 (1)	319
図版56	北原中遺跡 遺構内出土石器 (1)	320
(宇都上遺跡)		
図版57	宇都上遺跡 縄文土器 (1)	321
図版58	宇都上遺跡 縄文土器 (2)	322
図版59	宇都上遺跡 石器 (1)	323
図版60	宇都上遺跡 石器 (2)	324

# 第I章 発掘調査の経過

## 第1節 発掘調査に至るまでの経過

建設省九州建設局大隅河川国道工事事務所（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所に改称）は、一般国道220号古江バイパスの建設を計画し、計画路線内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会文化課（組織改称により平成8年度より文化財課に改称）に照会した。これを受け、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下センター）が平成6年12月に分布調査を実施し、事業区内に根本原遺跡が存在することが判明した。

事業区内の埋蔵文化財の取扱いについては、建設省鹿児島河川国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島河川国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。発掘調査は受託事業として県立埋蔵文化財センターが行うこととなった。

発掘調査は平成9年度より実施され、便宜上、第2図のように北からA・B・C・D・E・F地点に分けて調査を行った。発掘調査では、遺跡名をA～F地点と仮称していたが、整理作業の段階

第1表 年度別発掘調査一覧表

年度	調査地点	遺跡面積	調査面積	調査期間(延べ日数)	調査担当者
9	A地点		5,000㎡	H9.10～H10.3 (97)	前迫・今村・前田
10	A地点		6,200㎡	H10.10～H11.3 (102)	寺師・元田
11	B地点	2,000㎡	4,000㎡	H11.5～H12.3 (142)	寺原・元田
	C地点	1,000㎡	2,000㎡		
12	B地点	3,250㎡	6,500㎡	H12.5～H13.3 (180)	野邊・寺原
	C地点	90㎡	90㎡		
	D地点	110㎡	110㎡		
13	C地点	1,800㎡	3,600㎡	H13.5～H14.3 (157)	高岡・西園
	D地点	3,200㎡	6,400㎡		
14	C地点	100㎡	100㎡	H14.5～H14.8.0 (58)	高岡・立神
	D地点	1,600㎡	3,200㎡		
15	C地点	1,000㎡	2,160㎡	H15.11～H16.1.0 (43)	高岡・坂本
	E地点		40㎡		
16	D地点	3,300㎡	6,600㎡	H16.5～H17.3 (163)	宗園・日高
	E地点	700㎡	700㎡		
	B地点	3,000㎡	3,000㎡		
17	D地点	1,000㎡	2,000㎡	H17.5～H17.10.0 (93)	日高・平・松ヶ野
	F地点	182㎡	182㎡		
18	B地点	6,500㎡	13,000㎡	H18.5～H19.3 (168)	野間口・木之下・相美
	D地点	350㎡	700㎡	H18.8～H18.9 (18)	
	F地点	2,700㎡	5,400㎡	H18.5～H18.10 (93)	

小字名からそれぞれ、A地点=中野西遺跡、松山田西遺跡 B地点=鶯ヶ迫遺跡 C地点=北原中遺跡 D地点=領家西遺跡 E地点=湯ノ迫遺跡・天神平溝下遺跡 F地点=宇都上遺跡と変更した。

根木原遺跡の発掘調査は、平成9年度から平成18年度までの長期にわたって行った。今回報告する鶯ヶ迫遺跡、北原中遺跡、宇都上遺跡の調査も長期にわたり、平成11年度から平成18年度まで発掘調査を行い、調査間で整理作業を行い、報告書作成を平成19年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。調査面積は70,760㎡である。

## 第2節 調査の組織

### (平成11・12年度)

事業主体者	建設省大隅河川国道工事事務所			
調査責任者	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課			
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人 (11年度)	
			井上 明文 (12年度)	
調査企画者		次長兼総務課長	黒木 友幸	
		主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋 (11年度)	
			新東 晃・ (12年度)	
		調査課長補佐	新東 晃・ (11年度)	
			立神 次郎 (12年度)	
調査・企画担当者		主任文化財主事兼第二調査係長	青崎 和憲 (11年度)	
			牛ノ濱 修 (12年度)	
調査担当者		文化財研究員	野邊 盛雅 (12年度)	
			寺原 徹	
			元田 順子 (11年度)	
調査事務担当		総務係長	有村 貢	
		主 査	今村孝一郎	
現地指導者	東京大学	助 教 授	大貫 静夫	
	鹿児島国際大学	教 授	上村 俊雄	
		助 教 授	中園 聡	
		講 師	大西 智和	
		助 手	中村 直子	

### (平成13～16年度)

事業主体者	国土交通省大隅河川国道事務所
調査責任者	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文 (13・14年度)
	〃	〃	木原 俊孝 (15・16年度)
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸 (13年度)
	〃	〃	田中 文雄 (14・15年度)
	〃	〃	賞雅 彰 (16年度)
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
	〃	調査課長補佐	立神 次郎
調査・企画担当者	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濱 修
調査担当者	〃	文化財主事	高岡 和也
	〃	〃	宗岡 克英 (16年度)
	〃	〃	吉井秀一郎 (16年度)
	〃	〃	日高 勝博 (16年度)
	〃	文化財研究員	西園 勝彦 (13年度)
	〃	文化財調査員	立神 勇志 (14年度)
	〃	〃	坂本佳代子 (15年度)
	〃	〃	佐藤 真人 (16年度)
調査事務担当	〃	総務係長	前田 昭信 (13・14年度)
	〃	〃	平野 浩二 (15・16年度)
	〃	主 査	今村孝一郎 (13・14年度)
	〃	〃	脇田 浩幸 (15・16年度)
現地指導者	鹿児島大学	教 授	森脇 広

(平成17・18年度)

事業主体者 国土交通省大隅河川国道事務所

調査責任者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 上今 常雄 (H17.4～H18.7)

〃 〃 宮原 景信 (H18.8～ )

調査企画者 〃 次長兼総務課長 有川 昭人

〃 〃 次長兼調査第一課長 新東 晃一 (17年度)

〃 〃 次 長 新東 晃一 (18年度)

〃 〃 調査第二課長 立神 次郎

調査・企画担当者 〃 主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長 牛ノ濱 修

調査担当者 〃 文化財主事 野間口 勇 (18年度)

〃 〃 〃 木之下悦朗 (18年度)

〃 〃 〃 三垣 恵一 (18年度)

〃 〃 〃 日高 勝博 (17年度)

調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	新中なるみ (18年度)
	〃	文化財調査員	松ヶ野 恵
調査事務担当	〃	主幹兼総務係長	平野 浩二 (17年度)
	〃	総 務 係 長	寄井田正秀 (18年度)
	〃	主 査	寄井田正秀 (17年度)
	〃	〃	蒲池 俊一 (18年度)
現地指導者	別府大学	教 授	橘 昌信
	鹿児島大学	助 教 授	本田 道輝
	〃	助 教 授	中村 直子

### (平成19年度)

事業主体者	国土交通省大隅河川国道事務所		
作成責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	宮原 景信
作成企画者	〃	次長兼総務課長	平山 章
	〃	次 長	新東 晃一
	〃	調査第二課長	立神 次郎
作成・企画担当者	〃 主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長		牛ノ濱 修
作成担当者	〃	主任文化財主事	宮田 栄二
	〃	文化財主事	野間口 勇
	〃	〃	廣 栄次
	〃	文化財調査員	橋口 拓也
作成事務担当	〃	総 務 係 長	寄井田正秀
	〃	主 査	蒲池 俊一
遺物指導者	鹿児島大学	準 教 授	本田 道輝

### 第3節 調査の経過 (日誌抄)

発掘調査は、平成11年度から平成18年度まで行った。経過は日誌抄により月毎に略述する。

平成11年度 (平成11年5月24日～平成12年3月1日, 調査期日 142日)

月	調 査 の 経 過
5	確認調査開始 (担当: 寺原徹・元田順了)
	鷲ヶ迫遺跡 道路建設用No.259とNo.260を基準に10m間隔の区割りを設定し、その区割りに沿ってトレンチで確認調査を行った。1 T～4 T設定後掘り下げ。
	北原中遺跡 東側境界杭ラインを基準に10m間隔の区割りを設定し、その区割りに沿ってトレンチで確認調査を行った。5 T～8 T設定後掘り下げ。

6	鷺ヶ迫遺跡 1 T～4 T 北原中遺跡 5 T～8 T 須家西遺跡 トレンチ調査
7	北原中遺跡 C・D-1～7区 III層掘り下げ。 古道・竪穴住居跡検出 (C・D-6・7区)
8	B・C-1～7区 III層掘り下げ。 D-6・7区 竪穴住居跡検出。 24日-国上交通省主催の発掘・古代体験活動
9	B・C-1～7区 III層掘り下げ。 C-6区 竪穴住居跡検出 鷺ヶ迫遺跡 下層確認トレンチ調査
10	B・C-1～7区 III～IV層掘り下げ。 鷺ヶ迫遺跡 下層確認トレンチ調査
11	B・C-1～7区 III～IV層掘り下げ。 C-6区 土坑・竪穴住居跡検出 5日-花園中2年生45名 遺跡見学・体験学習
12	B・C-1～8区 III～IV層掘り下げ。 北原中遺跡 竪穴住居跡検出 13・14日-大貫静夫助教授(東京大学) 調査指導
1	B・C-6～8区 IV層掘り下げ。 D-1・2区 溝状遺構・土坑検出 25日-調査終了

平成12年度(平成12年5月8日～平成13年3月16日 調査期間 180日)

月	調 査 の 経 過
	8日調査開始
5	D-3～9区 III・IV区掘り下げ。 C-13～19区 III・IV区掘り下げ。 B-6区 IV層掘り下げ。
6	D-3～7区 IV層掘り下げ。 D・E-27～33区 III～IV層掘り下げ。
7	B-6区 IV層掘り下げ。D-6・7区 IV層掘り下げ。 D・E-27～33区 IV層掘り下げ。 D-5区 住居跡検出。D-6・7区 IV層上面コンタ図作成。

8	<p>B～E-27～33区 IV層掘り下げ。  C-31・32区 古道跡検出  4日-鹿屋市文化財少年団16名 体験学習, 22日-古江小16名 体験学習  23日-中岡聡助教授・大西智和講師(鹿児島国際大学) 調査指導</p>
9	<p>C～E-29・30区 III～IV層掘り下げ。  B～E-27・28区 IV層上面コンタ図作成  D-5区, D-27区 遺構検出  8日-河門貞徳・本間道輝遺跡見学</p>
10	<p>C～E-29・30区 III～IV層掘り下げ。  B～E-27・28区 IV層上面コンタ図作成  3日-鹿屋中15名 体験学習</p>
11	<p>C・D-27区, C-33区 III～IV層掘り下げ。  E-31～33区 VII層掘り下げ。  C-33区 集石検出</p>
12	<p>C～E-29・30区 III～IV層掘り下げ。D-5区 住居跡検出  北原中遺跡 トレンチ確認調査  4日-上村俊雄教授・中岡聡助教授(鹿児島国際大学) 調査指導  5日-中村直子助手(鹿児島大学) 調査指導</p>
1	<p>B～D-32・33区 VIII層掘り下げ。  北原中遺跡 トレンチ確認調査  25日-作業員健康診断</p>
2	<p>B～E-30～33区 VIII層掘り下げ。  北原中遺跡 トレンチ確認調査  20日-空中写真撮影  C-29区 VII層掘り下げ。</p>
3	<p>D-4・5区 IV層掘り下げ(春日式土器出土)。D-27区 住居跡検出  16日-調査終了</p>

平成13年度(平成13年5月7日～平成14年3月15日 調査期間157日)

月	調 査 の 経 過
	7日調査開始
5	<p>B～D-18～20区 表土剥ぎ取り。  B～D-18～20区 II層掘り下げ。</p>
6	<p>B～D-18～20区 II層掘り下げ。  D-20～23区 遺構検出  領家西遺跡 調査</p>

7	B～D-18～20区 II層掘り下げ。 D-20～23区 遺構検出 領家西遺跡 調査
8	B～D-18～20区 II層掘り下げ。縄文晩期土器出土。 D-20～23区 遺構検出 領家西遺跡 調査
9	D-20～23区 遺構検出（竪穴住居跡6基検出） 3～5号住居跡 検出作業 領家西遺跡 調査
10	3～7号住居跡 検出作業 領家西遺跡 調査 11日-森脇広教授（鹿児島大学）調査指導
11	4～8号住居跡 検出作業 遺構（竪穴住居跡）実測 領家西遺跡 調査
12	5～8号住居跡 検出作業 遺構（竪穴住居跡）実測 領家西遺跡 調査
1	7・8号住居跡 検出・実測 B～D-18～23区 II～III層掘り下げ。縄文晩期土器出土 領家西遺跡 調査
2	B～D-18～23区 II～IV層掘り下げ。 A-23区 IV層集石検出 領家西遺跡 調査
3	B～D-18～23区 IV～V層掘り下げ。 領家西遺跡 調査 27日-調査終了

#### 平成14年度

#### 北原中遺跡（平成14年5月7日～6月4日）

月	調 査 の 経 過
5	7日-調査開始 A-23区・D-23区 II層掘り下げ。 遺構検出
6	A-23区・D-23区 II層掘り下げ。 遺構（住居跡）検出・実測 4日-北原中遺跡調査終了。全員、領家西遺跡の調査へ

平成15年度（平成15年11月5日～平成16年1月28日 調査期間 43日）

月	調査の経過
11	5日-調査開始 D-10～17区 Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。D-14区 縄文晩期土坑検出 天神平溝下遺跡 トレンチ確認
12	C-14～16区 Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。 D-11～17区 Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。 25日-鶴羽小学校体験学習
1	B・C-9～16区 Ⅳ層掘り下げ。 C-14・15区 上坑検出 28日-調査終了

平成16年度（平成17年1月11日～3月25日 調査期間 44日）

月	調査の経過
1	11日-調査開始 B・C-13～17区 Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ。 溝状遺構・古道検出
2	B・C-13～17区 Ⅳ層掘り下げ。 B～D-13～22区 Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ。 溝状遺構・古道検出、集石検出
3	C・D-5・6区 Ⅳ層掘り下げ。C～E-7区 Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。 E・F-8・9区 Ⅳ層掘り下げ。 25日-調査終了

#### 鷺ヶ迫遺跡

平成18年度（平成18年5月9日～平成19年3月20日 調査期間 168日）

月	調査の経過
5	9日 調査開始 B・C-50・51区 Ⅲ層掘り下げ。 10日 所長あいさつ、11日-大隅河川国道事務所現地協議
6	B・C-45～51区 Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ。 C-50・51区 Ⅲ層成川式土器出土 C-50・51区 竪穴住居跡検出
7	B・C-45～51区 Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。 B・C-42区 X層掘り下げ。 B・C-45～51区 Ⅳ層上面遺構検出（ピット・土坑）

8	B・C-45~51区 VI~VIII層掘り下げ。B・C-36・37区 IV層掘り下げ。 C-47区 VIII層下面地形図作成
9	B・C-45~49区 VII・VIII層掘り下げ。B・C-50区 IV・V層掘り下げ。 D・E-45~51区 表土剥ぎ。 礫群1検出(C-49区)
10	B・C-45~49区 VII・VIII層掘り下げ。B・C-50・51区 IV・V層掘り下げ。 D・E-45~50区 III・IV層掘り下げ。 落とし穴検出(C-45区)。現地説明会実施(153名参加)
11	B・C-49~51区 VIII層掘り下げ。D-45~47区 VIII層掘り下げ。D-48~51区 V層掘り下げ。 B・C-34・35区 IIIb層掘り下げ。D・E-34~43区 表土剥ぎ。 細石刃出土(D-47区)
12	B・C-50・51区 VIII層掘り下げ。D・E-48~51区 VIII層掘り下げ。 B~D-34~38区 IIIb層掘り下げ。
1	B・C-34~38区 VIII層掘り下げ。D・E-34・35区 VIII層掘り下げ。 D・E-36~38区 V層掘り下げ。C・D-36~38区 トレンチ設定後掘り下げ。 溝状遺構2(D・E-47区)
2	B~E-35~38区 VI~VIII層掘り下げ。C・D-35・36区 V・VI層掘り下げ。 落とし穴1(D・E-47区) D-38区 旧石器~縄文時代草創期の遺物出土。
3	C・D-5・6区 IV層掘り下げ。C~E-7区 III~IV層掘り下げ。 E・F-8・9区 IV層掘り下げ。 27日-調査終了

### 宇都上遺跡

平成18年度(平成18年5月9日~10月27日 調査期間 93日)

月	調 査 の 経 過
	8日調査開始
5	D・E-8~12区, B~D-2~5区, E-6・7区 II~IV層掘り下げ。 16日-排土処理協議(同交省)。22日-鹿屋市文化課8名 遺跡見学。
6	A~C-1~4区 II~IV層掘り下げ。 D・E-9~12区 II~IV層掘り下げ。 D-9区 防空壕検出。
7	A~D-1~4区 II~IV層掘り下げ。 D・E-8~12区 II~IV層掘り下げ。 28日-空中写真撮影。

	A～C-2～5区 IV層掘り下げ。
8	C-4区 集石検出。A～C-2～5区 IV層上面コンタ図作成。 8日-鹿屋市文化財ウォッチング発掘体験16名。
9	B～E-2～6区 III～IV層掘り下げ。 D・E-6～12区 III～IV層掘り下げ。 25日-排土処理について国交省と協議。
10	C・D-5・6区 IV層掘り下げ。C～E-7区 III～IV層掘り下げ。 E・F-8・9区 IV層掘り下げ。 27日-調査終了

### 整理・報告書作成事業の概要

鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡の整理・報告書作成作業は、平成18年11月～平成19年12月に行った。

#### 平成18年度

11	整理作業開始。図面・遺物の分類、点検。
12	石器選別、土器接合、土器分類、科学分析委託
1	土器分類・実測、遺構実測
2	土器分類・実測、遺構実測
3	土器分類・実測、遺構実測

#### 平成19年度

4	土器分類・実測、遺構実測・仮レイアウト
5	遺構配置図作成、石器実測委託・科学分析委託、遺物実測、遺構仮トレース
6	土器実測・拓本、土器接合・復元、データ入力
7	石器実測委託見直し、土器・石器実測、データ入力
8	石器実測委託見直し、土器・石器実測、データ入力
9	土器実測・トレース、遺構トレース
10	土器実測・トレース・拓本、石器レイアウト、遺構レイアウト
11	遺構レイアウト、遺物レイアウト、原稿
12	遺構・遺物レイアウト、遺物写真撮影、原稿
1	原稿校正、一般遺物の収納
2	校正、遺構図面及び遺物の実測図等整理
3	校正、報告書納品、報告書作成作業終了

## 第Ⅱ節 遺跡の位置及び環境

### 第1節 遺跡の位置及び自然環境

鷺ヶ追遺跡、北原中遺跡、宇都上遺跡は、鹿兒島県鹿屋市花園町の小字鷺ヶ追、小字北原中、小字宇都上に所在し、以前、根本原遺跡B地点、C地点、F地点と仮称していた遺跡である。鹿屋市は大隅半島の中央部に位置する。平成18年1月には周辺地域と合併し、人口10.6万人を有する、県内3位の都市となった。

1889年（明治22）市町村制により、鹿屋郷は鹿屋村、花園郷は花園村、大始良郷は大始良村、高隈郷は高隈村となる。1912年（大正元）鹿屋村は鹿屋町となる。1941年（昭和16）5月27日、鹿屋町・花園村・大始良村の1町2村が合併し鹿屋市となる。1955年（昭和30）高隈村と合併、昭和33年には垂水町大字新城のうち根本原・桜町を編入する。その後、平成の大合併で平成18年1月1日、周辺の輝北町・串良町・吾平町と合併し、新制鹿屋市となり現在に至る。

市街地の北部には、大笠柄岳<sup>おおかさねだけ</sup>（1,236m）を主峰とし、横岳、御岳など1,000m級の山系が連なり、この高山を総称して高隈山とよんでいる。地質は中生層の砂岩・泥岩・粘板岩が主で西部に花崗岩がみられる。杉類の植林がみられ本県の主要な林産資源地であり、本城・高須・高隈の各河川等の源をなしている。山頂からの展望は絶景で桜島・薩摩半島等がみられ、高隈山県立自然公園となっていて、ハイキングコースとしても親しまれている。

東部から北部にかけては、鹿兒島湾奥に形成された始良カルデラにより、噴出した（約24,000年前）といわれる入戸火砕流堆積物（シラス）により形成された、標高50～170mの広大な笠野原台地が広がっている。高隈山系を源とする高隈川が串良川・肝属川と名称を変えながら、この笠野原台地を侵食し谷底平野を形成し、市の中心部を流れ、市街地を向きを変えながら東へ流れている。高隈川には笠野原畑灌漑を目的とする高隈ダムが1967年（昭和42）建設され、これによってできた人造湖は大隅湖とよばれている。市の西側は、肝属川同様、高隈山系を源とする高須川がほぼ南へ流れ、鹿兒島湾に注いでいる。

本遺跡は鹿屋市役所より北西8.4kmにあり、高隈山系の扇状地にあたる標高約130mの丘陵上に所在する。本遺跡周辺の堆積物は入戸火砕流堆積物を基盤として、厚さ約7mに及ぶ。入戸火砕流の上の一般的な堆積物と違って、このように厚いのは遺跡周辺の地形が丘陵に囲まれた凹地状をなし、ここに周囲の丘陵から土石流として堆積物が供給されてきたことによる。このため現在のこの台地表面は扇状地または麓斜面と呼ばれる地形からなり、扇状地に緩く傾斜する。このような堆積環境下にあるため、角礫と有機質の粘土・シルトの混在した堆積物がこの地層の大部分を占めている。展望はよく北に桜島、西側には雄大な錦江湾が望まれ、夕日に輝く閑閑岳は絶景である。遺跡に隣接して、江戸時代の享保年間に造立された円覚山真如院跡や、花園島津家墓地が残存し、鶴羽小学校の周辺には麓集落が形成されている。

## 第2節 歴史的環境

遺跡のある花岡町の台地は昭和60年代に圃場整備がなされ、狩俣遺跡、鶴羽遺跡、俣刈遺跡、早山遺跡、宮の脇遺跡の発掘調査が行われていて、旧石器時代、縄文時代（草創期、早期、前期、中期、後期、晩期）古代、中世の遺構・遺物が検出されている。昭和59年度発行の遺跡地名表では、鹿屋市は173箇所の遺跡が紹介されているが、昭和60年代から始まった鹿屋バイパス、古江バイパス建設に伴う発掘調査が行われたこと等により、245箇所の遺跡が現在紹介されている。また、平成18年度の合併により、旧輝北町・旧中良町・旧吾平町の遺跡が鹿屋市の遺跡に統合され、遺跡数は550箇所に増加した。そこで、周辺遺跡と併せて主な遺跡を時代順に紹介したい。

### 旧石器時代

鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査により、榎崎A遺跡では細石器文化期の遺物が、榎崎B遺跡では多くの礫群とビット群に伴い、細石器と局部磨製石斧が検出された。西丸尾遺跡では、細石器とナイフ形石器文化の両文化期の遺構、遺物が検出されており、水晶製の細石刃、細石刃核が特に注目された。また、古江バイパス建設に伴う中野西遺跡、松山川西遺跡（根本原遺跡A地点）の発掘調査でも、ナイフ形石器文化期、細石器文化期の遺物が多数出土し、礫群3基が確認されている。

### 縄文時代

鹿屋市には、縄文時代の重要な遺跡が数多く存在する。草創期の遺跡として、南町の伊敷遺跡が著名である。薩摩火山灰下部の層より、隆帯文土器と石斧が検出された。根本原遺跡A地点では、草創期に該当すると思われる土器を始め、早期の岩本土器や中期の春日式土器等の遺物が確認されている。本遺跡の所在する、根本原地区、花岡地区にも多数の縄文時代の遺跡が報告されている。昭和57年発行の大隅地区埋蔵文化財分布調査概報において、後期の貝殻条痕文土器の表採が報告され、昭和59年の鶴羽遺跡の確認調査で、縄文時代の土器、石器が確認されており、宮の脇遺跡でも早期の貝殻条痕土器や、晩期の土器が出土している。更に昭和61年の柿窪遺跡の発掘調査では、早期、晩期の土器が出土している。

### 弥生時代

水ノ谷遺跡、榎木原遺跡では、前期から中期にかけての資料が検出されている。特に板付Ⅱ式の壺や甕の出土、榎木原遺跡の西瀬戸内の影響を思わせる縦位突帯を持つ壺等の出土は、当時の大隅半島の状況を知る上で貴重な資料となっている。王子遺跡は中期から後期初頭の大集落跡で、27基の住居跡が検出されている。検出された花卉状住居や、棟持柱付の掘立柱建物や、土坑を持つ住居跡は、九州地方の弥生時代の集落構成を知る上で、考古学、建築学に大きな指針を与えた。出土した遺物は、在地の山ノ口式土器と瀬戸内系や北九州の土器が共伴し、弥生時代の文化圏や交流状況を考えさせる重要な資料でもある。王子遺跡は以上の学術的見地から、古代の南九州を知る上で貴重な遺跡という事で注目を集めた。中ノ丸遺跡では、中期末から、後期初頭にかけての竪穴住居や円形周溝遺構が検出され、中ノ原、前畑遺跡でも木時期の遺構、遺物が検出されている。高付遺跡では、中期から古墳時代にかけての河内、瀬戸内、東九州地方の影響を考えさせる資料が検出された。

## 古墳時代

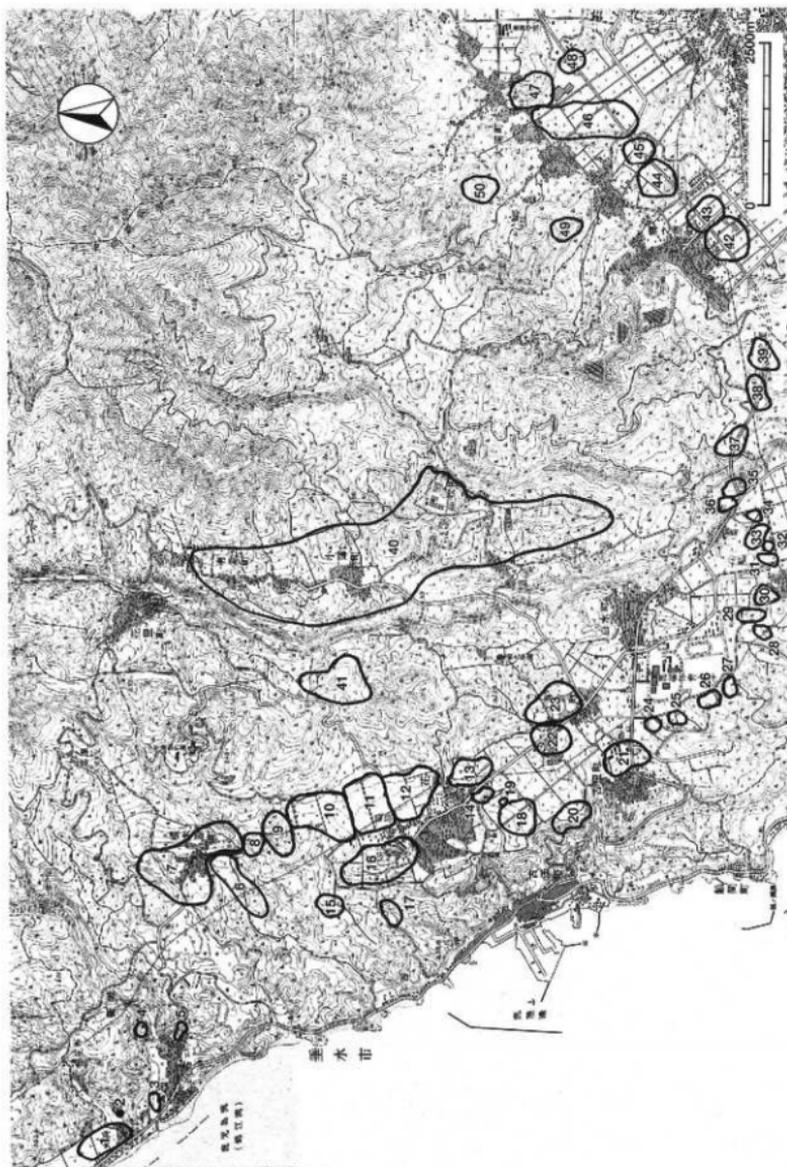
大隅半島志布志湾沿岸や肝属平野は、畿内型高塚古墳や地下式横穴墓の本原における分布の中心となっている。鹿屋地方では、西蔵川町の円墳3基と、短甲、衝角付冑が出土した地下式横穴墓、野里町の地下式横穴墓が知られている。南九州の古墳時代の土器は地域色が強く、一般に「成川式土器」と呼ばれ、甕形土器が突帯と脚台をもち、弥生時代以降、型式は変化するものの「土師器化」することなく存在し続けた土器である。この成川式土器が大隅半島では数多く出土し、また根本原地区、花岡地区でも出土しており、古墳時代の活動拠点の範囲の広大さがうかがえる。本字台の生活遺構としては、成川式土器を主体とした早山遺跡、宮の脇遺跡、上原遺跡、鶴羽遺跡、俣刈遺跡が知られ、根本原遺跡においては、A、B、C、D、E、F地点すべての遺跡から成川式土器が出土し、住居跡や溝状遺構、土坑等の遺構も多数検出されている。

## 古代～中・近世

鹿屋市内で確認されている奈良時代から平安時代の遺跡として、飯壺ヶ岡遺跡、榎崎A、B遺跡、宮の脇遺跡があげられる。宮の脇遺跡では、青銅器の帯金具が出土しており、古代官位制を示す貴重な資料として注目されている。中ノ原、中の丸遺跡からは、中世から近世にかけての遺構、遺物が検出されている。花岡地区においては、宮の脇遺跡、鶴羽遺跡等、古代から近世にかけての遺跡が所在する。近世の花岡は外城の一つであり、花岡島津氏の所領として古くから栄え、同家の居城として鶴羽城が残る。

## 〈参考・引用文献〉

- 「鹿屋市史」鹿屋市史編集委員会 1967年  
「王子遺跡」鹿児島県教育委員会 1985年 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)  
「榎崎A遺跡」鹿児島県教育委員会 1992年 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(63)



第3図 周辺遺跡

第2表 周辺遺跡(1)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
1	宮下	11-91	垂水市新成人浜	縄文(後・晩) 弥生・古墳 中世	西平式・黒川式・石皿・楕形石器等 弥生土器・成川式土器 土師器	1
2	新城農協	11-17	垂水市新成農協製粉工場	弥生	罌・壺・高坏・皿	2
3	佃	11-94	垂水市新成	古墳	成川式土器	2
4	井ノ尾	11-93	垂水市新成	古墳	成川式土器	2
5	新城跡	11-06	垂水市新成麓字中原	縄文・弥生	縄文土器・石斧・弥生土器	3
6	柿窪	12-168	鹿屋市根本原町柿窪	縄文 古墳 古代~中世	刻日穴布文・黒川式・組織痕・石斧等 成川式(罌・壺・鉢・埴) 土師器(罌・坏)・須恵器・土鍬	4 5
7	根本原	12-240	鹿屋市花岡町	縄文・古墳	成川式土器	4
8	中野西		鹿屋市花岡町	旧石器 古墳 古代	礫群・ナイフ形石器・細石刀核 土坑・成川式土器 土質鉄剣・鉄鏃・須恵器・土師器	6
9	松山田西		鹿屋市花岡町	縄文 古墳	集石・石鏃 竪穴住居跡・土坑・成川式	6
10	鷺ヶ池		鹿屋市花岡町	旧石器 縄文 古墳	落し穴、三稜尖頭器・植石器等 落し穴、春日式・黒川式・石鏃等 竪穴住居跡・溝、成川式・軽石製品等	本文
11	北原中		鹿屋市花岡町	縄文 古墳 中世	集石、壺ノ神式・黒川式・石鏃等 竪穴住居跡、成川式土器	本文
12	須家西		鹿屋市花岡町	縄文 古墳 中世	集石・土坑、入佐式・黒川式・石斧等 竪穴住居跡・溝、成川式(罌・壺・鉢 ・高坏・埴)・石産丁・鉄器等 掘立柱建物跡・配石遺構・竪穴遺構・ 円形燗溝、石鍋・陶磁器・古鏡	
13	天神平澤下		鹿屋市花岡町	縄文 古墳 古代~近世	集石・土坑、市来式・石鏃 竪穴住居跡・道跡、成川式・勾玉等 溝状遺構・岳鏡、土師器・陶磁器等	
14	宇都上		鹿屋市花岡町	縄文 古墳 古代~中世	集石、摺留式・市来式・黒川式等 成川式土器 土坑・溝・道跡、土師器・陶磁器等	本文
15	城ヶ崎	12-169	鹿屋市花岡町城ヶ崎	縄文 古墳	前平式・石斧 成川式土器	4
16	鶴羽城跡	12-043	鹿屋市花岡町鶴羽	縄文 古墳 中世	石板式・晩期土器(深鉢・浅鉢) 成川式土器 土師器(罌・碗・坏)・須恵器	7
17	大久保	12-170	鹿屋市古江町大久保	古墳	成川式土器	2

第3表 周辺遺跡(2)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
18	早山	12-027	鹿屋市花岡町早山・宮ノ脇	縄文 弥生 古墳 古代～中世	草野式・市来式・晚期土器 山ノ口式 竪穴住居跡、成川式(壺・壺・埴等) 土師器・焼塩壺・青銅製帯金具	8
19	横山3	12-082	鹿屋市横山町	古墳	土器片	9
20	枯木ヶ尾	12-026	鹿屋市小里町枯木ノ尾	弥生・古墳	弥生土器・成川式・須恵器	10
21	古里	12-044	鹿屋市古里町	縄文・弥生・古墳	縄文晩期土器・石器・成川式土器	11
22	本戸口	12-087	鹿屋市海邊町本戸口			2
23	侯刈	12-028	鹿屋市海邊町侯刈道	縄文・古墳	成川式	2
24	小里B	12-145	鹿屋市古里町	古墳・中世	成川式・土師器	2
25	小里A	12-144	鹿屋市古里町	古墳・中世	。	2
26	石鉢谷B	12-143	鹿屋市白水町	古墳・中世	成川式・土師器	2
27	石鉢谷A	12-142	鹿屋市白水町	古墳・中世	。	2
28	宇戸平	12-141	鹿屋市小野原町	縄文(早)	壺ノ神式	2
29	山ノ上B	12-140	鹿屋市小野原町	古墳・中世	成川式・土師器	12
30	山ノ上A	12-139	鹿屋市小野原町	古墳・中世	成川式・土師器	12
31	白水B	12-138	鹿屋市白水町	縄文 古墳	集石、下割釜式・黒川式・石鏃・石斧 上坑・古道、成川式土器	2
32	萩ヶ尾B	12-137	鹿屋市白水町	古墳・中世	成川式・土師器	2
33	萩ヶ尾A	12-136	鹿屋市白水町	縄文 古墳	集石 成川式土器	2
34	白水A	12-135	鹿屋市白水町	古墳・中世	。	2
35	西丸尾	12-133	鹿屋市白水町西丸尾	旧石器 縄文	ナイフ形石器・剥片尖頭器・舟形石器 ・スクレイパー・彫器・敷石・細石刃 ・細石刃核・石斧 前平式・壺ノ神式・石鏃	13
36	西丸尾B	12-134	鹿屋市白水町西丸尾	旧石器・ 縄文 古墳	土坑・剥片 集石、前平式・石坂式・石皿・石斧等 成川式土器	14
37	榎崎B	12-132	鹿屋市郷之原町榎崎	旧石器 縄文 古墳 古代	礫群、細石刃・細石刃核・石斧等 集石・石坂式・壺ノ神式・黒川式等 竪穴住居跡・成川式 掘立柱建物跡・須恵器・土師器・刀子	15・16
38	榎崎A	12-131	鹿屋市郷之原町榎崎	旧石器 縄文 弥生 古墳 古代	礫群・細石刃核・スクレイパー等 集石、前平式・押型文・壺ノ神式等 下城式土器 溝状遺構、成川式土器 周溝墓・掘立柱建物跡、須恵器・土師器・焼塩壺・砥石等	17

第4表 周辺遺跡(3)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
39	飯盛ヶ岡	12-130	鹿屋市小野町飯盛ヶ岡	縄文 弥生 平安	集石・土坑、石板式・市来式・菅玉等 竪穴住居跡、山ノ口式・崩製石鏃等 土師器	18
40	小浦町遺跡群	12-41	鹿屋市小野町・有武町・高牧町	縄文(早・前・後) 古墳		11
41	柴立	12-42	鹿屋市花園町柴立	縄文(後)・古墳	条痕文・メンコ・沈線文	11
42	前畑	12-129	鹿屋市郷之原町前畑	縄文	集石、石板式・押型文・平柵式等	19
				弥生	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・円形周溝 山ノ口式・須久Ⅱ式・磨製石鏃等	20
				近世	近世墓・古銭・銅玉・ガラス玉 戦跡遺構(掩体壕・誘導路)	21 22
43	中原山野	12-128	鹿屋市郷之原町中原山野	縄文	集石、下割葦式・平柵式・白石等	23
				弥生	竪穴住居跡、山ノ口式(壘・壘・鉢)	24
				近世	戦跡遺構(掩体壕・誘導路)	
44	川の上	12-40	鹿屋市大浦町松横川の上	中世	供養塚2	11
45	中ノ丸	12-127	鹿屋市大浦町中ノ丸	縄文	竊式・曾畑式・指宿式・石鏃・石皿等	25
				弥生	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・円形周溝 土坑、山ノ口式・砥石等	
				中世～近世	掘立柱建物跡・土坑・陶磁器等	
46	中ノ原	12-126	鹿屋市大浦町中ノ原	縄文	竪穴住居跡、集石・土坑、石板式・曾 畑式・指宿式・入佐式・石鏃・磨石等	26～30
				弥生	竪穴住居跡・掘立柱建物跡、溝状遺構 山ノ口式(壘・壘・鉢)	
				中世～近世	土師器(埴)	
47	大浦	12-38	鹿屋市大浦町	縄文 古墳	縄文土器 地下式横穴墓	11
48	榎田下	12-125	鹿屋市大浦町榎田下	縄文(前・後)	竊式・曾畑式・指宿式・市来式・石鏃 ・石斧・磨石・石皿	25
49	郷之原	12-39	鹿屋市郷之原町	縄文・古墳	土器片・石器	11
50	耳取ヶ丘	12-92	鹿屋市大浦町耳取ヶ丘			9

引用文献

- 1 「宮下遺跡」 2001 垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書 5
- 2 鹿児島県市町村別遺跡地名表
- 3 「鹿児島県の中世城館跡」1987 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書40
- 4 「柿窪遺跡・大久保遺跡・城ヶ崎遺跡」1987 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 5 「柿窪遺跡(Ⅱ)」1995 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書37
- 6 「中野西遺跡・松山田西遺跡」2004 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書76
- 7 「仮弓遺跡・鶴羽遺跡」1985 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 3
- 8 「早山遺跡・宮の脇遺跡」1986 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 4
- 9 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」1983 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書25
- 10 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」1980 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書13
- 11 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」1982 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書23
- 12 「山ノ上B遺跡」1996 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書43
- 13 「西丸尾遺跡」1992 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書64
- 14 「西丸尾B遺跡」1994 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
- 15 「榎崎B遺跡」1993 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 4
- 16 「榎崎B(Ⅰ)遺跡」1993 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書33
- 17 「榎崎A遺跡」1992 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書63
- 18 「飯盛ヶ岡遺跡」1993 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 3
- 19 「中ノ原遺跡(Ⅱ)・中原山野遺跡・西原掩体壕跡・前畑遺跡」1990 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書52
- 20 「前畑(あけほの)遺跡・立神遺跡(Ⅱ)」1990 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書18
- 21 「前畑(Ⅱ)遺跡」1992 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書25
- 22 「前畑(Ⅲ)遺跡」1995 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書36
- 23 「中原山野遺跡」2007 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書114
- 24 「中原山野遺跡」1997 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書35
- 25 「概要編・板田下遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡・中ノ原遺跡」1989 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書48
- 26 「中ノ原(Ⅰ)遺跡」1993 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書34
- 27 「中ノ原(Ⅱ)遺跡」1995 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書35
- 28 「中ノ原(Ⅲ)遺跡」1995 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書40
- 29 「中ノ原(Ⅳ)遺跡」1995 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書41
- 30 「中ノ原(Ⅴ)遺跡」1997 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書46



第2図 年度別調査地点

## 第三章 発掘調査の概要

### 第1節 調査の概要

鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡は、鹿屋市花岡町高約66mのシラス台地上に位置する。

約2600mの長さの根本原遺跡は、北に桜島、南西方向には錦江湾越しに開聞岳が望める絶景の地に位置している。昭和50年代に圃場整備が行われている為、旧地形が想定しづらく発掘調査によって遺跡内で谷部がみられ、遺跡が分雑されることが判明した。そのため遺跡は、中野西遺跡・松山田西遺跡・鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・領家西遺跡・天神平溝下遺跡・宇都上遺跡と7箇所の遺跡に区割りされ、小字名から上記のような名称に変更した。

#### 鷲ヶ迫遺跡

鷲ヶ迫遺跡の調査は道路新設工事図面のSTA.192とSTA.193を基準に10m間隔の区割りを設定した。平成10年度の確認調査の結果に基づいて、表土は重機にて排除し、Ⅱ層の全面調査を実施した。Ⅲ層下位は区割りに沿ってトレンチを設定し、下層確認を行った結果、古墳時代・縄文時代晩期の遺物がⅢ層に包含されていたことが確認されたため、Ⅲ層までは全面調査を行った。また、Ⅵ層から旧石器時代の石器が出土したため、Ⅳ・Ⅴ層は重機で排除し、Ⅵ層以下は2m四方の区割りを設定し調査を進めたが、旧石器時代の遺物集箇所は検出されなかった。

遺構・遺物は旧石器時代の礫群や落とし穴が検出され、三稜尖頭器・台形石器・細石刃・細石刃核・スクレイパー・植刃器等が出土した。

縄文時代時代では早期の落とし穴が検出され、前期の管燵式土器・春口式土器等や石鏃・スクレイパー・凹石・蔽石・磨石・石皿等が出土した。

古墳時代では、堅穴住居跡・土坑・溝状遺構等が検出され、成川式土器が出土した。

#### 北原中遺跡

北原中遺跡も鷲ヶ迫遺跡の区割り基準を延長して設定した。北側から1～23区、東からA～E区と名称し、調査を行った。

遺構・遺物は縄文時代の集石と晩期の入佐式土器・黒川式土器・組織文土器や石鏃・石斧・磨石等が出土した。

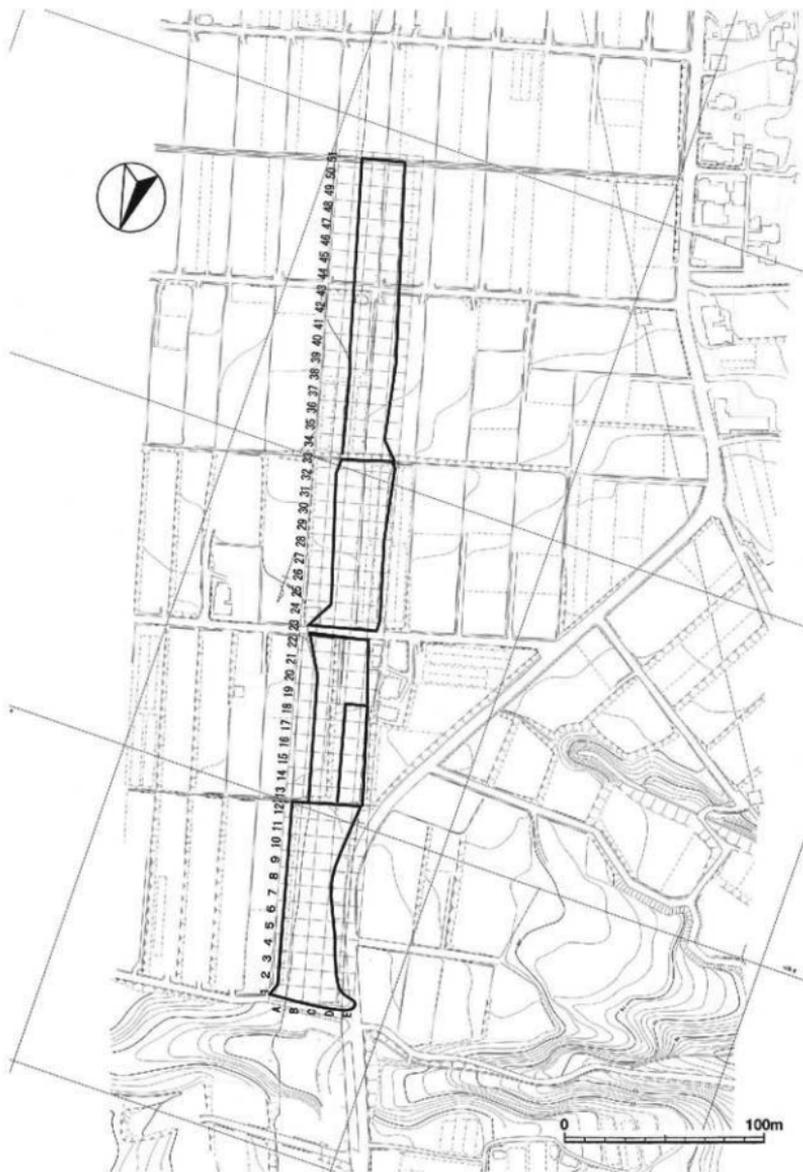
古墳時代では、堅穴住居跡・土坑・溝状遺構等が検出され、成川式土器が出土した。

#### 宇都上遺跡

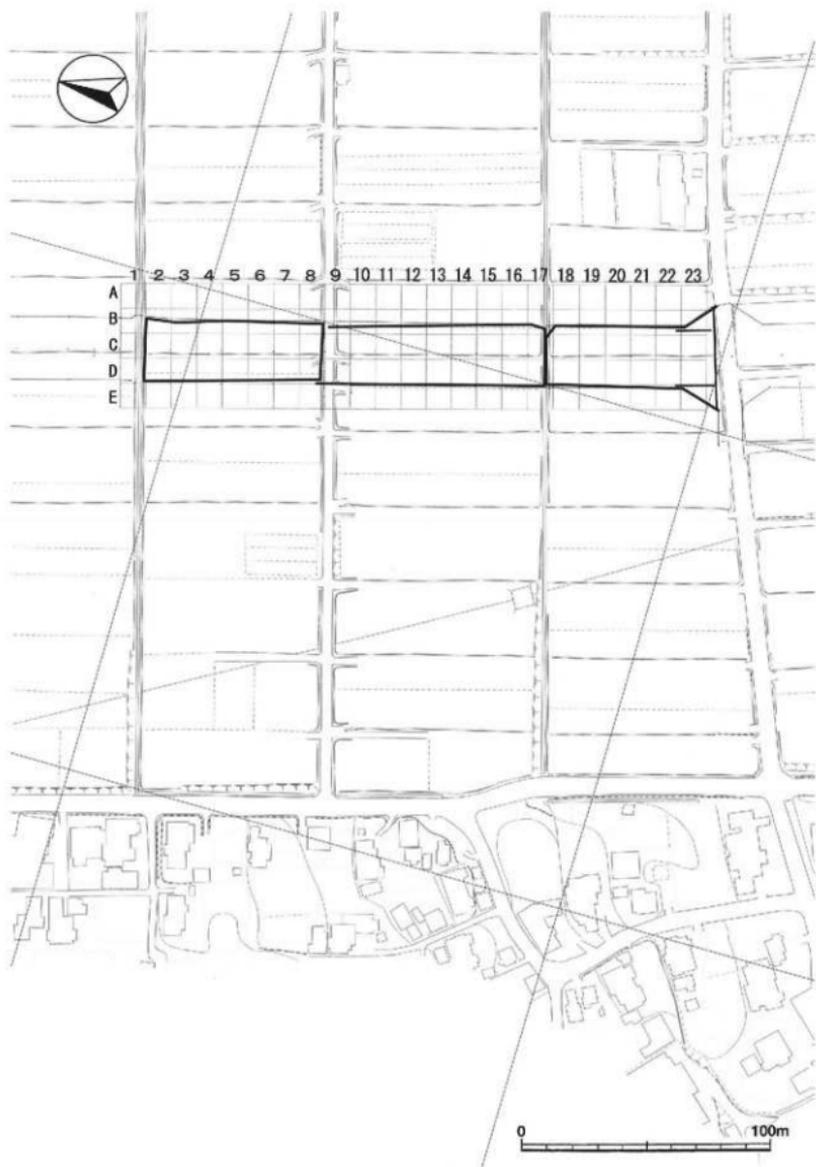
宇都上遺跡は道路新設工事図面のSTA.192とSTA.180を結ぶ線を基軸に、北側から1～12、西側からA～F区と名称し、10m間隔の区割りを設定して調査を行った。

遺構・遺物は、縄文時代の集石1基と市来式土器・丸尾式土器等の後期土器と石鏃・石斧・蔽石等が出土した。

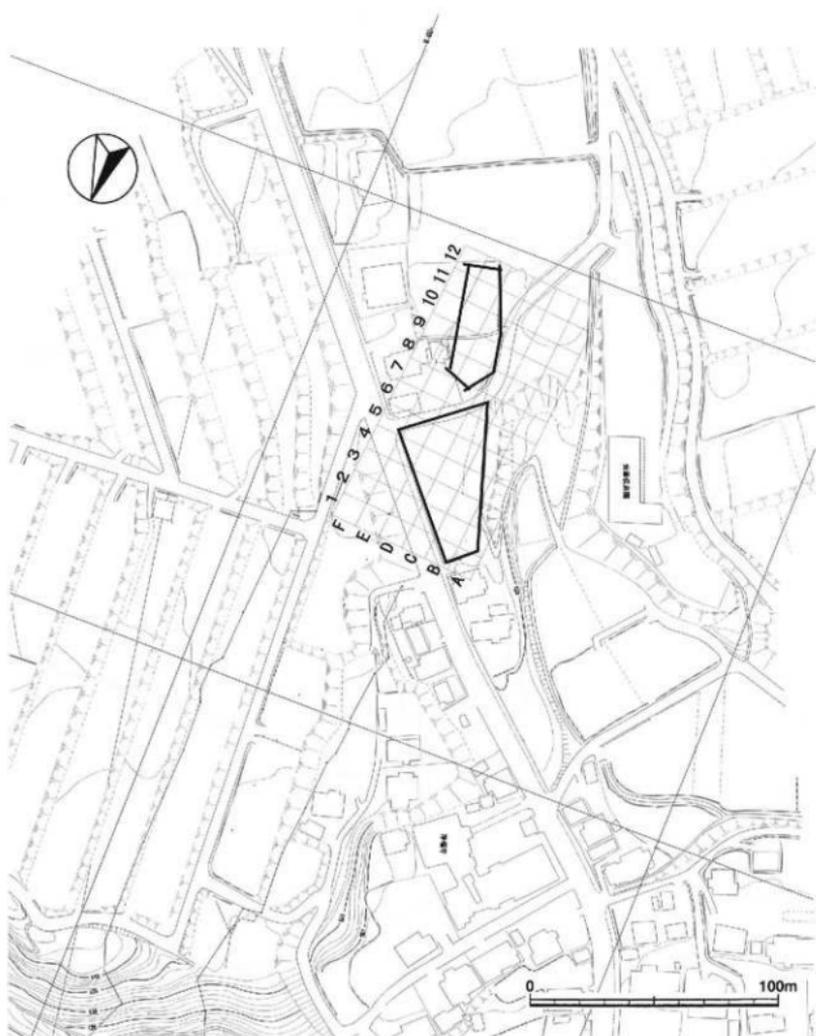
古墳時代では成川式土器が出土し、古代～中世では土坑・溝状遺構・道跡等が検出され、第2次大戦の防空壕跡も検出された。出土遺物は須恵器・土師器・陶磁器・滑石製品等が出土した。



第4図 鷲ヶ迫遺跡周辺地形図



第 5 図 北原中遺跡周辺地形図



第6图 宇都上遺跡周辺地形图

## 第2節 層位

鶯ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡の基本土層は、発掘中の土層区分を参考に行ったが、報告書作成中に矛盾が生じたため、層位は同一にしたが、表現と色調名を変更せざるを得なかった。その理由については、各層位の中で説明を加えた。

V	V
I a	
I b	
II a	
II b	
III a	
III b	
III c	
IV	
V	
VI	
VII	
VIII	
IX	
X	

I層：黒褐色の耕作土。色調によって2～3層に区分できる。調査時点では、現耕作土・旧耕作土を分層していたが、耕作土は一括した土層にし、その中で細分化できるものはa・b・c…と分層した。

II層：黒色腐植土。削平されている箇所が多く、部分的にしかみられないところもある。

III層：下部は、約6,400年前の鬼界カルデラ起源のアカホヤ（幸屋火砕流）に対比される黄褐色軽石で、上部はその火山灰に有機質が混在したもので、粘質が弱く、径2mm前後の軽石を含む黄褐色火山灰土である。また、中位程に、約5,500年前の池田カルデラ起源の池田軽石が部分的にみられるところもある。上部に縄文時代前～晩期及び古墳時代の遺物が包含されている。

IV層：淡褐色火山灰土。やや灰色を帯びた硬質の火山灰で、比較的細粒である。下部に縄文時代早期の遺物が包含している。

V層：暗茶褐色火山灰土。調査時点では、暗オリーブ褐色土と表現していたが、曖昧であったため変更した。やや濃い褐色で粘質が強く、径5mm前後の軽石が混じる。

VI層：この層は約11,500年前の核島起源の軽石（薩摩火山灰）である。

VII層：暗茶褐色粘質火山灰土。極めて微粒で粘質が強く、乾くとクラックが発達する。旧石器時代細石器文化～縄文時代草創期の遺物が包含されている。通称チョコ層とも呼ばれている。

VIII層：茶褐色粘質火山灰土。微粒で粘質が強く、乾くとクラックが発達する。

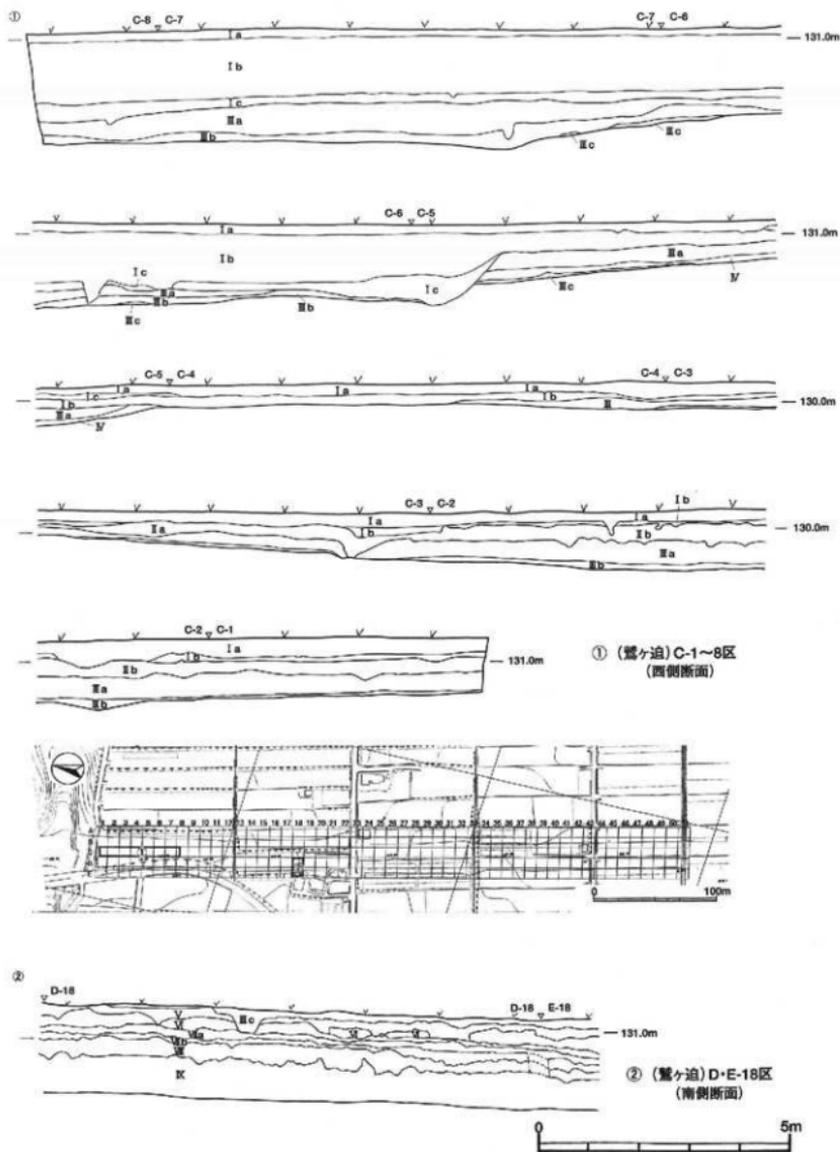
IX層：淡黄白色土でシラスと呼ばれているものである。これは約25,000年前の始良カルデラ起源の火砕流堆積物であり、南九州一帯を覆っている。

X層：黄色軽石で大隅降下軽石と呼ばれているものである。

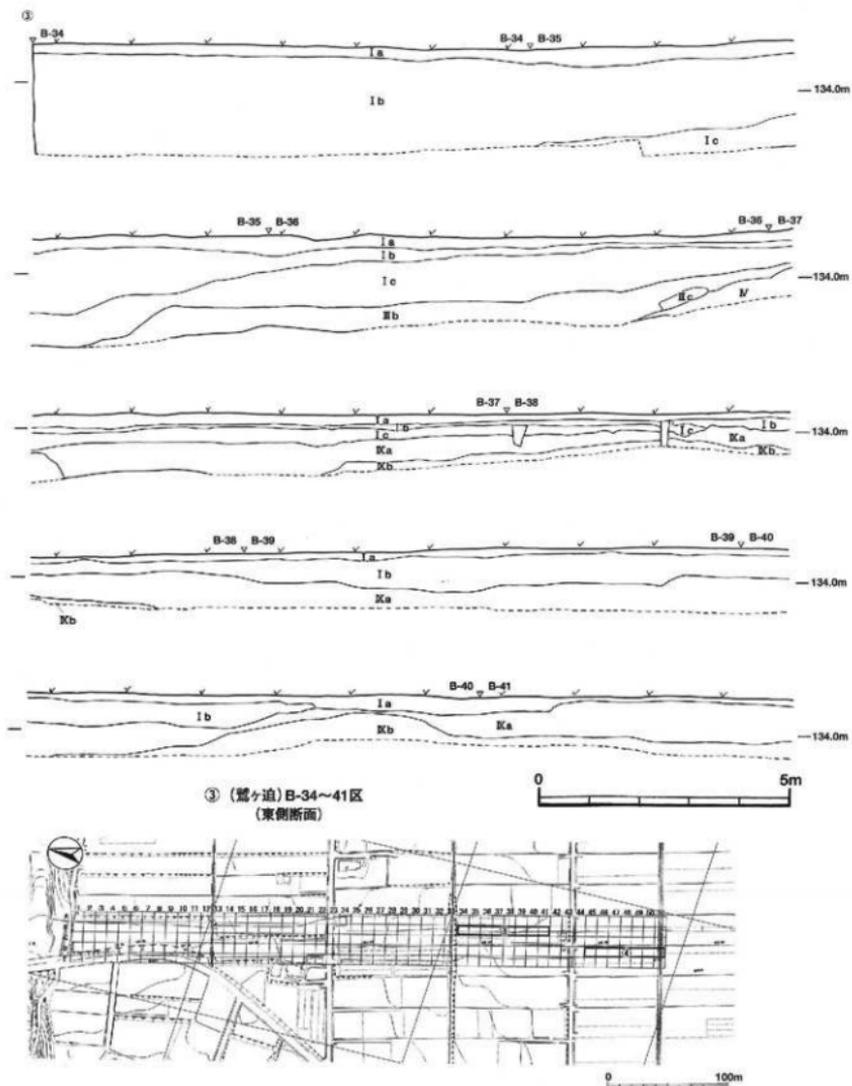
第7図 基本土層模式図

櫻崎A(報告書)		中野西(報告書)		根木原(発掘)		鷺ヶ迫他基本土層図	
Ia	耕作土	I	耕作土	I	暗褐色土	Ia	黒褐色土
Ib	旧耕作土	II	旧耕作土	II	褐色土	Ib	淡黒褐色土
I	黒色砂質土	IIa	黒茶褐色土	IIa	黒色土	IIa	黒色腐植土
IIa	暗黒褐色火山灰土	IIb	茶褐色土	IIb	オリーブ褐色土	IIb	黒褐色土
IIb	褐色火山灰土	IIIa	黄褐色火山灰土	IIIa	淡褐色土	IIa	淡褐色土
IIIa	暗黄褐色火山灰土	IIIb	淡褐色土	IIIb	褐色土	IIb	黄褐色火山灰土
IIIb	粘の強い 明黄褐色火山灰土	IIIc	黄褐色火山灰土	IIIc	黄褐色火山灰土	IIIc	黄褐色軽石
V	青灰色火山灰土	V	淡茶褐色土	V	オリーブ黄色土	V	淡茶褐色土
VIa	腐層火山灰土	VI	暗茶褐色土	VI	暗オリーブ褐色土	V	暗茶褐色土
VIb	オレンジバミス含む	VII	黄茶褐色土	VII	明黄褐色火山灰土	VI	黄褐色軽石
VIIa	暗茶褐色ローム	VIII	暗茶褐色粘質土	VIII	黒褐色粘質土	VII	暗茶褐色 粘質火山灰土
VIIb	黒褐色ローム	IX	淡茶褐色硬質土	IX	暗褐色硬質ローム	VII	茶褐色粘質火山灰土
VIIIa	茶褐色粘質土	X	黄褐色凝結粘質土	X	黄白色土	IX	淡黄白色土
VIIIb	淡茶褐色粘質土	XI	黄白色土	XI	黄色軽石	X	黄色軽石
VIIIc	大隅降下軽石	XII	黄色軽石				

第8図 周辺遺跡土層比較図



第9図 鷺ヶ迫遺跡土層図(1)



第10図 鷺ヶ迫遺跡土層図 (2)





跡遺迫ヶ鷺

## 第Ⅳ章 鷺ヶ迫遺跡

### 第Ⅰ節 発掘調査の概要

鷺ヶ迫遺跡の調査は道路新設工事図面のSTA.192とSTA.193を基準に10m間隔の区割りを設定した。平成11年度から確認調査及び本調査を行ったが、用地買収に手間取り変則的な発掘調査になった。そのため、平成11・12・16・18年度に発掘調査を行った。

その結果に基づいて、表上は重機にて排除し、Ⅱ層の全面調査を実施した。Ⅲ層下位は区割りに沿ってトレンチを設定し、下層確認を行った結果、古墳時代・縄文時代晩期の遺物がⅢ層に包含されていたことが確認されたため、Ⅲ層までは全面調査を行った。また、Ⅵ層からⅡ石器時代の石器が出土したため、Ⅳ・Ⅴ層は重機で排除し、Ⅵ層以下は2m四方の区割りを設定し調査を進めたが、Ⅱ石器時代の遺物集中箇所は検出されなかった。

### 第Ⅱ節 旧石器時代の調査

Ⅶ層からは、旧石器時代～縄文時代草創期の遺物が出土した。遺物は29～38区、44～50区に集中し、遺構は礫群・落し穴が検出された。遺物の出土状況はブロック状であったが、境界が不鮮明な箇所も多く一括して取り上げた。

#### 礫群（第14図）

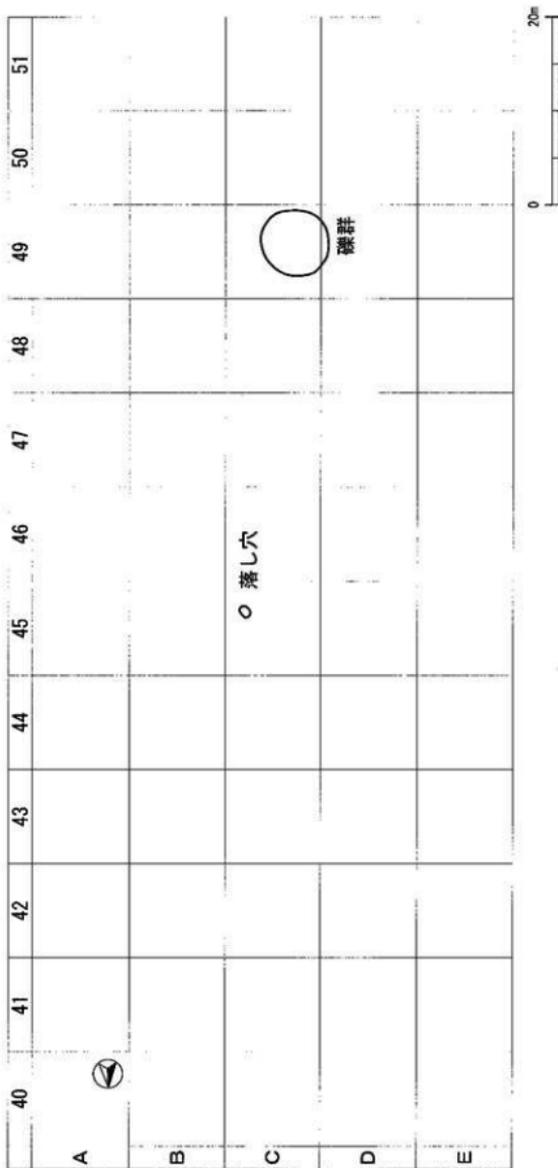
C49区Ⅶ層上面で、検出したものである。Ⅶ層下面より旧石器時代の遺物が出土することから、調査区（34～50区）に2×2mの区割りを設定し、千鳥掘りで掘り下げを行った。その結果、C49区Ⅶ層下部からⅦ層上部にかけて礫がまばらに検出された。その周辺を慎重に掘り下げを行った結果、拳人の礫が多数出土した。礫群は2m四方に円形状の範囲に434個の大小の砂岩の角礫・円礫が集中して検出された。これらの礫の表面は赤化しており、火熱の影響を受けたものと考えられる。礫はやや小ぶりで、拳人よりも少し小さめであった。この礫群の周囲からは、細石刃・剥片・植石器が出土し、土器片の出土がないことからこの礫群は旧石器時代のもと考えられる。

#### 落し穴（第15図）

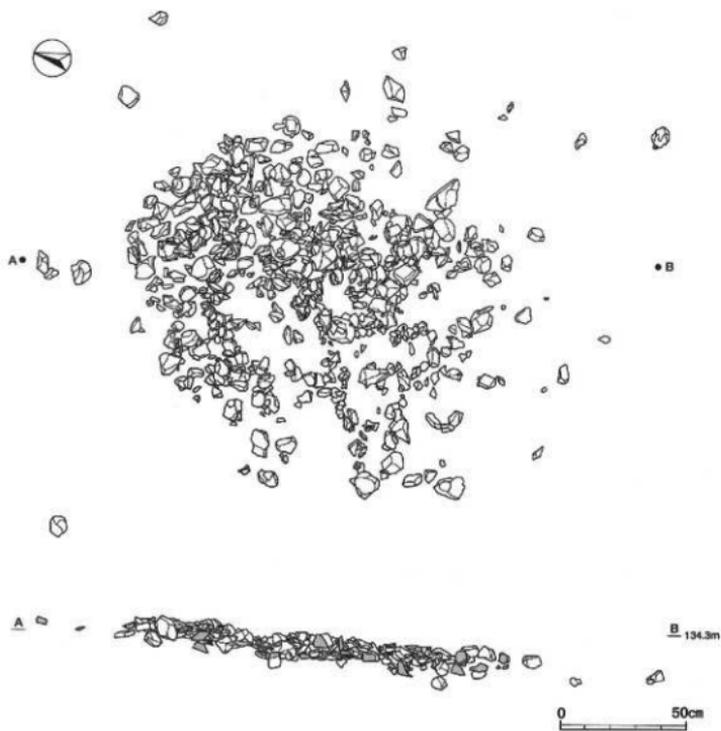
C45区Ⅳ層上面で検出したものである。粘質土であるⅦ層を掘り下げて、Ⅳ層上面で100×70cmの隅丸方形の遺構を検出した。西側半分を半裁したところ底面にピットが確認された。これにより落し穴の可能性が高いと判断し、西側からスライス調査を行った。その結果、底面は70×50cmを測り逆茂木痕を検出できた。この落し穴の深さは検出面から約50cmを測り、逆茂木痕は10箇所確認できた。逆茂木痕の深さは底面から15～20cmを測る。

#### 遺物

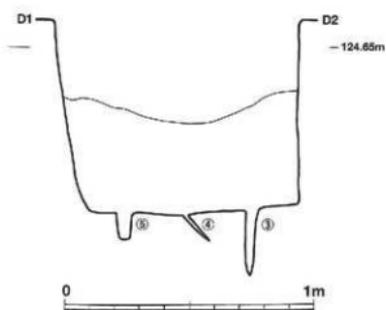
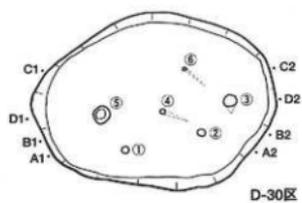
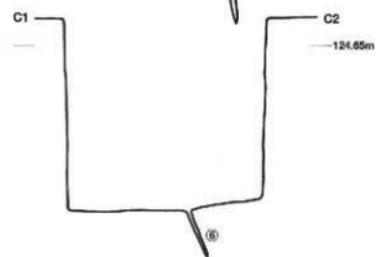
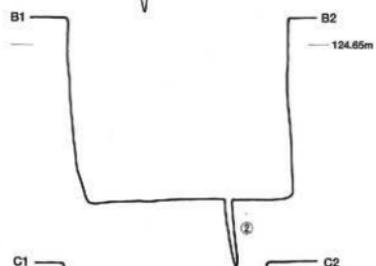
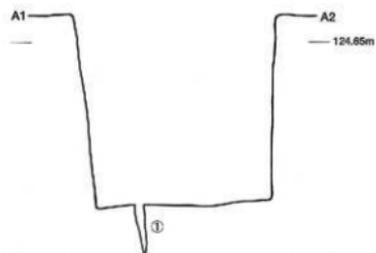
Ⅱ石器時代の遺物は29～38区、44～50区のⅦ層に集中して出土した。ナイフ形石器8点、台形石器9点、三稜尖頭器4点、スクレイパー6点、細石刃20点、植石器2点、ブランク2点、楔形石器1点と剥片・チップが出土した。



第13図 VII層検出遺構配置図



第14図 螺群



第15図 落とし穴

A	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
B													
C													
D													
E													

A	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
B													
C													
D													
E													

A	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	
B														
C														
D														
E														

A	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
B												
C												
D												
E												



第16圖 VII層出土狀況

石材は、黒曜石、頁岩、安山岩、チャート、砂岩、花崗岩等であり、黒曜石は肉眼的観察により、県内産の三船、平木場、上牛鼻、桑ノ木津留、県外産の腰岳、針尾、椎葉川などがみられた。なお、大口市の日東産黒曜石は、五女木や狸々といった原産地が付近にあり、肉眼的な区別は困難であった為、「日東産系」もしくは「日東産」と、まとめて分類した。今後、科学的な分析で正確な分類を行ってきたい。

#### ナイフ形石器 (第17図, 1~8)

1~6は三船産黒曜石を素材としている。1は縦長剥片を用いており、背部にはわずかに刃つぶり加工がほどこされている。基部は欠損している。2も縦長剥片を用いており、刃部に使用痕がみられる。3は刃部に厚みがあり、一見スクレイパーのようであるが刃部・背面が形成され背面には刃つぶり加工がみられたため、ナイフ形石器と分類した。4の刃部は上部にみられるが、二側面加工の後、刃つぶり加工の微調整がみられる。切出し形ナイフ形石器である。5も切出し形ナイフ形石器で、縦長剥片に二側面加工を施し先端部に刃部をつくるものである。6は刃潰し加工が周囲すべてに行われている。両側縁加工のナイフ形石器とした。7は日東産黒曜石を素材としている。5と同様の切出し形ナイフ形石器である。8は三船産黒曜石を素材としている。二側面加工の後、丁寧な刃潰し加工が施されている。刃部には使用痕がみられる。極めて小型で、検出された地点の近くには、植刃器が2点検出されていることから、この石器も植刃器と組み合わせ使われた可能性がある。

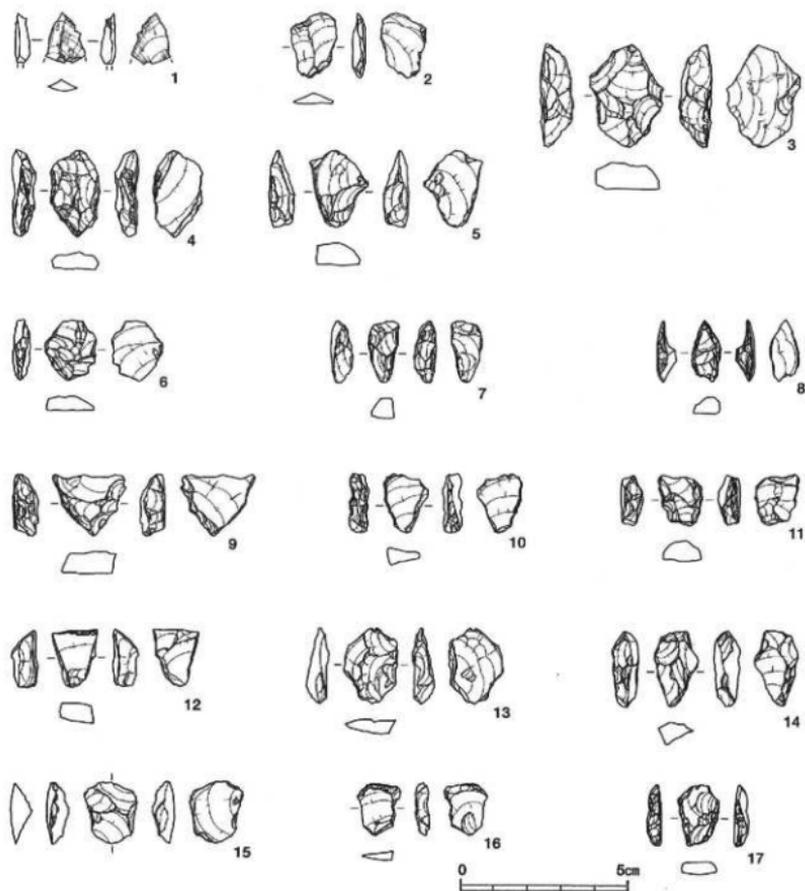
#### 台形石器 (第17図, 9~17)

9~16は三船産の黒曜石を石材に用いた台形石器である。9は縦長剥片を利用し、両側縁は両面からと片面からの丁寧なブランディングにより整形している。10・11も同様な整形を施している。10の刃部は欠損している。12はやや厚みのある不定形剥片を利用し、両側縁を平坦剥離により整形している。刃部には使用痕がみられる。13もやや厚みのある不定形剥片を利用し、両側縁を平坦剥離により整形している。刃部は欠損している。14はやや厚みのある縦長剥片を利用し、両側縁に片面からのブランディングを施し整形している。15は横長剥片を縦位に利用し、両側縁に片面からのブランディングが施され整形している。16は不整形剥片を横位に利用し、両側縁は片面からのブランディングと平坦剥離により整形されている。17は腰岳産の黒曜石を石材に用い、不整形剥片を縦位に利用している。両側縁は片面からの丁寧なブランディングが施され整形されている。刃部には使用痕がみられる。

#### 三稜尖頭器 (第18図, 18~21)

18~21は三船産の黒曜石を石材に用いた三稜尖頭器である。18は一面に剥離痕をもち、二面に調整剥離を施すもので先端部はやや鋭い。断面は台形を呈す。19は厚みのある横長剥片を素材にしたもので、やはり一面に剥離痕をもち、二面に調整剥離を施すもので、先端部が鈍いものである。

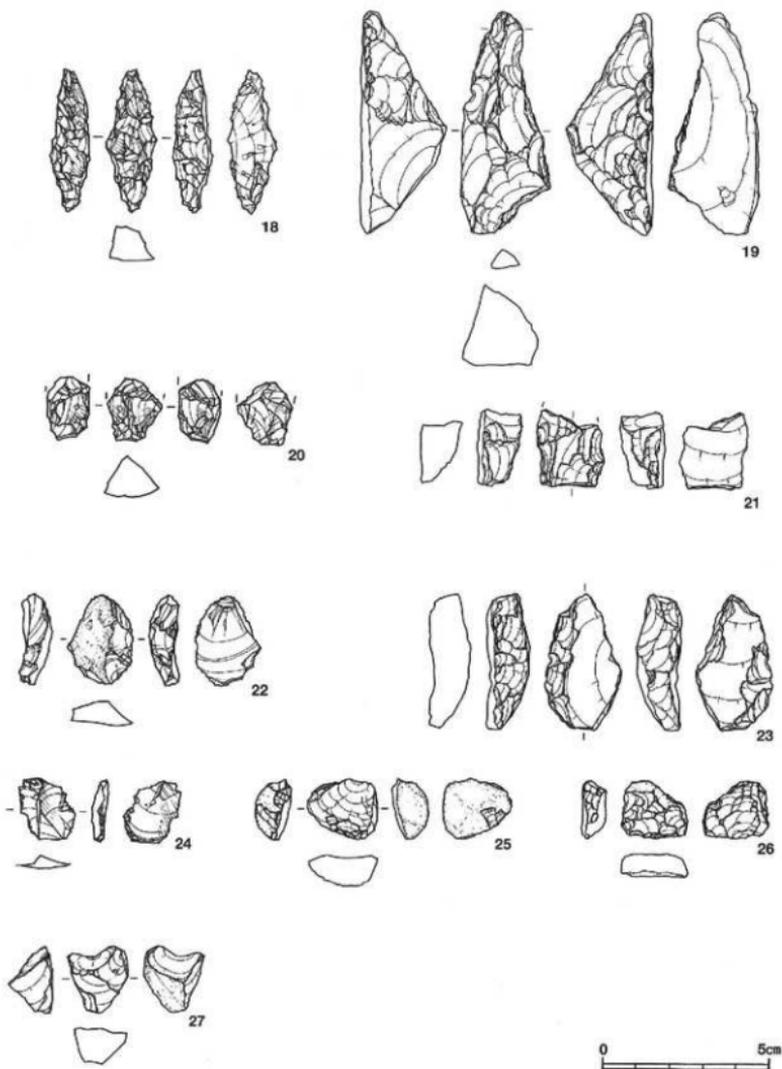
断面は三角形を呈す。20は先端部が欠損し基部のみであるが、厚みのある縦長剥片を素材にし、二面に調整剥離を施した三稜尖頭器である。21は気泡の多い粗悪な黒曜石を素材に用いている。やはり一面に剥離痕をもち、二面に調整剥離を施していることから三稜尖頭器に分類した。



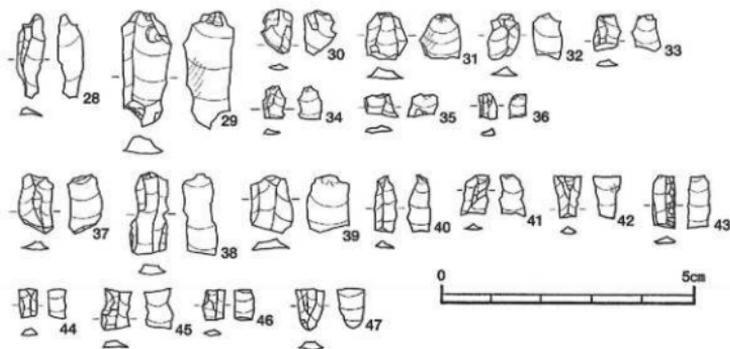
第17図 ナイフ形石器・台形石器

スクレイパー (第18図, 22~27)

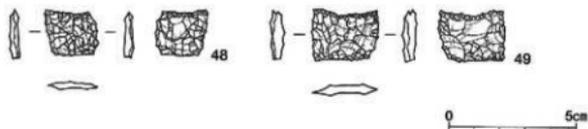
22は針尾産黒曜石を素材としたスクレイパーである。自然面を有する剥片を用い、両下側縁に調整剥離を行い、刃部を形成し45°ほどの厚い刃を作り出している。23は三船産黒曜石を素材としている。4 cmほどの剥片の左側縁に70°ほどの刃部を形成している。左側縁は方向性・計画性のみられない剥離面となっている。24は桑ノ木津留産黒曜石を素材としている。自然面の残る縦長剥片を用い、下部に表面からの微細剥離を施している。また左側縁には使用痕がみられる。25は三船産黒



第18図 三稜尖頭器・スクレイパー・抉入石器



第19-1図 細石刃



第19-2図 植刃器

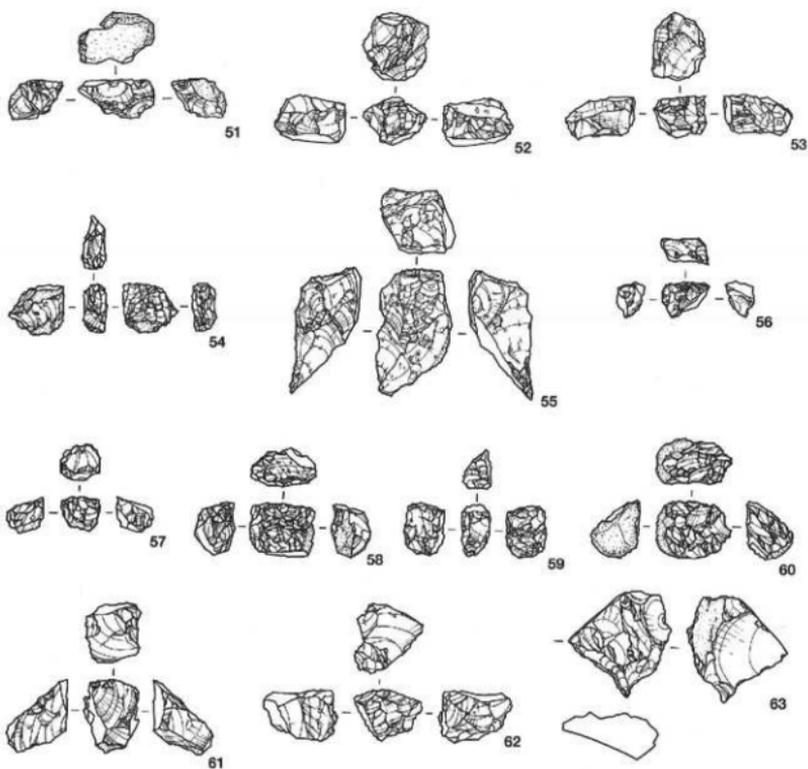
曜石を素材としている。表面はほとんど自然面であり表面からの剥離により、下部に刃部を形成している。刃の厚さは60°ほどである。26は三船産黒曜石の縦長剥片を横位に利用し、左側縁は切断後に刃潰し加工が施されている。表裏両面から剥離を施し下縁に60°ほどの厚さの刃部を形成している。27は三船産黒曜石を素材としている。下面、右側縁は自然面が残り左側縁は切断されている。抉りを作るための調整剥離や調整痕はみられず、剥離の際、偶然できた抉りを使用した可能性がある。抉り部分には使用痕がみられる。

細石刃（第19-1図、28～47）

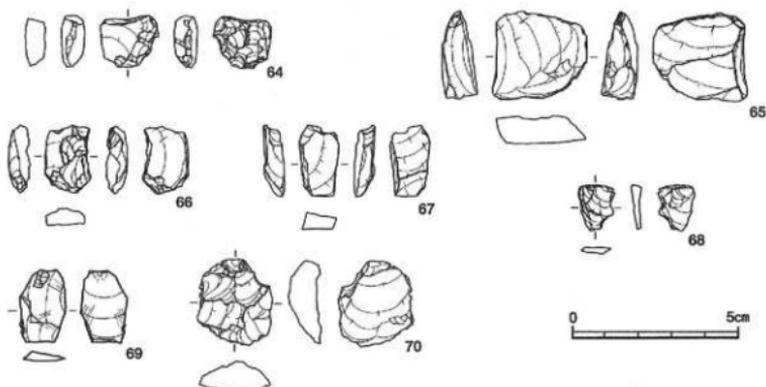
28、29は完形の細石刃である。28は三船産、29は桑ノ木津を素材としている。28は右側縁が刃部となっており、左側縁は切断されている。全体が弯曲している。29は両縁が刃部となっている。下部は抉状に加工がほどこされており使用痕がみられる。30～36は細石刃の頭部である。30・31・33は腰岳産、32・34～36は三船産黒曜石を用いている。全て意図的に切断分割されており、30・32・33・36には両側縁に使用痕がみられる。37～41は頭・中間部である。37・38は腰岳産、39は桑ノ木



第19-3図 草創期土器



第20図 細石刃核・ブランク・剥片



第21図 楔形石器・切断剥片・使用痕剥片

津留産，40，41は三船産黒曜石を素材としている。全て意図的に切断されており，両側縁に使用痕がみられる。42～46は中間部の細石刃である。43は腰岳産，42・44・45は三船産46は安山岩を素材としている。全て意図的に切断され使用痕がみられる。43は右側辺の刃部に刃つぶし加工がほどこされたブランディングツールである。細石刃にブランディングを施しているものは出土例が少なく検討を要するが，この遺物が検出された付近には小型ナイフ，植刃器が出土しており，細石刃のブランディングもそれに伴うものである可能性が考えられる。46は安山岩製の細石刃である。周辺から安山岩の細石刃核，剥片は出土しておらず，製品として持ち込まれたと考えられる。道具の移動を考えさせる遺物である。47は三船産の黒曜石を使用した尾部である。意図的に切断されており，尾部の特徴である弯曲した形となっている。

#### 植刃器（第19-2図，48・49）

48・49は植刃器である。48は桑ノ木津留産黒曜石，49は三船産黒曜石を用いている。石鐮の尖頭部が欠損した形状であるが，全面に微細剥離が施されており，また出土した付近には，細石刃や小型ナイフ形石器が出土している。出土条件や周辺環境より植刃器と判断したが，出土例や報告も少なく，慎重な研究が必要とされるであろう。

#### 草創期土器（第19-3図，50）

50は，Ⅷ層出土の薩摩火山灰下位から出土した無文土器である。表裏共に明赤褐色を呈し表面はナデ整形がみられる。胎土は角閃石・石英を含み，焼成はやや粗悪なものである。

#### 細石刃核（第20図，51～63）

51は腰岳産黒曜石を素材とした不定形剥片を基に剥離作業を行った石核である。自然面をプラットフォームとしている。52～59は，三船産，60は日東産の黒曜石を素材としている。51・52，55～58は，ほぼ台形をしている。上部を半割しプラットフォームを作り，そこから剥離作業を行っている。53は上面を半割後プラットフォームを作り，左右面を主に剥離作業を行い，最終的に幅の狭くなった

正面から剥離作業を行っていったものである。54は厚い縦長剥片を素材とした不定形剥片を使用している。剥離面をプラットフォームとしている。厚い部分の上部に剥離作業が多くみられる。59は自然面を多く含み、風化面が目立つ。剥離の方向性、剥離作業面から細石刃核と分類したが不明な点が多い。

#### ブランク (第20図, 61・62)

61は、桑ノ木津留産、62は、三船産の黒曜石を使用している。61は逆台形を呈しており、わずかに剥離作業面がみられる程度である。62も逆台形を呈しているが、石材に不純物が多く、それに伴ない微少なヒビが入っている。そのため、細石刃を剥出できなかったと考えられる。

#### 楔形石器 (第21図, 64)

64は、桑ノ木津留産の黒曜石を素材にした楔形石器である。背面に主要剥離がみられ、正面には上方に向かう剥離がみられる。下面、左側縁に使用によるつぶれがみられる。

#### 剥片 (第20・21図, 63・65~70)

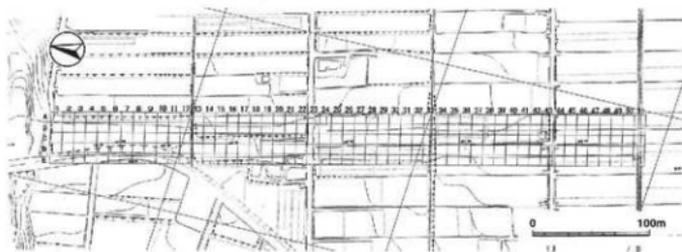
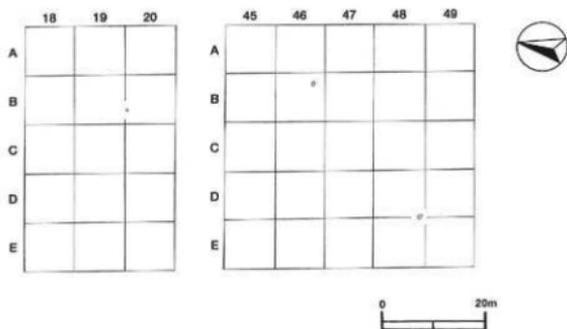
63は三船産黒曜石の不純物の目立つ剥片である。65~67は切断剥片で、65~67は三船産の黒曜石を素材としている。65は正面からの加圧により切断されており、上縁には加工痕がみられ、下縁には、多方向による剥離が施されている。66は両側縁が正面からの加圧によって切断されている。上縁にわずかに使用痕がみられる。67も65同様、両側が正面からの加圧によって切断されている。67~69は使用痕がみられた。68・69は、桑ノ木津留産、70は、三船産の黒曜石を素材としている。67は縦長剥片を用い、上縁を切断後そこから調整加工が施されている。左側縁に使用痕があり、わずかに調整痕がみられる。69は縦長剥片を用い、下部が切断されている。切断された下部を除きほぼ全ての側縁に使用痕がみられる。70は円形に近い剥片を用い、左側縁に使用痕がみられる。

第6表 鷺ヶ追遺跡旧石器遺物観察表(1)

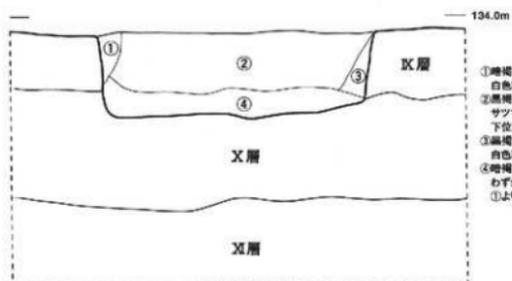
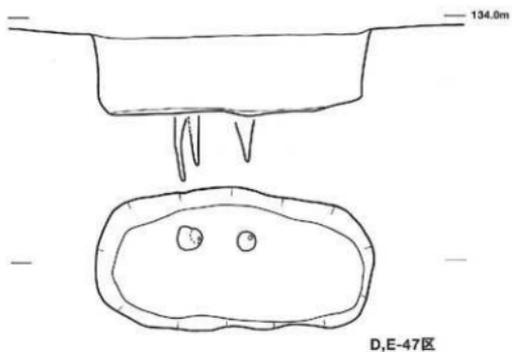
採回 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
17	1	4279	ナイフ形石器	黒曜石三船	B50	Ⅲ	1.5	1.2	0.4	0.6	
	2	12865	ナイフ形石器	黒曜石三船	D30	Ⅲ	2.1	1.4	0.4	0.9	
	3	12824	ナイフ形石器	黒曜石三船	C33	Ⅲ	3.3	2.2	1.0	5.9	
	4	12797	ナイフ形石器	黒曜石三船	C33	Ⅲ	2.7	1.5	0.8	2.8	
	5	12696	ナイフ形石器	黒曜石三船	D33	Ⅲ	2.4	1.5	0.8	2.2	
	6	12651	ナイフ形石器	黒曜石三船	C33	Ⅲ	1.9	1.5	0.5	0.4	
	7	12661	ナイフ形石器	黒曜石日東	C33	Ⅲ	0.9	0.9	0.5	1.0	
	8	12659	ナイフ形石器	黒曜石三船	C33	Ⅲ	1.9	0.9	0.6	0.6	
	9	12279	台形石器	黒曜石三船	B33	Ⅲ	1.7	2.2	0.8	2.6	
	10	12012	台形石器	黒曜石三船	B33	Ⅲ	1.8	1.3	0.5	1.0	
	11	12663	台形石器	黒曜石三船	C33	Ⅲ	1.8	1.7	0.7	1.5	
	12	12735	台形石器	黒曜石三船	C31	Ⅲ	1.7	1.3	0.6	1.3	
	13	12277	台形石器	黒曜石三船	B33	Ⅲ	2.3	1.5	0.8	2.2	
	14	12801	台形石器	黒曜石三船	C33	Ⅲ	2.3	1.3	0.8	1.7	
	15	12654	台形石器	黒曜石三船	C33	Ⅲ	1.9	1.6	0.7	1.7	
	16	12822	台形石器	黒曜石三船	C33	Ⅲ	1.6	1.3	0.4	0.6	
	17	13070	台形石器	黒曜石腰岳	C7	Ⅳ	2.0	1.2	0.5	1.1	
18	18	5649	三稜尖頭器	黒曜石三船	D44	Ⅲ	4.4	1.5	1.2	6.5	
	19		三稜尖頭器	黒曜石三船	C29	Ⅲ	7.0	2.8	2.5	32.9	
	20	12666	三稜尖頭器	黒曜石三船	D33	Ⅲ	1.9	1.7	1.5	3.5	
	21	12760	三稜尖頭器	黒曜石三船	C31	Ⅲ	2.3	1.9	1.3	5.4	
	22	4096	スクレイパー	黒曜石針尾	C49	Ⅲ	2.8	2.9	0.7	4.1	
	23	12847	スクレイパー	黒曜石三船	C29	Ⅲ	4.2	2.3	1.2	12.0	
	24	12208	スクレイパー	黒曜石桑ノ木津留	B32	Ⅲ	1.9	1.7	0.4	1.1	
	25	12622	スクレイパー	黒曜石三船	C33	Ⅲ	2.1	1.7	1.0	3.6	
	26	12036	スクレイパー	黒曜石日東	D33	Ⅲ	2.2	1.7	0.9	2.8	
	27	12237	抉入石器	黒曜石三船	C33	Ⅲ	2.1	1.8	1.3	3.2	
	28	12817	細石刃(完形)	黒曜石三船	B33	Ⅲ	1.6	0.5	0.2	0.14	
	29	12778	細石刃(完形)	黒曜石桑ノ木津留	B33	Ⅲ	2.3	1.0	4.2	0.02	
	30	5650	細石刃(頭部)	黒曜石腰岳	C35	Ⅲ	0.9	0.6	0.15	0.08	
	31	12664	細石刃(頭部)	黒曜石腰岳	C33	Ⅲ	1.0	0.8	0.24	0.12	
	32	4081	細石刃(頭部)	黒曜石三船	C49	Ⅲ	0.9	0.6	0.17	0.77	
	33	4093	細石刃(頭部)	黒曜石腰岳	C49	Ⅲ	0.75	0.55	0.17	0.05	
	34	12666	細石刃(頭部)	黒曜石三船	C33	Ⅲ	0.7	0.45	0.1	0.03	
35	12685	細石刃(頭部)	黒曜石三船	D33	Ⅲ	0.6	0.4	0.13	0.03		
36	12884	細石刃(頭中)	黒曜石三船	C29	Ⅲ	0.5	0.4	0.1	0.02		
37	4092	細石刃(頭中)	黒曜石腰岳	C49	Ⅲ	1.3	0.6	0.19	0.13		
38	4091	細石刃(頭中)	黒曜石腰岳	C49	Ⅲ	1.7	0.7	0.15	0.19		
39	5641	細石刃(頭中)	黒曜石桑ノ木津留	C35	Ⅲ	1.2	0.8	0.17	0.21		
40	4278	細石刃(頭中)	黒曜石三船	D50	Ⅲ	1.15	0.5	0.19	0.08		
41	6089	細石刃(頭中)	黒曜石三船	C36	Ⅲ	0.8	0.5	0.1	0.04		
42	5570	細石刃(中)	黒曜石三船	C37	Ⅲ	0.9	0.6	0.17	0.07		
43	4080	細石刃(中)	黒曜石腰岳	C49	Ⅲ	1.1	0.5	0.4	0.07		
44	12646	細石刃(中)	黒曜石三船	C33	Ⅲ	0.6	0.4	0.11	0.02		
45	5767	細石刃(中)	黒曜石三船	D7	Ⅲ	0.8	0.55	0.13	0.07		
46	4101	細石刃(小)	安山岩	C49	Ⅲ	0.6	0.4	0.14	0.05		
47	5674	細石刃(尾)	黒曜石三船	D38	Ⅲ	0.8	0.6	0.12	0.07		
19(2)	48	4086	穂刃器	黒曜石桑ノ木津留	C49	Ⅲ	1.0	1.0	0.1	0.2	
	49	3803	穂刃器	黒曜石三船	C46	Ⅲ	1.0	1.4	0.2	0.3	
20	51	3787	細石刃穂	黒曜石腰岳	C48	Ⅲ	1.1	2.3	1.2	3.5	
	52	12784	細石刃穂	黒曜石三船	B33	Ⅲ	1.2	1.3	1.9	5.2	
	53	12275	細石刃穂	黒曜石三船	B33	Ⅲ	1.1	1.4	1.0	5.1	
	54	12693	細石刃穂	黒曜石三船	D33	Ⅲ	1.4	0.8	1.5	1.7	

第7表 鷺ヶ泊遺跡旧石器遺物観察表(2)

採掘 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
30	55	12846	細石刃核	黒曜石三船	C29	Ⅲ	4.0	2.6	1.6	13.8	
	56	12855	細石刃核	黒曜石二船	C29	Ⅲ	1.0	1.5	1.0	0.9	
	57	12837	細石刃核	黒曜石三船	D35	Ⅲ	1.9	2.2	1.2	5.2	
	58	12647	細石刃核	黒曜石二船	C33	Ⅲ	1.6	1.9	1.1	3.7	
	59	5861	細石刃核	黒曜石一船	D37	Ⅲ	1.5	0.9	1.0	1.7	
	60	12037	細石刃核	黒曜石日東	C29	Ⅲ	1.2	1.1	1.1	1.6	
	61	12235	ブランク	黒曜石燧ノ木津留	C32	Ⅲ	2.7	1.8	1.0	4.8	
	62	12617	ブランク	黒曜石三船	C33	Ⅲ	1.5	1.8	2.1	5.3	
	63	12038	剥片	黒曜石三船	D33	Ⅲ	2.8	2.9	1.6	10.5	
	64	12034	楔形石器	黒曜石燧ノ木津留	D33	Ⅲ	1.9	1.7	0.7	2.1	
	65	12241	折断剥片	黒曜石三船	C33	Ⅲ	2.6	2.6	1.0	7.7	
	66	12772	折断剥片	黒曜石三船	C32	Ⅲ	2.0	1.4	0.6	1.6	
	21	67	12679	折断剥片	黒曜石三船	C33	Ⅲ	2.2	1.2	0.5	1.2
68		12786	使用痕剥片	黒曜石燧ノ木津留	C33	Ⅲ	1.4	1.1	0.4	0.4	
69		5631	使用痕剥片	黒曜石燧ノ木津留	D35	Ⅲ	2.2	1.6	0.3	2.0	
70		12803	使用痕剥片	黒曜石三船	D32	Ⅲ	2.6	2.3	0.9	5.1	



第22図 縄文時代遺構



- ①暗褐色(シルト質土)  
白色粒若干含む V層に類似。  
②黒褐色(シルト質土、Ⅴ層類似)  
サツマバミス含む。  
下位になればなるほどバミスが多くなる。  
③暗褐色(シルト質土)  
白色粒を若干含む。  
④暗褐色(シルト質土)  
わずかにサツマバミス含む。  
①より黒味が強い。



第23図 落とし穴1号



### 第3節 縄文時代の調査

#### 遺構

縄文時代の遺構は、落し穴2基と集石が検出された。

#### 落し穴1（第24図）

C45区IX層上面で検出したものである。粘質土であるⅧ層を掘り下げて、IX層上面で110×60cmの隅丸方形の遺構を検出した。南側半分を半載したところ底面にビットが確認された。これにより落し穴の可能性が高いと判断し、西側からスライス調査を行った。その結果、底面は100×45cmを測り逆茂木痕を検出できた。この落し穴の深さは検出面から約30cmを測り、逆茂木痕は3箇所確認できた。逆茂木痕の深さは底面から20～30cmを測る。

埋土中に遺物はみられなかったが、埋土にⅥ・Ⅷ層を確認することができた。このことからこの落し穴の時期は縄文時代早期のものであると判断した。

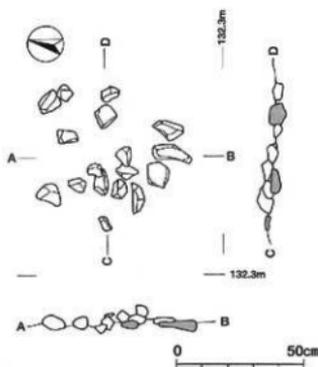
#### 落し穴2（第23図）

C45区IX層上面で検出したものである。粘質土であるⅧ層を掘り下げて、IX層上面で100×70cmの隅丸方形の遺構を検出した。西側半分を半載したところ底面にビットが確認された。これにより落し穴の可能性が高いと判断し、西側からスライス調査を行った。その結果、底面は70×50cmを測り逆茂木痕を検出できた。この落し穴の深さは検出面から約50cmを測り、逆茂木痕は10箇所確認できた。逆茂木痕の深さは底面から15～20cmを測る。

埋土中に遺物はみられなかったが、埋土にⅥ・Ⅷ層を確認することができた。このことからこの落し穴の時期は縄文時代早期のものであると判断した。

#### 集石（25図）

集石はC-20区に検出され、60×50cmの範囲に17個の大小の安山岩製の角礫が集中して検出された。集石としての集中度は少なく、掘り込み、炭化物、焼石などは確認できなかった。



第25図 集石

## 土器

土器は、B・D-1～8区、D・E-18区、C・D-49～51区、IV層で出土した。縄文時代中期を主体にしたものである。

71は、曾畑式土器である。外面全体に沈線による幾何学文様を施すもので、同一の棒状工具による刺突文で、口縁端部に刻目を施す。器形は口縁部が外反し、底部は丸底である。底部まで沈線が施され、内面口縁部付近にも沈線の幾何学文様が施されている。復元口径は32.6cmを測る。

72～81はⅠ類土器である。

72・73は外反する口縁部である。貝殻条痕を施文し、口縁部下位に波状の貼付突帯を付したものである。口唇部下位の突帯は刻目を施している。これらの特徴から野久尾式土器に該当するものである。74～79は、波状の突帯を付した胴部である。

82～117はⅡ類土器である。文様構成が突帯のみで表すものをⅡ類土器にした。

82は口径32.4cmを測る口縁部で、大きく内湾するキャリバー形をした器形である。内外面とも貝殻条痕による調整を行っている。

83・84は大きく内湾するキャリバー状の口縁部で、口唇部下位に波状の突帯文を6条廻らしている。84はやや内湾するキャリバー状の口縁部である。

85～88は大きい幅の波状を呈す突帯文で、刻目を施す。大きく内湾する口縁部である。

89～92は内湾する口縁部をもち「U」字状の貼付突帯文をもつものである。

93は口縁部が山形を呈するもので、口唇部に刻目を施す。

94は外反する口縁部をもつもので、刻目のある貼付突帯文である。

97～99は口唇部に刻目を施し、直線的な貼付突帯を横位に廻らした、大きく内湾する口縁部である。101～103は直口気味の口縁部をもつものである。

106はやや内湾する口縁部である。

107～111は、口唇部に刻目を施したもので、口縁下位に波状の貼付突帯を施している。

112～114も大きく内湾する口縁部で刻目突帯を付している。

115は外湾する口縁部で口唇部外面に刻目突帯を施す。

116は、口径20.4cmを測り内湾する口縁部をもつもので、口唇部外面に波状の刻目突帯を施す。

117は外反する口縁部で、口唇部に縦位の刻目突帯が施してある。

118～141はⅢ類土器である。3類土器は突帯と沈線を施すものである。

118・119はやや内湾する口縁部に縦位の貼付突帯が施されているものである。120～124は横位の刻目突帯に縦位の沈線を施したものである。120・121は内湾する口縁部である。

125・126は、口縁部下位に横位に廻る刻目突帯を沈線で施したものである。口径は、36.0cm、27.6cmを測る内湾する口縁部である。

129は、26.0cmを測る口縁部で、波状の突帯と縦位の沈線が施されたものである。132～138も同様なものである。

139は、口径27.0cmを測る。器形は胴部の張りが強く、口縁部の内弯はやや弱い。頸部のくびれはやや下位にあるものである。縦・横位に曲線状の沈線を施し、横位に3条の刻目突帯を施す。

142は、口径23.2cmを測る。口縁部に4か所の突起を有し、突起部に口縁内部から外面にかけて突帯を貼り付け、突起には貝殻の肋による押圧がみられる。器形は胴部の張りが弱く、口縁部の内弯も弱い。頸部下位にも沈線が施されている。

144は、口径21.0cmを測る。頸部が緩やかでやや内弯する口縁部である。鋤歯状の刻目突帯を施している。

145～221はⅣ類土器である。Ⅳ類土器は沈線のみで文様を構成するものである。

145は、山形を呈する口縁で、大きく内弯する口縁部である。

146も口縁部が山形を呈するものである。

147～149は、縦横の沈線で文様を構成するもので、内弯する口縁部をもつものである。

150は、口径23.4cmを測るやや内弯する口縁部で、縦・横・波状の沈線を、また、口唇部には刻目が施されている。

151～165も内弯する口縁部で沈線で文様構成しているものである。

166～172は、大きく内弯する口縁部をもつもので、曲線的な沈線を施している。

173～185は、波状を呈する沈線を施すものである。

185～204は、直線的な沈線で文様を構成しているものである。

205～221は、沈線と連点で文様を構成するものである。

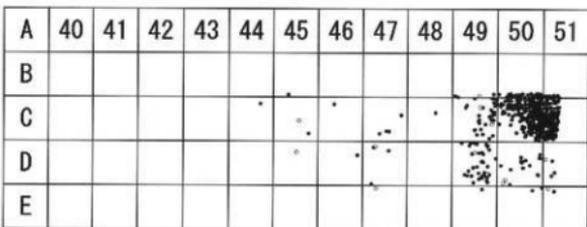
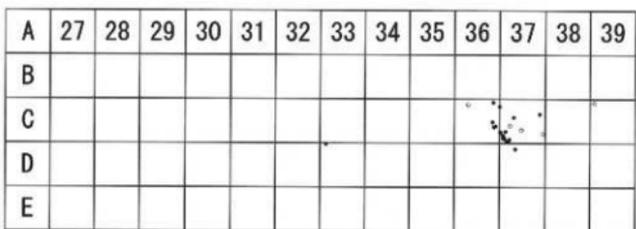
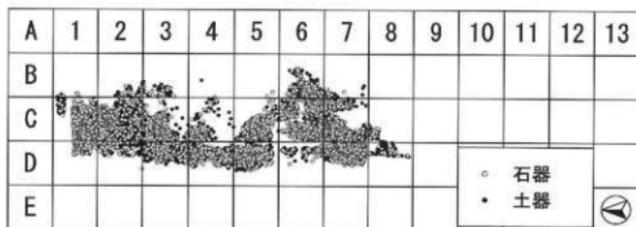
222～240は底部である。中くはみのある平底（222～234）、平底（235～239）、やや膨らむ平底（240）に分けられる。

241～256は、遺構等の攪乱層から出土した遺物である。

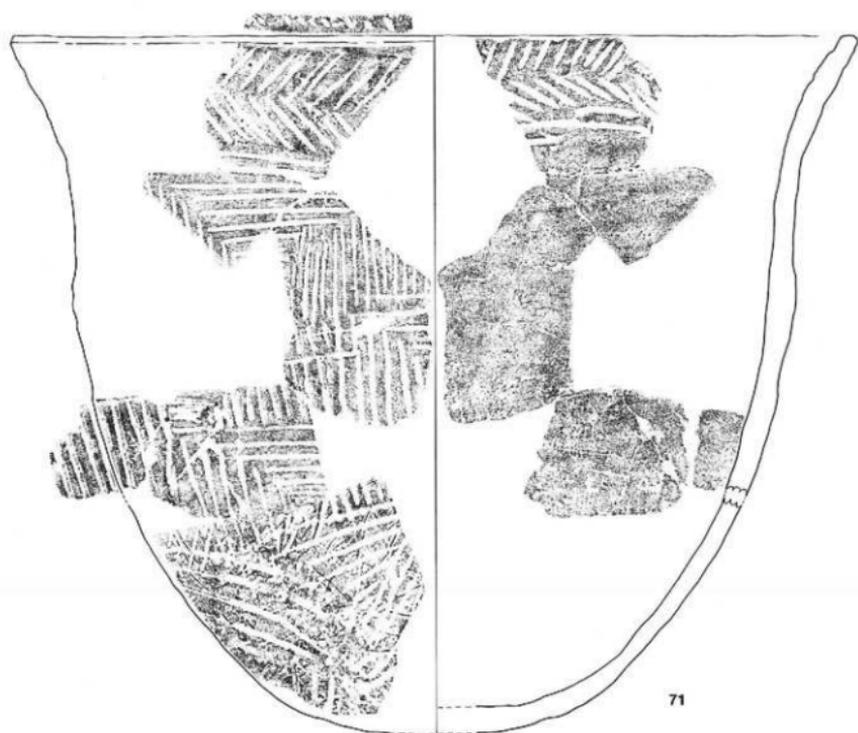
251は、口径20.4cmを測る。外反する口縁部で頸部は「く」の字状を呈する。

255は、環状の上製品で刺突による文様である。用途不明のものである。

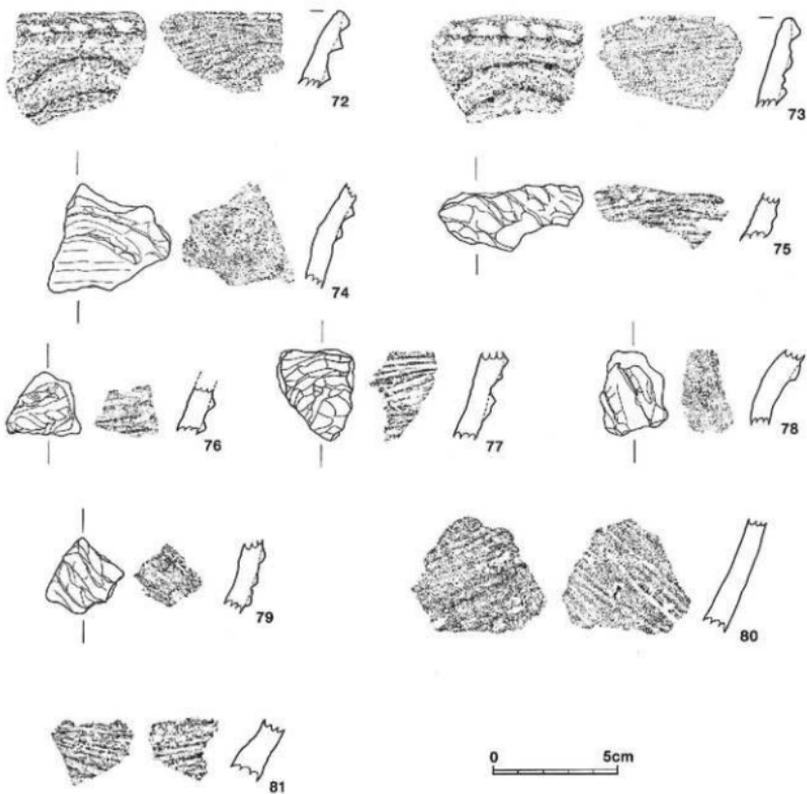
256は、142に類似した突起状のものである。



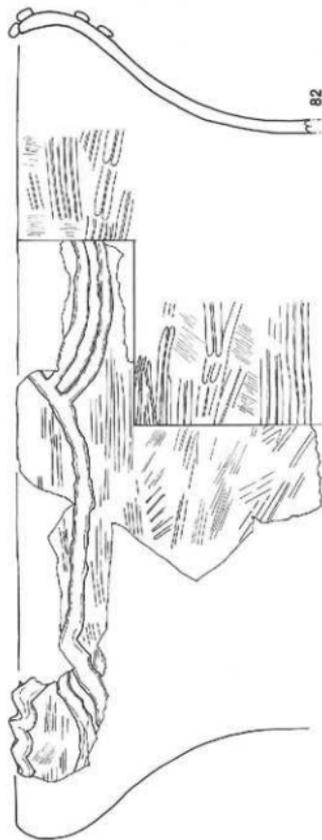
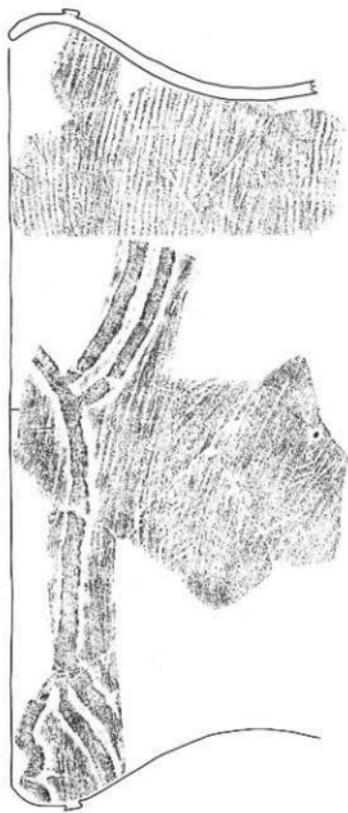
第26图 土器出土状况



第27圖 曾畑式



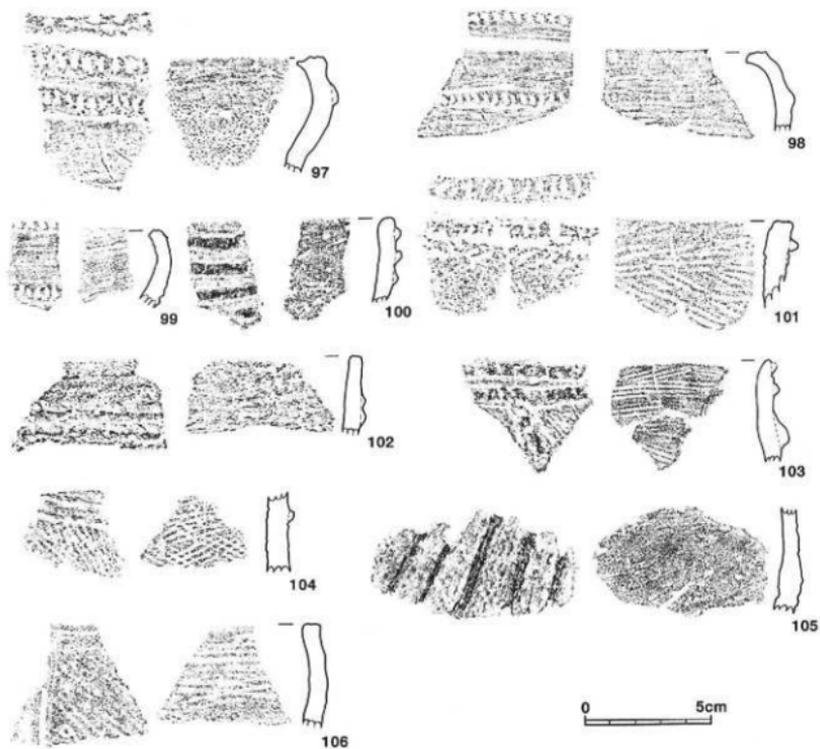
第28図 I類土器



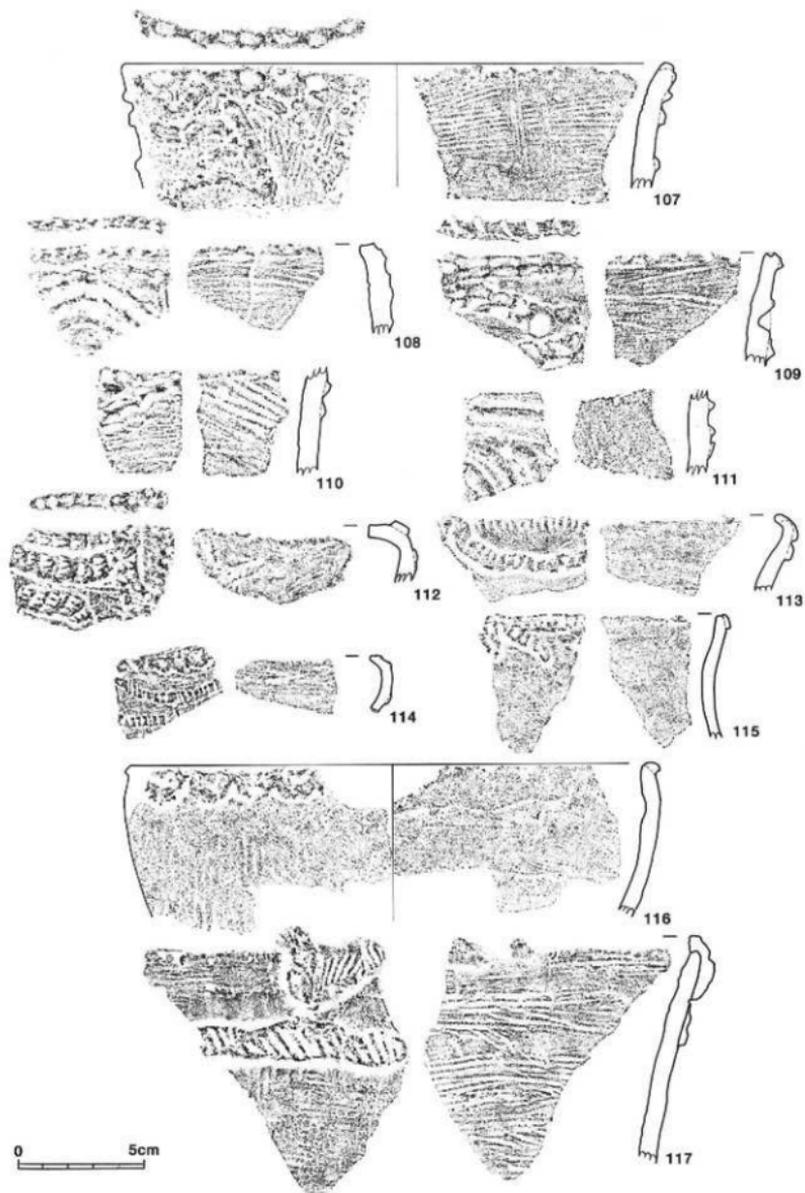
第29図 II類土器 1



第30图 II类土器 2



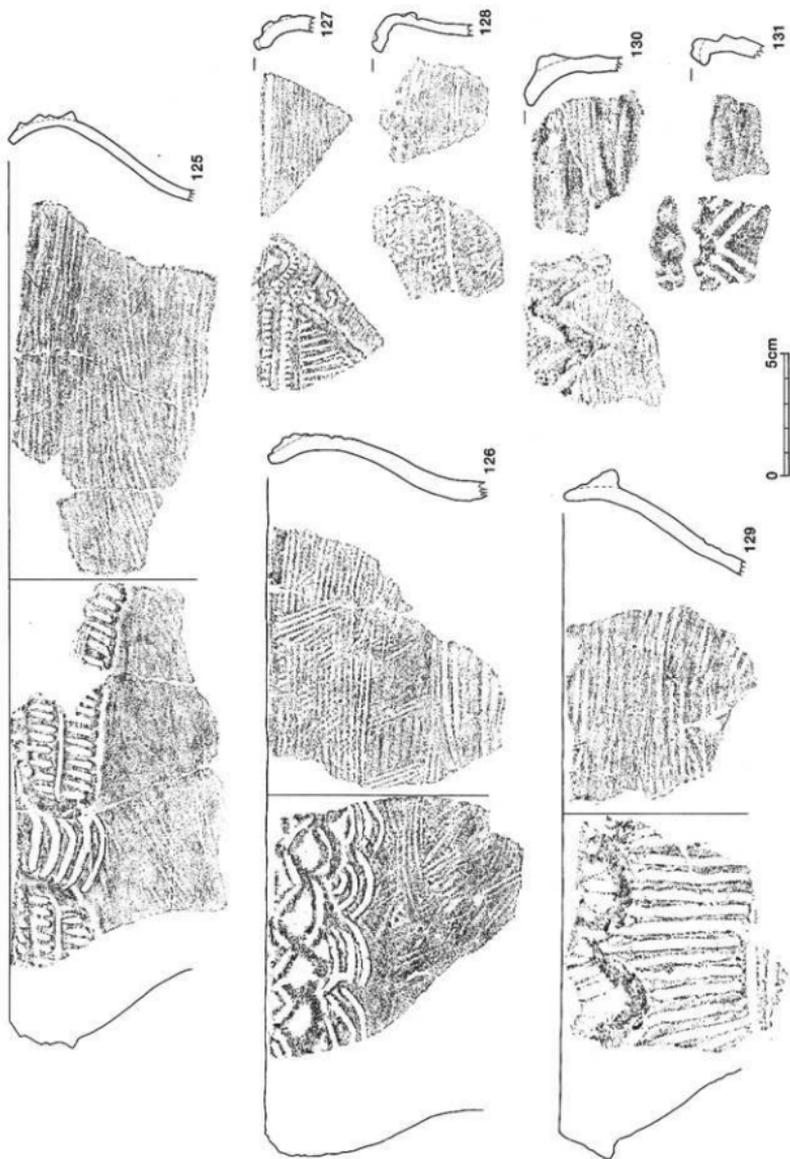
第31圖 II類土器 3



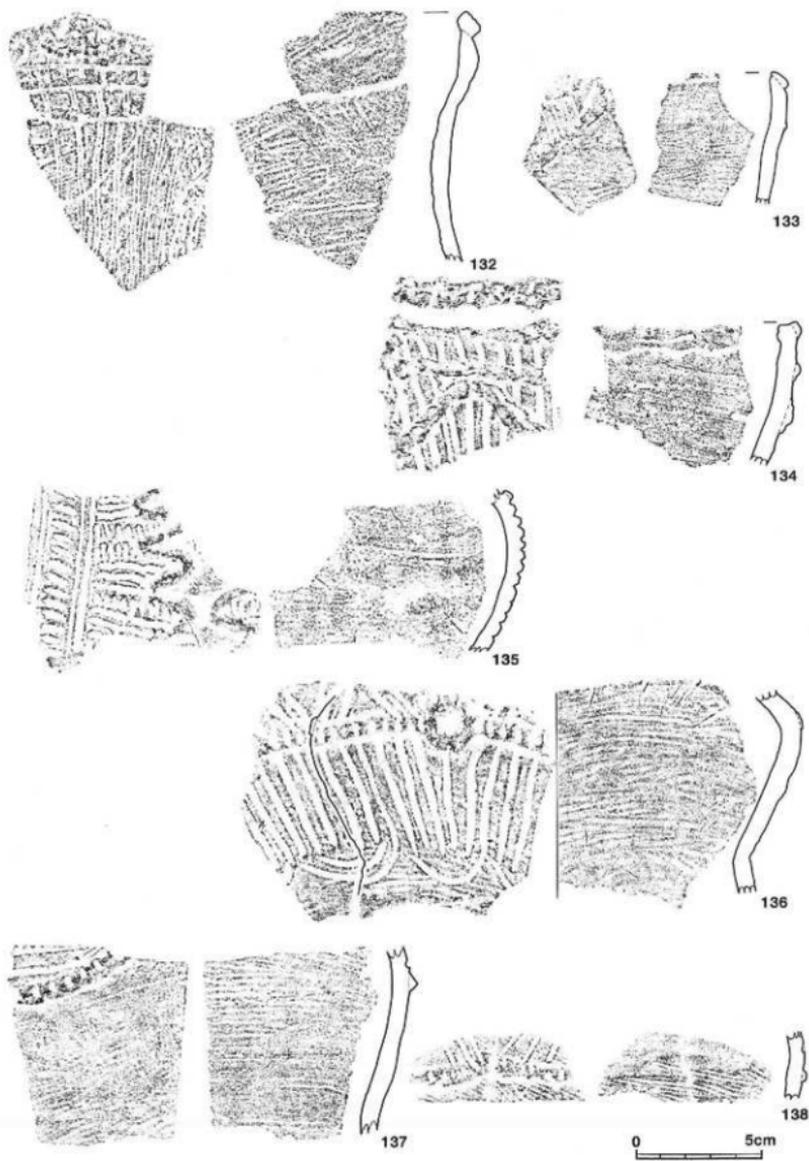
第32图 II类土器 4



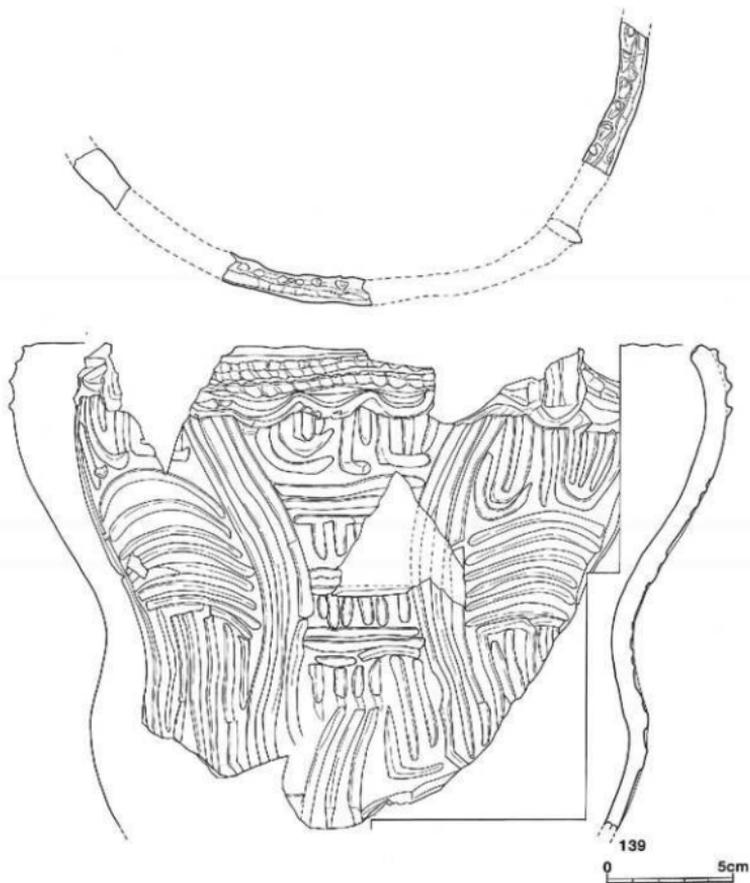
第33圖 Ⅲ類土器 1



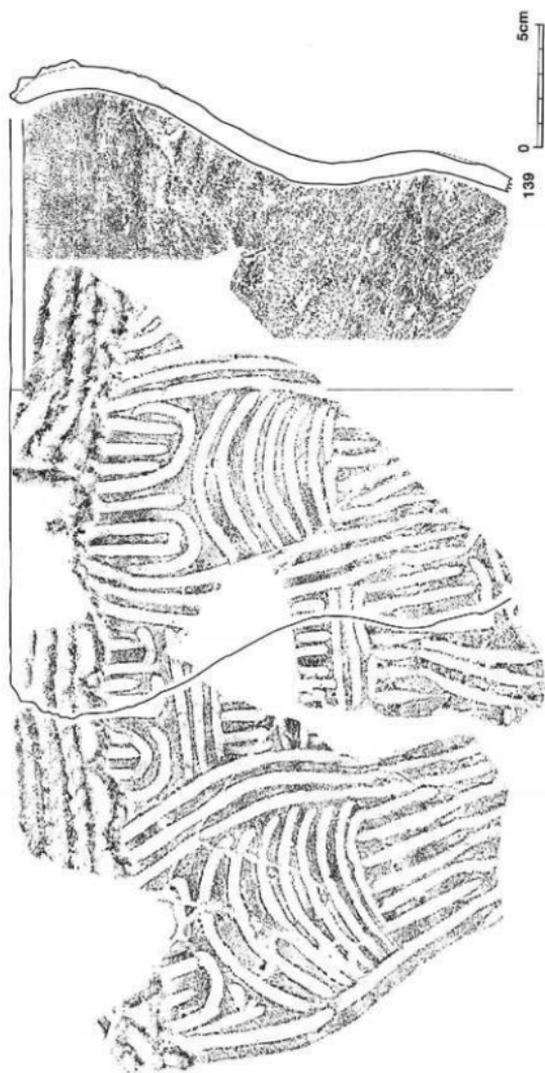
第34図 Ⅲ類土器2



第35図 Ⅲ類土器 3



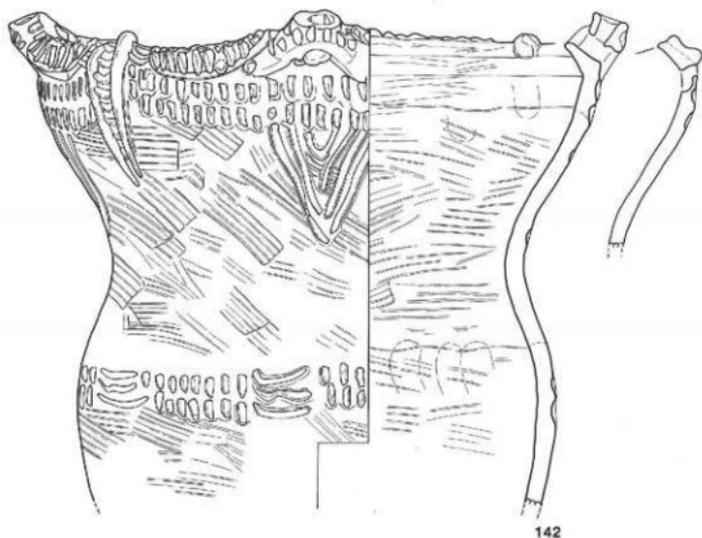
第36圖 III類土器4-1



第37図 Ⅲ類土器4-2



第38图 Ⅲ類土器 5



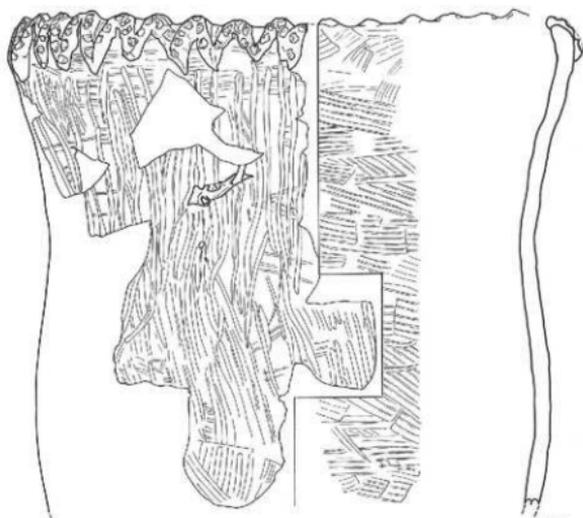
142



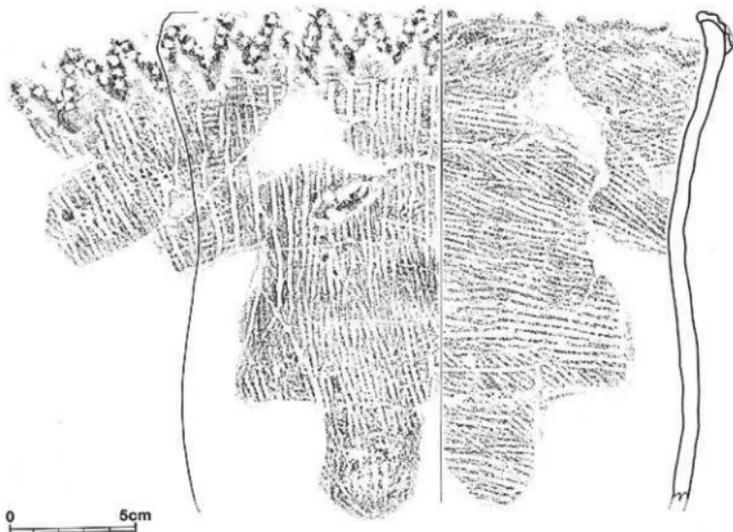
143

0 5cm

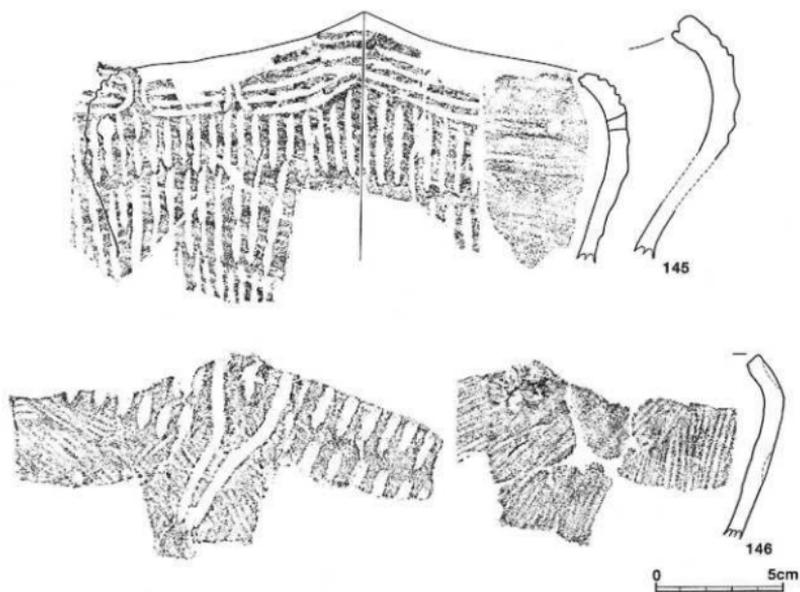
第39图 III類土器 6



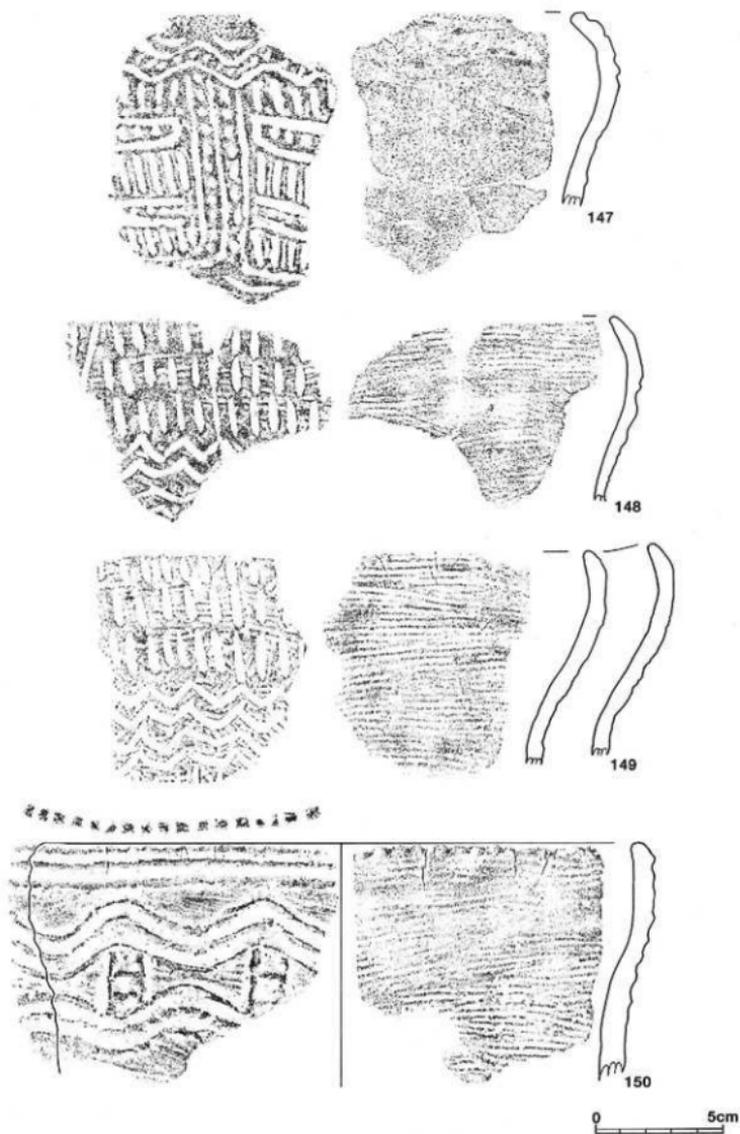
144



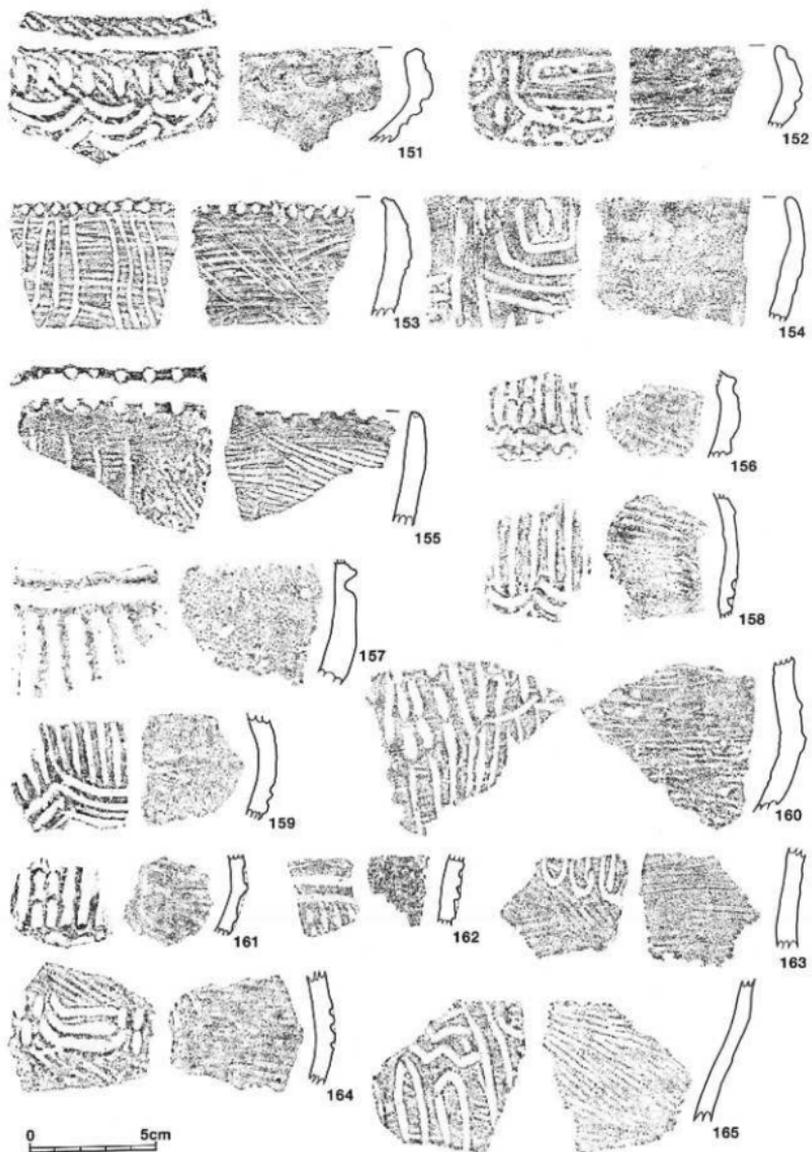
第40図 Ⅲ類土器 7



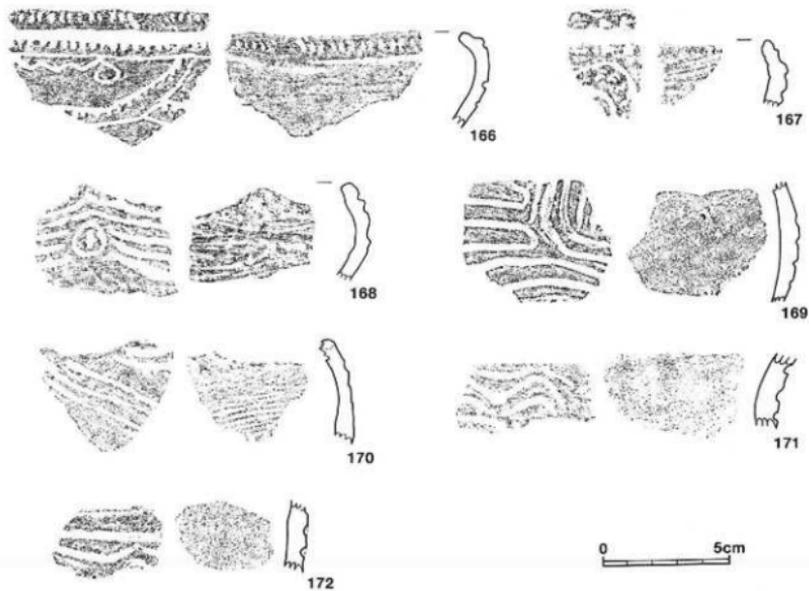
第41図 IV類土器 1



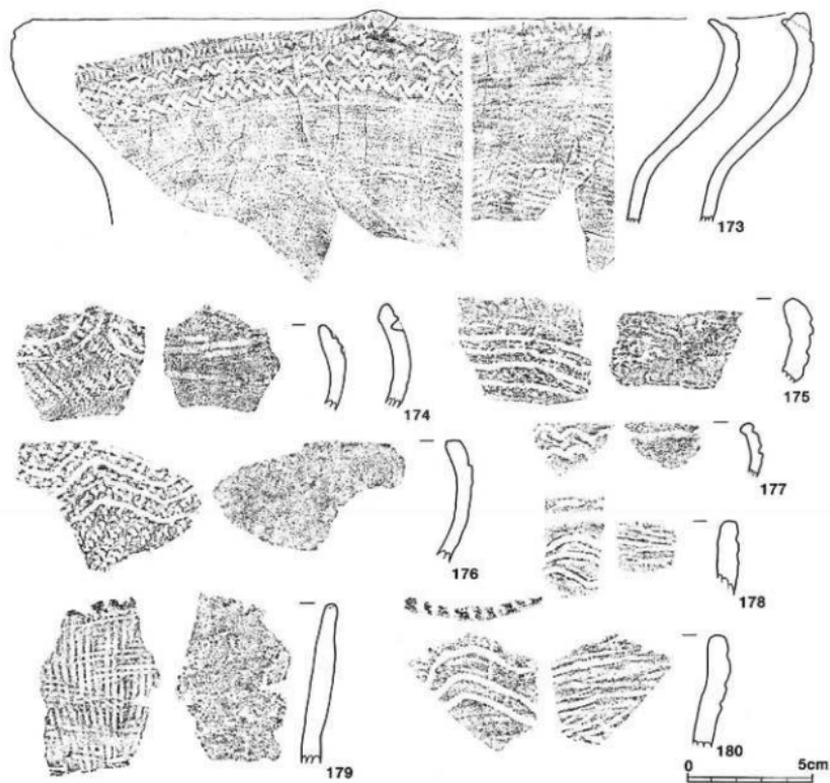
第42图 IV類土器 2



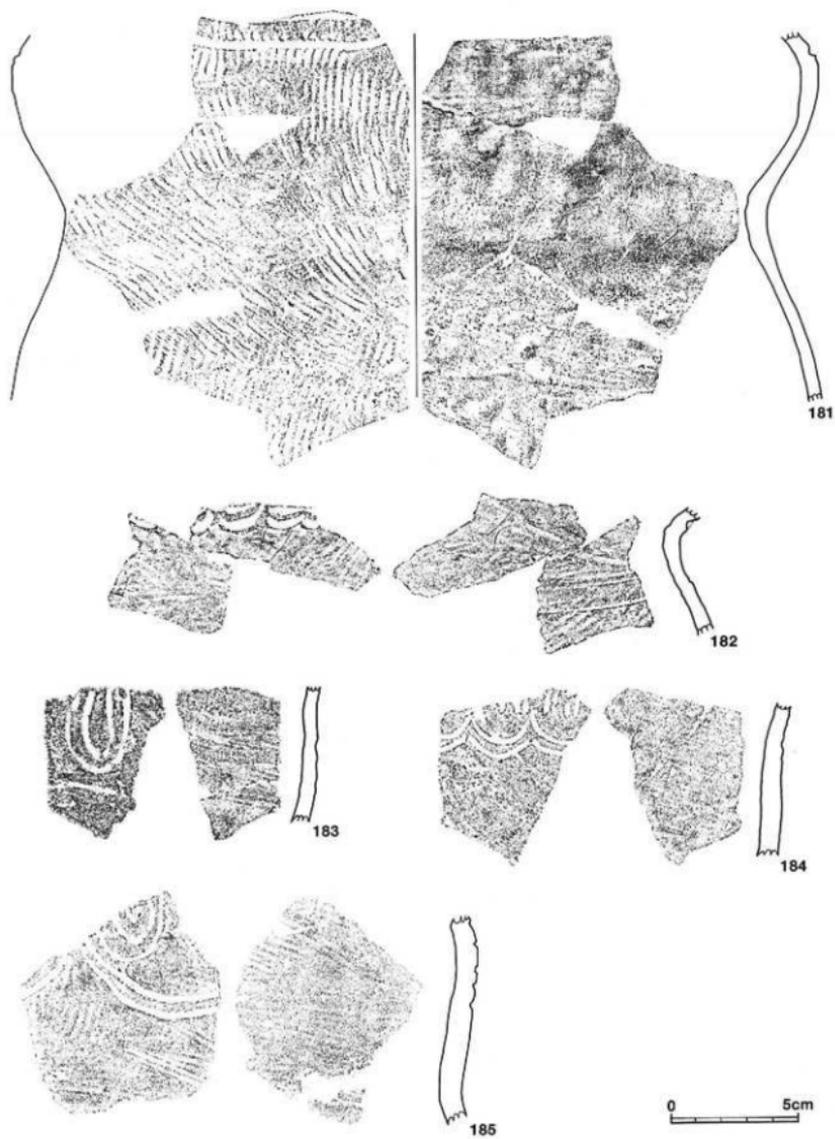
第43图 IV類土器 3



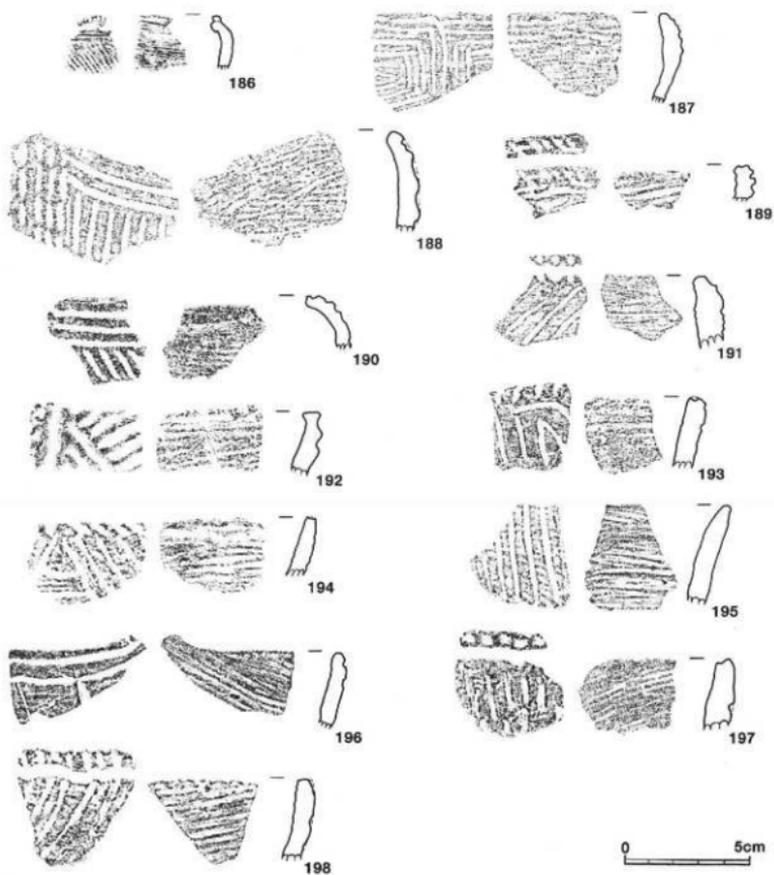
第44图 IV類土器 4



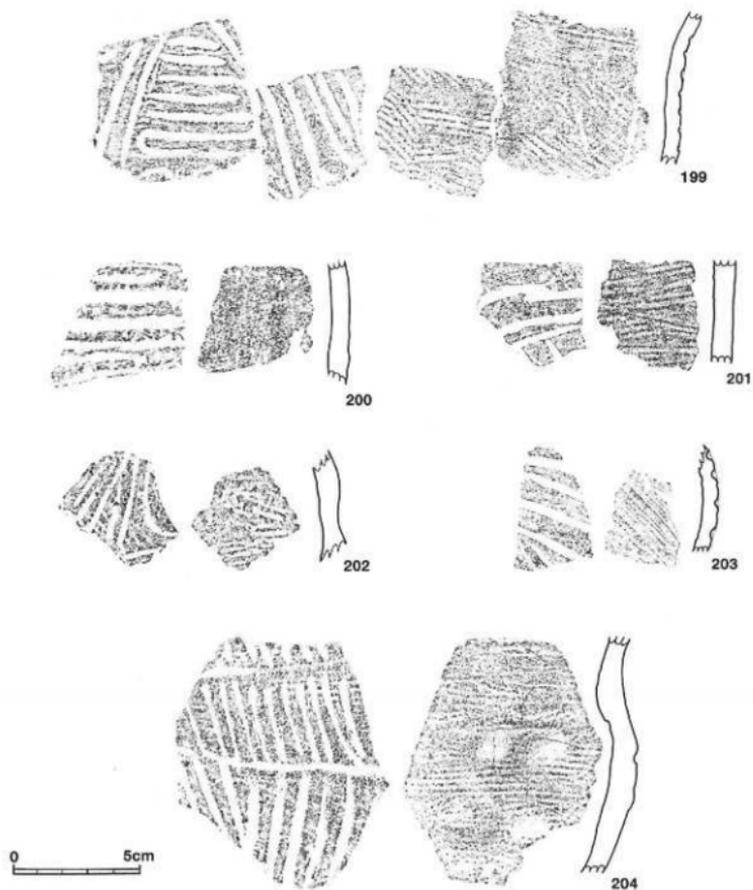
第45图 IV類土器 5



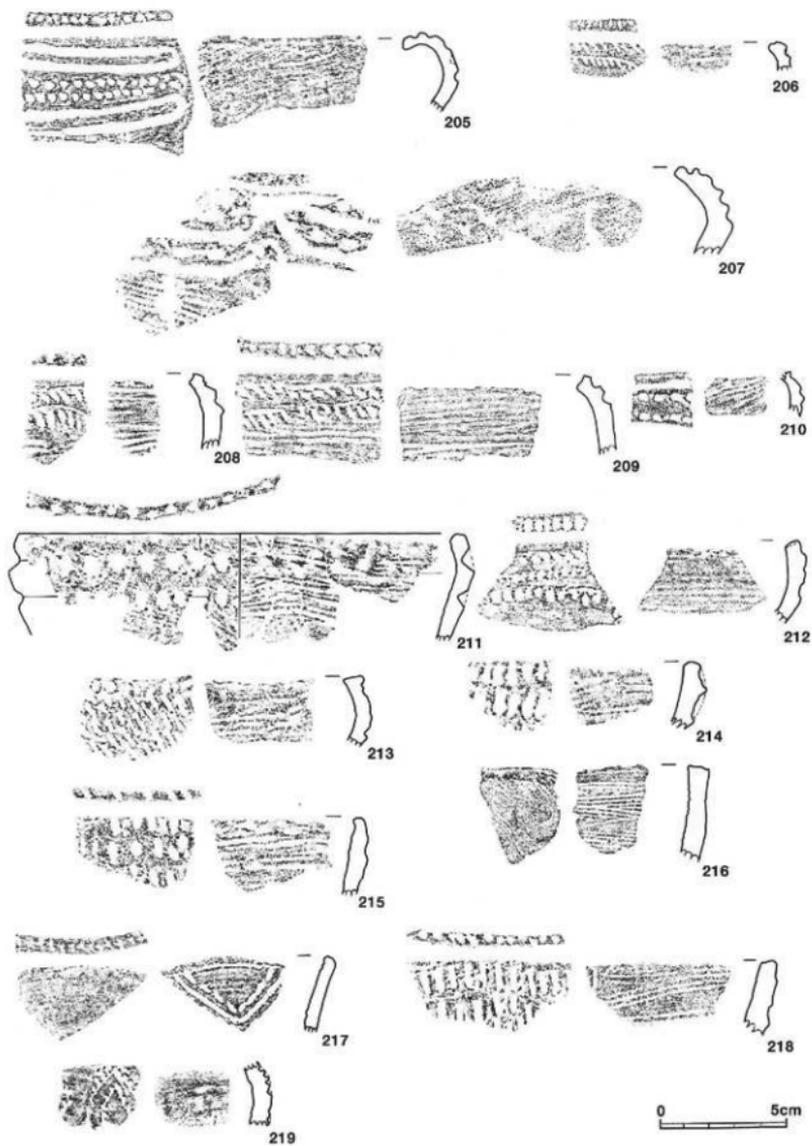
第46图 IV類土器 6



第47図 IV類土器 7



第48図 IV類土器 8



第49图 IV類土器 9



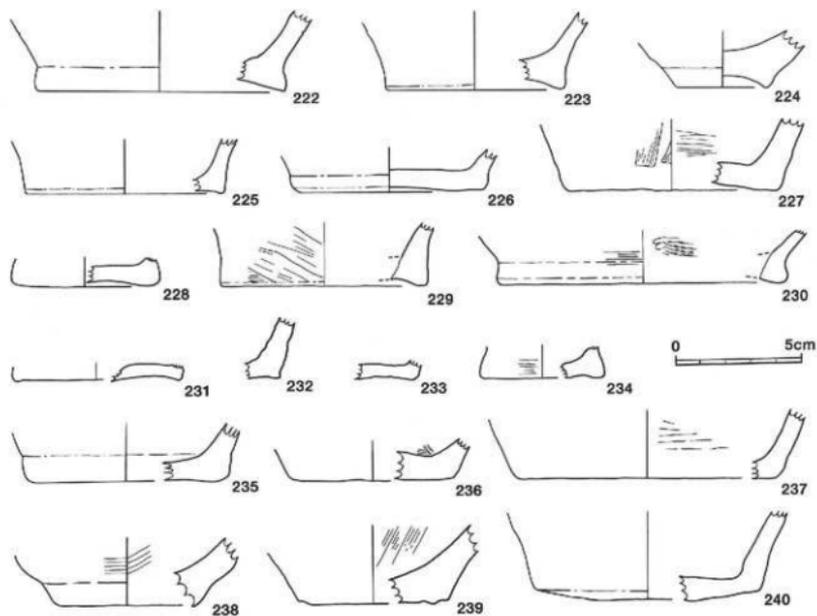
220



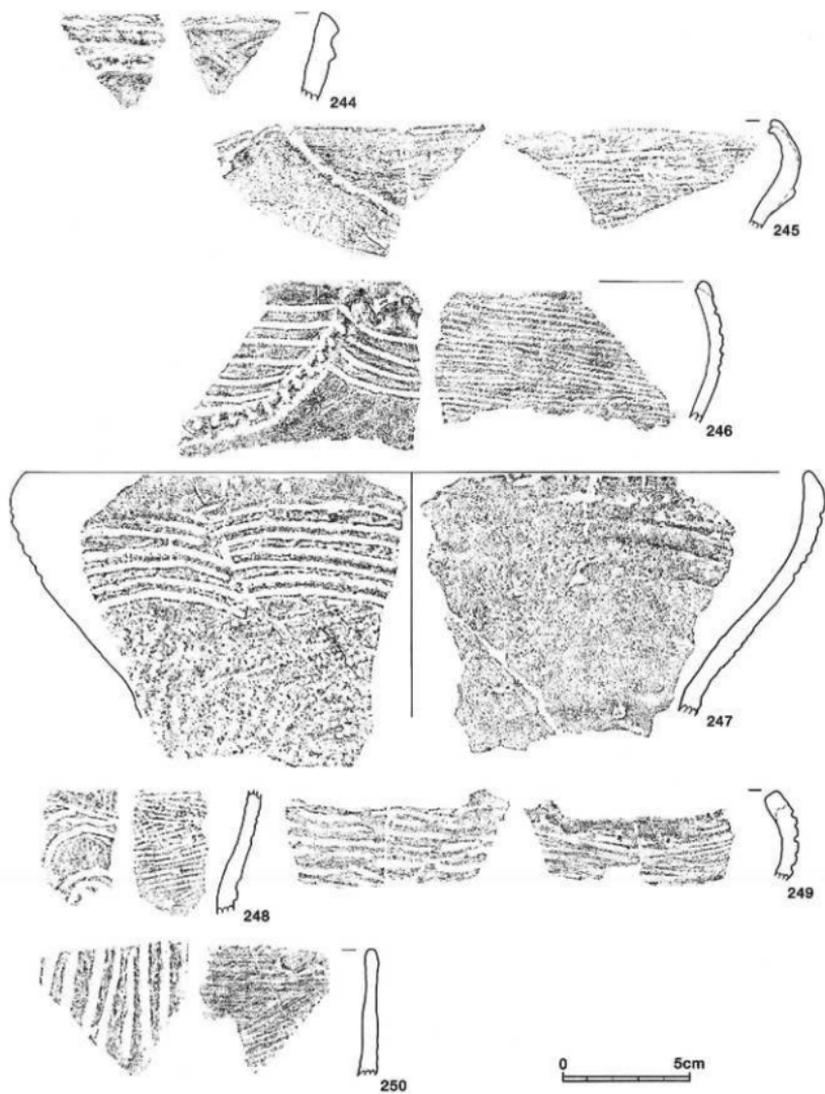
221

0 5cm

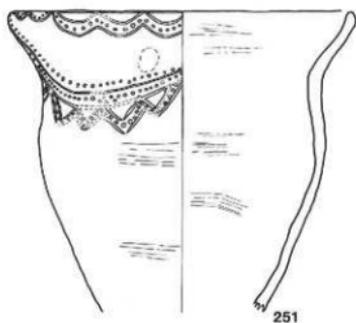
第50図 IV類土器10



第51图 底部



第52図 遺構内出土土器



251



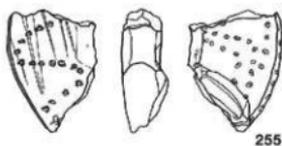
252



253



254



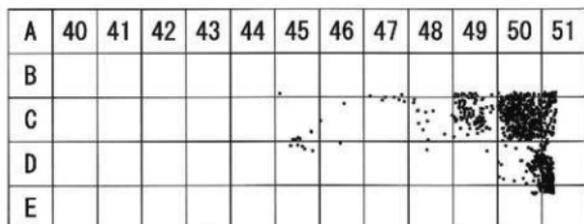
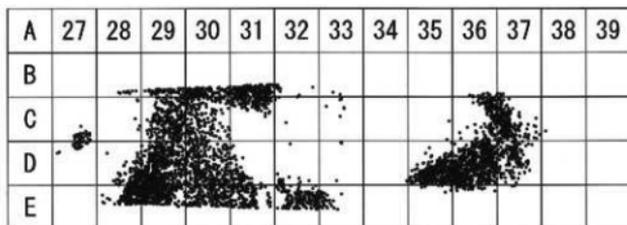
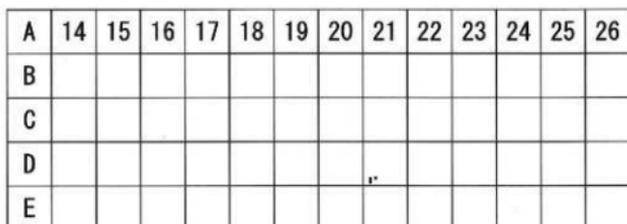
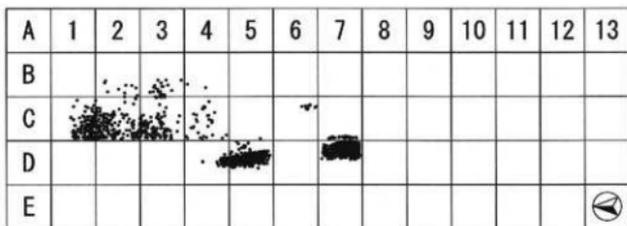
255



256



第53図 住居内出土遺物



第54图 石器出土状况

第8表 鷺ヶ追遺跡縄文土器観察表(1)

探出番号	遺物番号	出土区	層位	分類	器種	胴		胎土	色		取上番号	備考
						外面	内面		外面	内面		
19	30	B33	Ⅲ								12014	早稲期土器
27	71	D1	Ⅳ		沈線	沈線					15301他	骨組式土器
	72	C7	Ⅳ		糸痕	糸痕	bl,qz	淡赤褐色	淡赤褐色		15139	
	73	C7	Ⅳ		口縁	糸痕	bl,qz	淡赤褐色	淡赤褐色		5750	
	74	C8	Ⅳ		胴部	糸痕	bl,qz,磨	にぶい褐色	にぶい褐色		5814	
	75	C9	Ⅳ		胴部	糸痕	bl,qz,磨	にぶい褐色	にぶい褐色		8968	
28	76	D7	Ⅳ		胴部	糸痕	bl,qz,磨	にぶい褐色	にぶい褐色		2988	
	77	C10	Ⅳ		胴部	糸痕	bl,qz,磨	にぶい褐色	にぶい褐色		14748	
	78	D7	Ⅳ		ナデ	ナデ	bl,qz,磨	にぶい褐色	にぶい褐色		4992	
	79	C7	Ⅳ		胴部	ナデ	bl,qz,磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		4322	
	80	C6	Ⅳ		胴部	糸痕	bl,qz,磨	にぶい褐色	にぶい褐色		15630	
	81	C7	Ⅳ		胴部	糸痕	bl,qz,磨	暗褐色	暗褐色		9014	
29	82	C-67			口縁	糸痕	fl,hoqz	黒褐色	褐色		8163	
	83	C7	Ⅲb-Ⅳ	1	口縁	糸痕	hoqz	褐色	黒色		4278他	
	84	C7	Ⅳ	1	口縁	糸痕	fl,hoqz	赤褐色			12983	
	85	C6	Ⅳ	2	口縁	糸痕	fl,qz	黒褐色	黒褐色		12231	
	86	C7	Ⅳ	2	口縁	糸痕	fl,qz	黒褐色	黒褐色		12414他	
	87	C6-D7	Ⅳ	2	口縁	糸痕	qz	にぶい褐色	にぶい褐色		16183他	
	88	C6	Ⅳ	2	口縁	糸痕	hoqz,磨	褐色	褐色		5260	
30	89	C3	Ⅳ	2	口縁	糸痕	fl	黒褐色	黒褐色		8330	
	90	C7	Ⅳ	2	口縁	糸痕	hoqz	褐色	にぶい褐色			
	91	C5	Ⅳ	2	口縁	糸痕	qz	にぶい黄褐色	黒褐色		9355	
	92	C6	Ⅳ	2	口縁	糸痕	hoqz	にぶい黄褐色	にぶい褐色		14641	
	93	C7	Ⅳ	2	口縁	糸痕	bl,fl,qz	黒褐色	にぶい褐色		5762	
	94	D7	Ⅳa	2	口縁	糸痕	fl,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		5275	
	95	C3	Ⅳ	2	胴部	糸痕	qz	にぶい褐色	にぶい褐色		6324	
	96	C7	Ⅳ	2	胴部	糸痕	qz	黒褐色	赤褐色		15086	
	97	C3	Ⅳ	3	口縁	糸痕	bl,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色		3903	
	98	C6	Ⅳ	3	口縁	糸痕	qz	にぶい褐色	にぶい褐色		11162他	
	99	D7	Ⅳa	3	口縁	糸痕	hoqz	にぶい褐色	にぶい褐色		4964	
31	100	D7	Ⅳa	3	口縁	糸痕	hoqz	褐色	褐色		3917	
	101	C6	Ⅳ	3	口縁	糸痕	bl,qz	黒褐色	褐色		13387他	
	102	C1	Ⅳ	3	口縁	糸痕	qz	暗褐色	にぶい褐色		9702	
	103	C6	Ⅳ	3	口縁	糸痕	qz,磨	にぶい黄褐色	黒褐色		12255	
	104	C7	Ⅳ	3	胴部	糸痕	fl,qz,磨	にぶい黄褐色	暗褐色		11837	
	105	C7	Ⅳ	4	胴部	糸痕	hoqz	黒褐色	暗褐色		3482	
	106	C3	Ⅳ	4	口縁	糸痕	fl,hoqz	明黄褐色	明黄褐色		6332	
32	107	D3	Ⅳa	5	口縁	糸痕	fl,hoqz	にぶい黄褐色	黒褐色		155	
	108	C7	Ⅳ	5	口縁	糸痕	hoqz	褐色	褐色		10744他	
	109	D7	Ⅳa	5	口縁	糸痕	bl,qz,磨	黒褐色	灰黄褐色		5708	
	110	C6	Ⅳ	5	胴部	糸痕	qz	褐色	にぶい黄褐色		14781	
	111	C3	Ⅳ	5	胴部	糸痕	bl,hoqz	黒褐色	黒褐色		10037	
	112	D6	Ⅳa	7	口縁	糸痕	qz	にぶい黄色	にぶい黄色		1919	
	113	C7	Ⅳ	7	口縁	糸痕	qz,磨	褐色	黄褐色		15383	
	114	C6	Ⅳ	7	口縁	糸痕	hoqz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		5363	
	115	C6	Ⅳ	7	口縁	糸痕	fl,qz,磨	暗褐色	黒褐色		13784	
	116	C7	Ⅳ	7	口縁	糸痕	fl,qz,磨	黒褐色	オリーブ褐色		11701	
	117	D6	Ⅳa	7	口縁	糸痕	hoqz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		871	
	118	C6	Ⅳ	10	口縁	糸痕	qz,磨	褐色	褐色		10431	
	119	C6	Ⅳ	10	胴部	糸痕	qz	黒褐色	黒褐色		9480	
	120	C6	Ⅳ	11	口縁	糸痕	qz,磨	黒褐色	暗褐色		4843	
33	121	C-D7	Ⅲb-Ⅳ	11	口縁	糸痕	hoqz	黒褐色	暗褐色		14357他	
	122	C6	Ⅳ	11	口縁	糸痕	fl,hoqz	灰褐色	にぶい褐色		11510	
	123	D7	Ⅳa	11	胴部	糸痕	hoqz	にぶい褐色	灰黄褐色		5364	
	124	C6	Ⅳ	11	胴部	糸痕	fl,qz	黒褐色	褐色		5985他	
34	125	C6-7	Ⅳ	12	口縁	糸痕	fl,hoqz	黒褐色	にぶい褐色		5996他	
	126	C6	Ⅳ	12	口縁	糸痕	hoqz	黒褐色	褐色		10400	
	127	C6	Ⅳ	12	口縁	糸痕	fl,hoqz	黒褐色	暗褐色		4895	
	128	D7	Ⅳa	12	口縁	糸痕	qz	黒褐色	暗褐色		5840	
	129	C6-7	Ⅳ	12	口縁	糸痕	hoqz	黒褐色	灰黄褐色		4566他	
	130	C1	Ⅳ	12	口縁	糸痕	qz	暗褐色	暗褐色		7847	
	131	C6	Ⅳ	12	口縁	糸痕	fl,qz,磨	黒褐色	にぶい黄褐色		10283	
	132	C6	Ⅳ	12	口縁	糸痕	hoqz,磨	黒褐色	にぶい赤褐色		5641他	
	133	D7	Ⅳa	12	口縁	糸痕	fl,qz	にぶい黄褐色	灰黄褐色		500	
	134	C7	Ⅳ	12	口縁	糸痕	fl,qz	黒褐色	灰黄褐色		12102	
35	135	C7	Ⅳ	12	胴部	糸痕	qz	灰褐色	褐色		12681他	
	136	C6	Ⅳ	12	胴部	糸痕	hoqz	灰褐色	にぶい褐色		12334	
	137	D7	Ⅳb	12	胴部	糸痕	hoqz	黒褐色	にぶい黄褐色		1308	
	138	C7	Ⅳ	12	胴部	糸痕	fl,qz	にぶい褐色	灰褐色		12600他	

第9表 鷺ヶ追遺跡縄文土器観察表(2)

持図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	種類	陶 器		胎土	色 調		取上番号	備 考
						外面	内面		外面	内面		
36	139	C7	IV		口縁一割			hoqz	黒褐色	暗灰色	13046他	
37	139											
38	141	C7	IV	32	胴部	赤灰	赤灰	hoqz, 緑	褐色	にぶい黄褐色	7747	133と混合
39	142	C7	IV	13	口縁一割			qz, 緑	黒褐色	褐色	13969他	
	143	C7	IV	13	口縁	赤灰	赤灰	fl, qz	黒褐色	褐色	14198	
40	144	C6	IV	13	口縁一割	赤灰	赤灰	hoqz, 緑	黒褐色	にぶい褐色	9577他	
41	145	B6-C6?	IV	14	口縁	赤灰	赤灰	qz, 緑	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	13368他	
	146	C7	IV	14	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	14495他	
	147	C6-7	IV	14	口縁	赤灰	赤灰	qz, 緑	灰青褐色	にぶい黄褐色	14544他	
42	148	C7	IV	14	口縁	赤灰	赤灰	qz, 緑	灰褐色	にぶい黄褐色	15694他	
	149	C3	IV	14	口縁	赤灰	赤灰	qz	黒褐色	暗灰色	6374	
	150	C6	IV	14	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	褐色	にぶい褐色	9610	
	151	C7	IV	14	口縁	赤灰	赤灰	bl, qz	黒褐色	灰青褐色	12795	
	152	C7	IV	14	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	7745	
	153	C7	IV	14	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	黒褐色	にぶい褐色	13096	
	154	C6	IV	14	口縁	赤灰	赤灰	qz	褐色	黄灰色	3021	
	155	C7	IV	14	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	にぶい褐色	にぶい赤褐色	8927	
	156	D7	IVa	14	胴部	赤灰	赤灰	hoqz	褐色	にぶい褐色	38	
	157	C7	IV		口縁	赤灰	赤灰	qz	灰黄褐色	灰黄褐色	14089	
43	158	C7	IV	14	胴部	赤灰	赤灰	fl, hoqz	にぶい褐色	にぶい褐色	12972	
	159	C7	IV	14	胴部	赤灰	赤灰	qz, 緑	にぶい褐色	褐色	15472	
	160	D7	IVa	14	胴部	赤灰	赤灰	hoqz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	5367	
	161	C6	IV	14	胴部	赤灰	赤灰	hoqz	褐色	にぶい褐色	7518	
	162	C6	IV	14	胴部	赤灰	赤灰	qz, 緑	黒褐色	にぶい黄褐色	10416	
	163	C7	IV	14	胴部	赤灰	赤灰	qz	黒褐色	にぶい褐色	13998	
	164	C7	IV	14	胴部	赤灰	赤灰	fl, qz	黒褐色	にぶい褐色	8041	
	165	C7	IV	14	胴部	赤灰	赤灰	hoqz	灰褐色	にぶい褐色	13698	
	166	D4	IVa	15	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	黒褐色	にぶい黄褐色	177	
	167	D7	IVa	15	胴部	赤灰	赤灰	qz, 緑	明褐色	明褐色	4766	
	168	C6	IV	16	口縁	赤灰	赤灰	st, fl, qz	黒褐色	にぶい赤褐色	11339	
	169	C6	IV	16	胴部	赤灰	赤灰	qz, 緑	黒褐色	褐色	14580	
	170	D7	IVa	16	口縁	赤灰	赤灰	fl, qz	黒褐色	黒褐色	4732	
	171	C6	IV	16	胴部	赤灰	赤灰	qz, 緑	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	13775	
	172	C6	IV	16	胴部	赤灰	赤灰	qz, 緑	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	10376	
	173	D7	IVa	17	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	黒褐色	にぶい黄褐色	5297他	
	174	C6	IV	17	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	黒褐色	にぶい黄褐色	6665	
	175	C3	IV	17	口縁	赤灰	赤灰	qz, 緑	黒褐色	褐色	6302	
45	176	C3	IV	17	口縁	赤灰	赤灰	qz	にぶい黄褐色	灰黄褐色	3785	
	177	C7	IIIb	17	口縁	赤灰	赤灰	qz, 緑	褐色	にぶい褐色	4289	
	178	C7	IV	17	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	黒褐色	にぶい褐色	14138	
	179	D7	IVa	17	口縁	赤灰	赤灰	qz	黒褐色	褐色	5391	
	180	C7	IV	17	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	灰黄褐色	にぶい赤褐色	13069	
	181	C6	IV	17	胴部	赤灰	赤灰	hoqz	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	7521他	
	182	C6-7	IV	17	胴部	赤灰	赤灰	hoqz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	8812他	
46	183	C6	IV	17	胴部	赤灰	赤灰	qz, 緑	黒褐色	にぶい赤褐色	10430	
	184	C1	IV	17	胴部	赤灰	赤灰	hoqz	黒褐色	褐色	7938他	
	185	C7	IV	17	胴部	赤灰	赤灰	qz	灰黄褐色	にぶい黄褐色	13296	
	186	C3	IV	18	口縁	赤灰	赤灰	qz	暗褐色	黒褐色	6221	
	187	C3	IV	18	口縁	赤灰	赤灰	qz	黒褐色	にぶい褐色	6341	
	188	C6	IV	18	口縁	赤灰	赤灰	qz	にぶい黄褐色	褐色	5333	
	189	C3	IV	18	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	8322	
	190	C7	IV	18	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	明赤褐色	明赤褐色	10625	
	191	D7	IVa	18	口縁	赤灰	赤灰	qz	にぶい黄褐色	褐色	5240	
47	192	C7	IV	18	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	褐色	褐色	4382他	
	193	D7	IVa	18	口縁	赤灰	赤灰	qz	黒褐色	褐色	一括	
	194	D7	IVa	18	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	褐色	褐色	4130	
	195	D7	IVa	18	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	にぶい褐色	褐色	5345	
	196	C6	IV	18	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	黒褐色	にぶい褐色	11193	
	197	C7	IV	18	口縁	赤灰	赤灰	qz	黒褐色	にぶい褐色	5875	
	198	D7	IVa	18	口縁	赤灰	赤灰	hoqz	褐色	明赤褐色	4866	
	199	C7	IV	18	胴部	赤灰	赤灰	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	5561他	
	200	C7	IV	18	胴部	赤灰	赤灰	st, qz	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	13275	
48	201	C6	IV	18	胴部	赤灰	赤灰	qz	黄灰色	黒褐色	9567	
	202	C6	IV	18	胴部	赤灰	赤灰	fl, qz	にぶい褐色	にぶい褐色	7580	
	203	C6	IV	18	胴部	赤灰	赤灰	bl, qz	明赤褐色	にぶい黄褐色	14579	
	204	C6	IV	18	胴部	赤灰	赤灰	hoqz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	14783	
	205	C7	IV	19	口縁	赤灰	赤灰	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	13261	
49	206	D7	IVa	19	口縁	赤灰	赤灰	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	5596	
	207	C6	IV	19	口縁	赤灰	赤灰	hoqz, 緑	にぶい褐色	にぶい黄褐色	10281他	

第10表 鷲ヶ迫遺跡縄文土器観察表(3)

探出 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	割 装		胎土	色 調		取上番号	備 考
						外面	内面		外面	内面		
49	208	D7	Ⅳa	19	口縁	赤灰	赤灰	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	5738	
	209	D7	Ⅳa	19	口縁	赤灰	赤灰	qz	にぶい黄褐色	灰黄褐色	12094	
	210	C6	Ⅳ	19	口縁	赤灰	赤灰	qz	黒褐色	にぶい褐色	13098	
	211	C2-7	Ⅳ	19	口縁	赤灰	赤灰	st,qz	灰黄褐色	褐灰色	10690他	
	212	C7	Ⅳ	19	口縁	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい褐色	灰黄褐色	8817	
	213	C3	Ⅳ	19	口縁	赤灰	赤灰	ho,qz	灰黄褐色	にぶい褐色	3783	
	214	C6	Ⅳ上	19	口縁	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	4072	
	215	C7	Ⅳ	19	口縁	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい褐色	にぶい褐色	8816	
	216	D7	Ⅳa	19	口縁	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい褐色	褐色	4106	
	217	C7	Ⅳ	19	口縁	赤灰	赤灰	ho,qz	黒褐色	灰褐色	14452	
	218	C6	Ⅳ	19	口縁	赤灰	赤灰	qz,糞	黒褐色	にぶい黄褐色	11497	
	219	C6	Ⅳ	19	胴部	赤灰	赤灰	ho,qz	黒褐色	にぶい黄褐色	5706	
50	220	H6	Ⅳ	19	胴部	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい褐色	5169他	
	221	C6-7	Ⅳ	19	胴部	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	7667他	
	222	C6	Ⅳ	20	底部	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	11085	
	223	D7	Ⅳa	20	底部	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい黄褐色	褐灰色	6113	
	224	C3	Ⅳ	20	底部	赤灰	赤灰	qz,糞	にぶい黄褐色	赤褐色	6625	
	225	C6	Ⅳ	20	底部	赤灰	赤灰	ho,qz	褐色	にぶい赤褐色	9184	
	226	C3	Ⅲb	20	底部	赤灰	赤灰	fl,ho,qz	にぶい褐色	褐灰色	3246	
	227	D7	Ⅳa	20	底部	赤灰	赤灰	fl,qz	にぶい黄褐色	黒褐色	一括	
	228	D7	Ⅳa	20	底部	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい褐色	にぶい褐色	5212	
	229	D7	Ⅳa	20	底部	赤灰	赤灰	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	3786	
	230	H6	Ⅳ	20	底部	赤灰	赤灰	qz	にぶい黄褐色	褐色	9636	
	51	231	D7	Ⅳa	20	底部	赤灰	赤灰	qz	にぶい褐色	褐色	4643
232		C7	Ⅳ	20	底部	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい褐色	12910	
233		C7	Ⅳ	20	底部	赤灰	赤灰	qz	にぶい赤褐色	褐色	12798	
234		D7	Ⅳa	20	底部	赤灰	赤灰	qz	にぶい褐色	褐灰色	5705	
235		D7	Ⅳa	20	底部	赤灰	赤灰	fl,ho,qz	にぶい黄褐色	褐灰色	2966	
236		C3	Ⅳ	20	底部	赤灰	赤灰	qs	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	10008	
237		D7	Ⅳa	20	底部	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3002	
238		D7	Ⅳa	20	底部	赤灰	赤灰	qz	にぶい褐色	褐灰色	5158	
239		C7	Ⅳ	20	底部	赤灰	赤灰	ho,qz	明赤褐色	にぶい褐色	5914	
240		C3	Ⅳ	20	底部	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	6267	
52		244	C6	土坑	口縁	赤灰	赤灰	qz	褐色	褐色	6384	
		245	C6	土坑	口縁	赤灰	赤灰	qz	黒褐色	にぶい褐色	4556	
	246	C6	土坑	口縁	赤灰	赤灰	qz	にぶい黄褐色	褐灰色	5951		
	247	C6	土坑	口縁	赤灰	赤灰	hl,fl,qz	黒褐色	褐灰色	4576他		
	248	C6	土坑	胴部	赤灰	赤灰	qz	灰黄褐色	褐灰色	4437		
	249	C6	土坑	口縁	赤灰	赤灰	qz	にぶい褐色	褐色	4518他		
	250	D1		口縁	赤灰	赤灰	hl,qz	にぶい黄褐色	褐灰色			
53	251	D5	住1	口縁	赤灰	赤灰	ho,qz	灰黄褐色	にぶい褐色	8246他		
	252	D5	住1	口縁	赤灰	赤灰	qz	黄褐色	黄褐色	13226		
	253	D45	住1	口縁	赤灰	赤灰	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	8305		
	254	D45	住1	口縁	赤灰	赤灰	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	8651他		
	255	D6		口縁	赤灰	赤灰	fl,ho,qz	にぶい黄褐色	浅灰色	251		
	256	D2		口縁	赤灰	赤灰	hl,qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	548		

## 2 石器

縄文時代の石器は、石鎌・石槍・石匙・スクレイパー・楔形石器・石錐・石核・残核・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・磨石・石皿・砥石・軽石製品が出土している。石材は黒曜石・頁岩・玉髄・瑪瑙・安山岩・チャート・砂岩・花崗岩等がみられた。

石鎌 (第55～57図, 257～333)

本遺跡からは石鎌が77点出土し、その内3点は磨製石鎌である。IV a層, IV層, III層出土と分層し、その後、形態によってさらに細分した。

IV a層からは32点が出土した。黒曜石21点, 安山岩1点, ハリ質安山岩1点, 頁岩2点, 瑪瑙4点, 玉髄3点である。形態は様々で、磨製石鎌2点 (257, 258)、基部に膨らみをもつもの3点 (259～261)、大型で鋸歯状のもの1点 (262)、鋸歯状のもの8点 (263～270)、袈りの深いもの1点 (271)、袈りの浅いもの5点 (272～276)、欠損品11点 (277～287)、未成品1点 (288) である。

257, 258は共に頁岩を用いた磨製石鎌である。257は、全面に入念な研磨が施されており、研ぎ出しにより刃部を形成している。基部に袈りはないが、研磨により直線に仕上げられている。258は基部のみの欠損品であるが、全面に丁寧な研磨が施されている。両面の中央部に浅い凹みが見られるが、詳しい性格は不明である。259～261は基部に膨らみをもつ平基鎌である。259は三船産黒曜石, 260・261は玉髄を用いている。小柄で3点とも、ほぼ同じ大きさを呈している。いずれも厚みがあり、基部が丸くなる。先頭部が鈍く、下部に最大径を計る。262は大型で鋸歯状の石鎌である。腰岳産黒曜石を素材とし、丁寧な剥離により全体が仕上げられている。袈りがやや深く入り、逆刺は鋭い。ほぼ左右対称であり、非常に完成度の高いものである。263～270は側面に鋸歯状を呈するものである。263は上牛鼻産黒曜石, 264は針尾産黒曜石, 265・266は三船産黒曜石, 267・268は桑ノ木津留産黒曜石, 269・270は瑪瑙をそれぞれ素材としている。263は側面がやや内湾し、それに伴って脚部がわずかに外に張り出している。袈りが深く入り、逆刺は長く鋭い。264～266は側面が直線上を呈している。袈りがやや深く入り、逆刺は丸くなっている。また尖頭部は鈍くなっている。267・268は鋸歯状を呈する側面が、最大幅下端に向けてやや外湾している。袈りがやや深く入り、逆刺、尖頭部に鋭さはみられない。269は乳白色の瑪瑙, 270は浅黄色の瑪瑙をそれぞれ用いている。269は側面が直線上であり、鋸歯状の調整がわずかにみられ、やや小柄である。袈りが深く入り逆刺は鋭い。270は側面が脚部に向かってやや外湾し、強く鋸歯状を呈している。袈りがやや深く入り、逆刺は丸い。丁寧な調整剥離によって鋸歯が作成され、それにより尖頭部も鋭いものとなっている。271は黄灰色の瑪瑙を素材としている。側面は鋸歯状であるが、脚部付近でわずかに外湾する。袈りは深く入っているが、両脚の長さには差があり逆刺、尖頭部は丸くなっている。272～276は袈りの浅いものである。272は桑ノ木津留産黒曜石, 273は針尾産黒曜石, 274は淡橙色の瑪瑙, 275は玉髄, 276は安山岩をそれぞれ素材としている。272は側面やや内湾し、脚部がわずかに張り出している。基部は非常に浅く、裏面に主要剥離面を多く残す。273～275はいずれも側面が最大幅下端に向けてやや外湾する。袈りは広く浅く形成されており、それに伴い逆刺は非常に鈍い。尖頭部はやや鈍くなっている。276は、側面が鋸歯状となり尖頭部はに向けてやや外湾する。袈りは微細剥離により浅く広く作られ、逆刺が鋭くなっている。

277～287は欠損品である。277・278は尖頭部が欠損し、277は椎葉川産黒曜石, 278は三船産黒曜

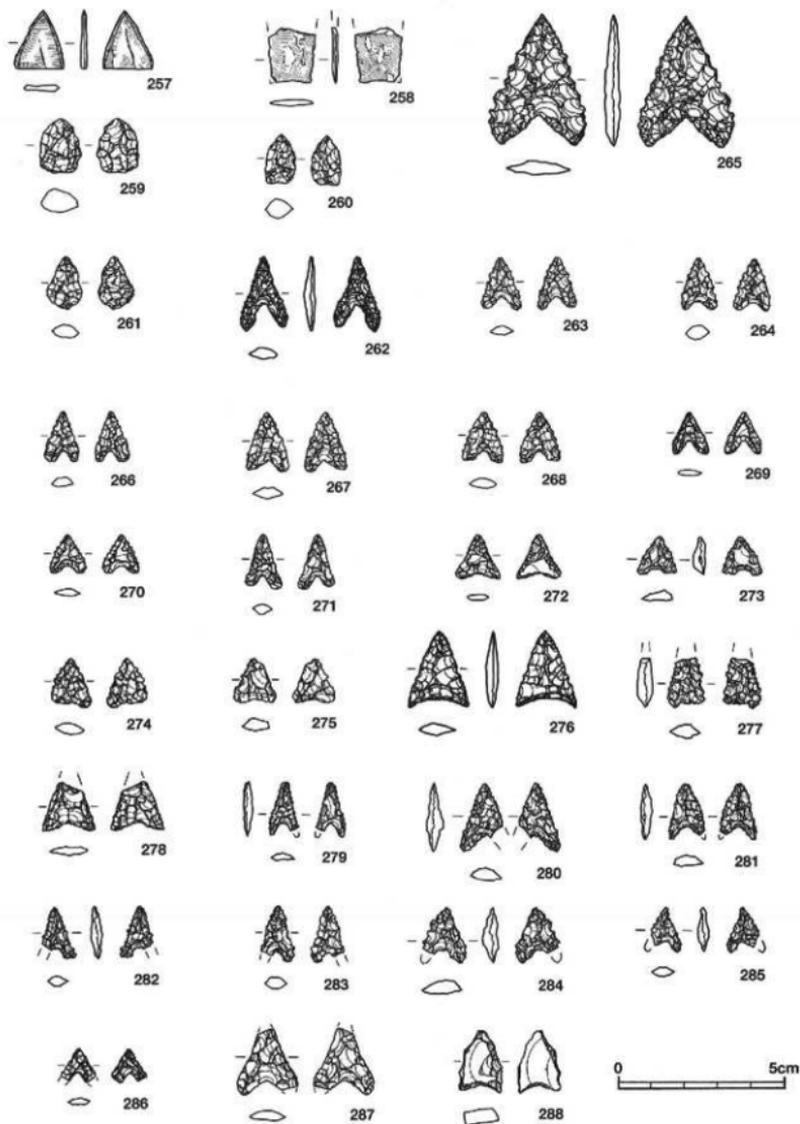
石を用いている。277は側辺が直線で、鋸歯状を呈する。挟りはなく、平基盤と考えられる。278も同様、鋸歯状を呈するが、やや浅い挟りが入り、鈍い逆刺を有する。279~286は脚部が欠損している。279・280は側辺が直線で、鋸歯状を呈している。挟りが深く入り、逆刺がやや鋭く作られている。尖頭部は、279が丸く、280が鋭いものとなっている。281は両側辺が不揃いなものである。尖頭部が鈍く、挟りは深く入るが、逆刺は鋭いものとなっている。282は側辺が直線で、鋸歯状を呈している。尖頭部は鋭く、挟りが深く入り、逆刺は非常に鈍くなっている。283~285は脚部が欠損し、側辺が非対称なものである。側辺の調整に統一性がみられず、また挟りも中心から外れて入れられており、非常にバランスが悪く見える。286は上牛鼻産黒曜石を用いた両脚の欠損したものである。小柄であるが、丁寧な調整剥離により側辺が形成され、尖頭部も鋭いものとなっている。287はハリ質安山岩を素材とした尖頭部と脚部の欠損したものである。側辺が中央付近で強く内弯し、脚部はやや外に張り出した形となっている。挟りが深く入り逆刺は丸くなっている。

288は未成品である。桑ノ木津留産黒曜石の縦長剥片を利用し、表面からの押し剥離により石鏃も形を作り出している。刃部は形成されておらず、主要剥離面が多く残る。

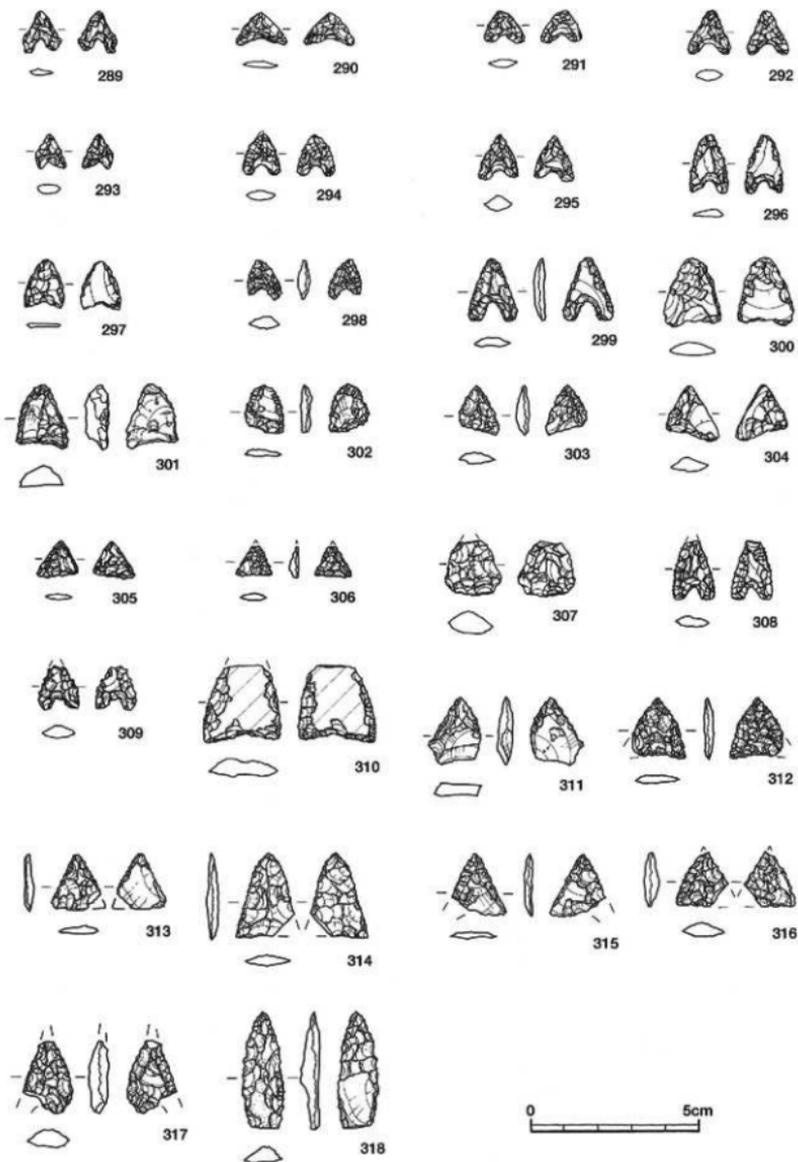
IV層からは、30点の石鏃が出土した。IV a層出土の石鏃同様、形態ごとに分類した、石材は黒曜石19点、瑪瑙2点、玉髄3点、鉄石英1点、安山岩5点である。

形態は、五角形鏃1点(289)、幅の広い石鏃2点(290・291)、鋸歯状のもの6点(292~297)、挟りの深いもの2点(298・299)、挟りの浅いもの6点(300~305)、欠損品12点(306~317)、その他形状1点(318)である。289は玉髄を用いた小柄の五角形鏃である。側辺下部に張り出しが作られている。挟りが深く入るが逆刺は鈍く、左右非対称である。290・291は、横幅に対して側辺が短く、脚部に向けて外弯している。尖頭部は丸く鈍い。挟りは浅く逆刺は鈍い。2点とも上牛鼻産黒曜石を用い、プーメランのような形を呈した、小柄なものである。292~297は、側辺に鋸歯状を呈するものである。292は側辺がわずかに内弯し、深く挟りが入る。尖頭部、逆刺共に丸い。293は非対称の側辺を呈し、中心から外れた所に深く挟りが入る。尖頭部は鋭いが、全体的にバランスが悪い。294~297は、側辺に鋸歯状を呈するが、外弯し、尖頭部、逆刺が丸く、挟りが浅いものである。296・297は裏面に主要剥離面を多く残し、主に裏からの調整剥離によって側辺を形成している様子がよく観察できる。298は、片側辺がわずかに外弯しているが、両側辺に鋸歯状を呈する。深い挟りが中心から外れた位置に作られており、非常にバランスが悪い。299は、側辺に鋸歯状を呈したものである。鉄石英の縦長剥片を用いており、やや内彎に反る形となっている。挟りが深く入るが、逆刺、尖頭部共に丸くなっている。

300~305は挟りの浅いものである。300・301は共に縦長剥片を用いており、両側辺がやや粗いタッチの調整剥離によって形成されている。また、側辺がわずかに外弯し、尖頭部が丸く鈍いものとなっている。302・305は挟りを持たず、左右の側辺の長さには差があるものである。302・303は、側辺に鋸歯状を呈し、やや外弯する。尖頭部は302が丸く、303が鋭くなっている。304・305は、側辺が直線となり、鋸歯を呈さない。尖頭部はややまるい。306~317は欠損品である。306・307、310~316は挟りが浅いものである。306・307・311・314・316は、基部に挟りを持たない平基盤である。306は小柄で、両側辺が直線上であり、中心部のは微細剥離痕がみられる。307は、両側辺、基部が外弯し全体的に丸く見える。粗いタッチで調整が施されており、完成度が低い。311は、両側辺に



第55図 磨製石鏃・打製石鏃 (1)



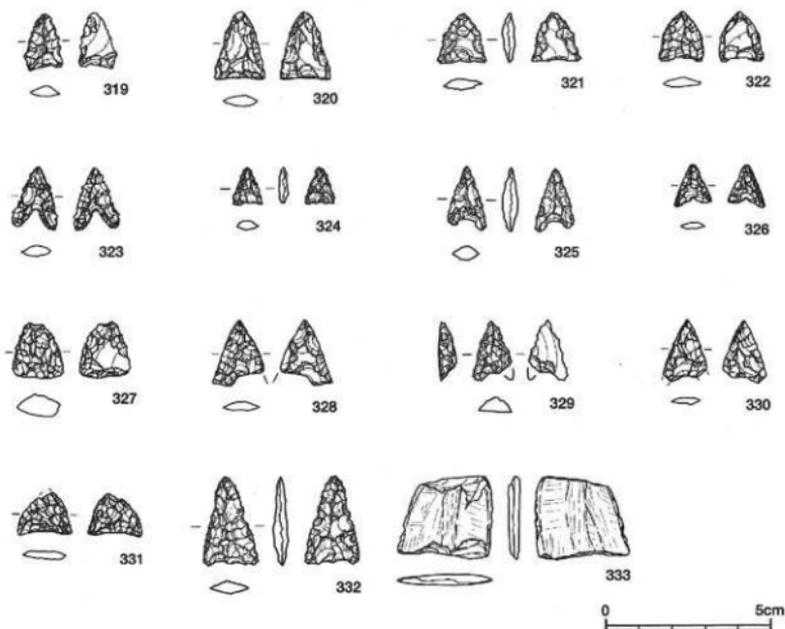
第56図 打製石礫 (2)

のみ調整剥離が施されており、基部に調整はみられない。また、裏面には、主要剥離面を多く残す。313・314は安山岩を用いている。313は横長剥片を用い、両側辺は直線状であり、わずかに鋸歯状を呈する。逆刺、尖頭部はやや丸く、ほぼ正三角形である。314は、側辺が直線であり鋸歯状であるが、尖頭部付近で角度が内側に曲がり、五角形の形状を呈している。基部は調整剥離により、直線となっている。丁寧な調整により、全体が仕上げられている。308・309は、深く抉りが入ったものである。2点とも側辺がわずかに外弯し、鋸歯状を呈している。尖頭部が欠損しているため、詳しい情報は判断できないが、逆刺は丸くなっている。310・312・315は抉りの浅いものである。310・312は、側辺がやや外弯し、鋸歯状を呈さない。310は尖頭部が欠損しているが、312は尖頭部が鋭く作られている。315は、側辺がわずかに内弯し、鋭く尖頭部が作られている。正面からの調整剥離によって非常に浅い抉りが施されている。317は側辺に差があり、左右非対称となっている。尖頭部、逆刺が欠損しており、形の悪い抉りが施されている。

318はその他の形態のものである。安山岩の縦長剥片を素材としており、石鏃に分類したが、小型の石槍の可能性もある。自然面を多く残し、尖頭部はやや鋭く、側辺は外弯し、最大幅が中央にある。基部は欠損しているため確認できないが、膨らみを持つものである可能性がある。

Ⅲ層からは、15点の石鏃が出土した。黒曜石6点、チャート1点、玉髄1点、安山岩5点、黒色頁岩1点、頁岩1点である。形態は様々あり、両側辺に張り出しを持つ五角形のもの。(319~322)両側辺が直線状で抉りがあるもの。(323~326)半基のもの。(327)欠損品(328~331)磨製石鏃(333)その他形状(332)である。319は黒褐色のチャートを素材としている。両側辺は鋸歯状を呈しているが、下部に意識的に突起部が作られている。抉りは浅く裏面に主要剥離面を多く残す。

321・322は安山岩を素材としており、逆刺が丸くにぶいものである。322は、側辺部の突起は目立たず。全体が丸みをおびている。2点とも抉りが非常に浅い。320は安山岩を素材にしている。側辺に突起はみられないが、側辺の下部から意識的に角度が変わっており、五角形鏃と判断した。逆刺は丸く、基部は非常に浅い。323~326は側辺が直線状で抉りをもつものである。323は、腰岳産黒曜石を素材とし側辺部に鋸歯状を呈するものである。抉りが深く入り、丁寧な調整剥離によって全体が仕上げられている。325・326は、側辺部に鋸歯状を呈しないが、抉りをもつものである。325は黒色頁岩、326は三船産黒曜石を素材としている。325は半円状の抉りがやや深く入り、326は三角形の抉りが浅く入っている。324は三船産黒曜石を素材としている。小柄で側辺が直線状であり、わずかに抉りが入っている。327は、玉髄を素材とした平基鏃である。両側辺がやや外弯し、下辺も外弯している。荒いタッチで調整がほどこされており、全体的に厚みがある。328~331は先頭部及び脚部の欠損したものである。328は、桑ノ木津留産黒曜石を素材としたものである。側辺部がわずかに外弯し逆刺がすどく、抉りがやや深く入り、全体に丁寧な調整剥離が施されている。329は、針尾産黒曜石を素材としている。主要剥離面の多い裏面からの調整剥離により、側辺を形成している。断面はカマボコ状を呈している。330は、安山岩を素材としている。側辺部は直線状で、逆刺がすどい抉りは浅く大まかな調整により作られている。331は、三船産黒曜石を素材としている。両側辺の長さ差があり、左右非対称である。抉りが浅く幅が広い。332は、安山岩を用いた、側辺が段状を呈するものである。側辺のほぼ中央に深い剥離をほどこし、二段階の側辺を作っている。荒いタッチの剥離により側辺部が作られており一見、鋸歯状を思わせる。浅い抉りが



第57図 打製石鏃 (3)

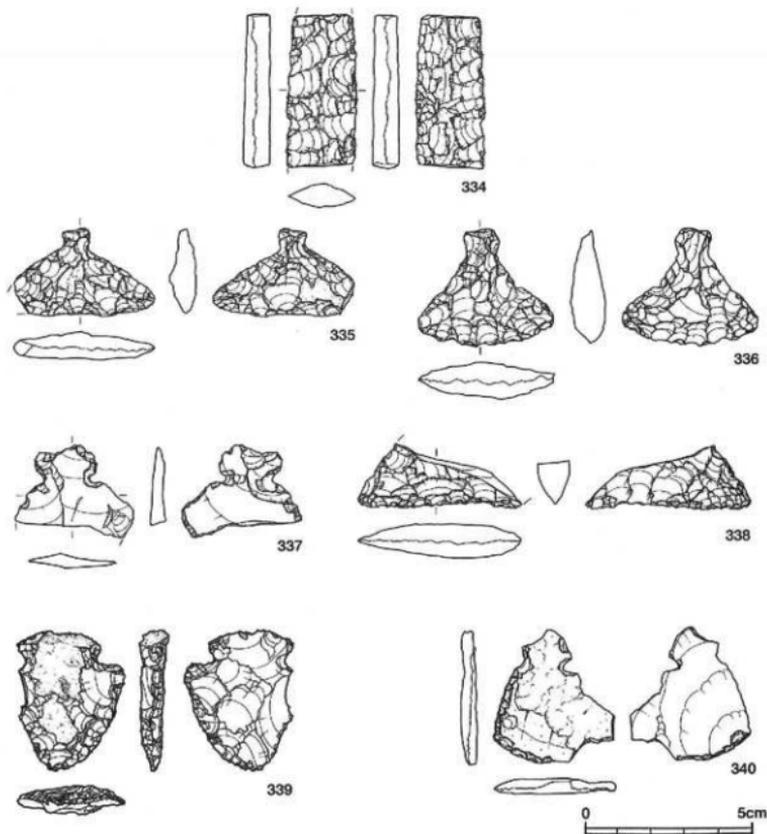
2箇所あり、アルファベットの「M」を思わせる。333は、頁岩を用いた、先頭部の欠損した磨製石鏃である。全体が磨きあげてあり、両面の中央部に浅い溝が作られている。古墳時代の種をもつ石鏃と酷似しており、これも同時期・同タイプのものである可能性がある。

#### 石槍 (第58図, 334)

先端部と基部が欠損する。黒色安山岩を素材とし、縄文時代早期の石槍に概当する遺物の可能性があるが、表探遺物のため、詳しい時期等は不明である。両面に調整剥離がほどこされており、表面には自然面が残る。

#### 石匙 (第58図, 335~340)

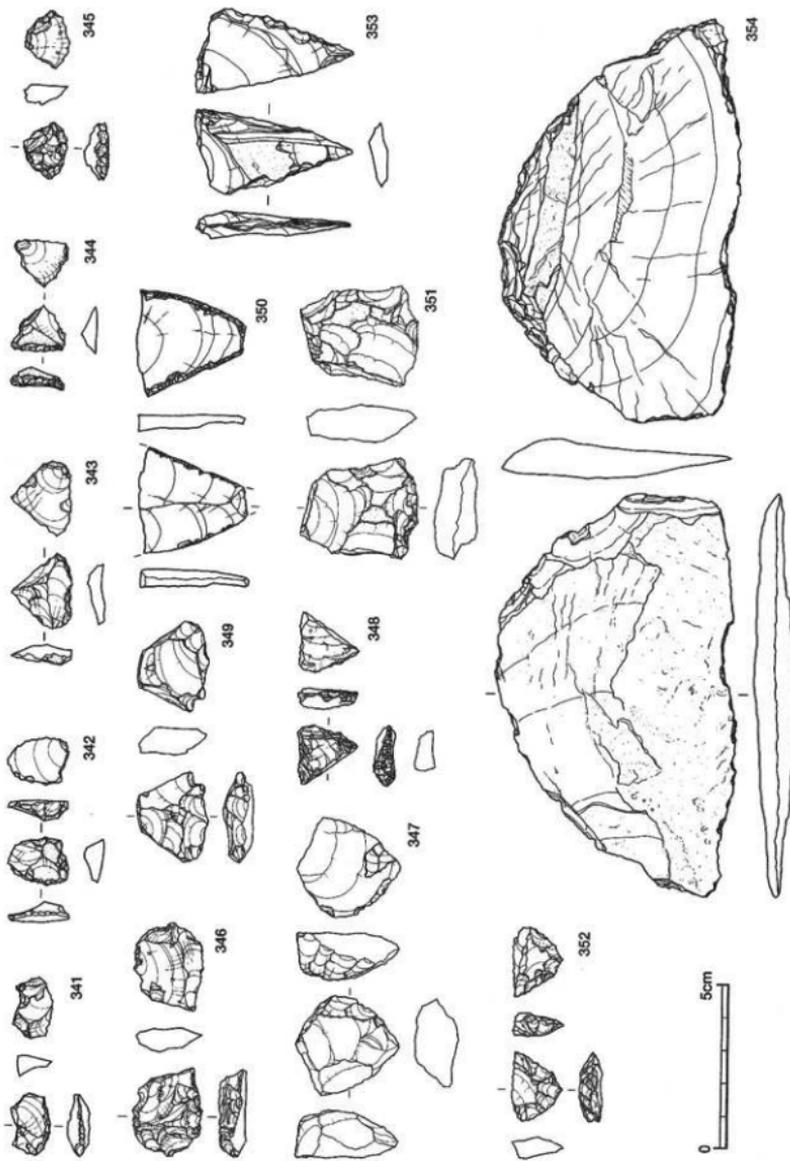
石匙は、6点出土し、内2点は欠損品である。縦型、横型があり身部の平面形は多様である。外部の調整は片面調整(片刃)、両面調整(両刃)があるが、片面調整のものは出土していない。刃部の形態は、左右の挟りを結ぶ線を基準にした場合、外弯気味に平行するもの(335, 336)先端で交わる斜行する両側線に刃部を有するもの(339, 340)刃部の欠損品(337)つまみ部の欠損品(338)がある。加工調整は、縁辺部のみにもみられ、身部全体に及ぶものはみられない。335は、正面に節理面を有する玉髄を素材とし、表裏からの調整で急な挟りが入る。左肩が欠損しているが、わずかに外弯する両面調整の刃部を呈する。336は正面から裏面にかけて節理面を有する玉髄を素



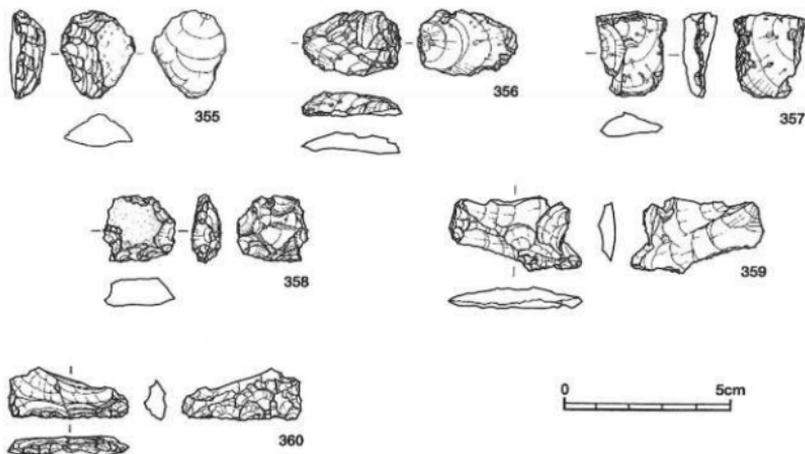
第58図 石槍・石匙

材としている。身部は、ほぼ正三角形で、左右に両面からの調整で浅い抉りが入る。両面調整で作られた刃部は外湾する。337は、灰色のチャートを素材とした刃部の欠損したものである。つまみ部分と左右の肩部から石匙と判断した。欠損品のため刃部の性格は不明である。

338は、玉髄を素材としたつまみ部が欠損したものである。刃部は両面からの調整がなされ、ほぼ直線の刃部をもつ。339・340は、自然面を有する黒色安山岩を素材としている。2点ともつまみ部分の調整・加工は雑で左右に、表裏からの剥離で半円状の抉りが入る。両面からの調整により刃部が形成され、340は、両面加工の調整剥離が施されている。



第59図 スクレイバー (1)



第60図 スクレイパー (2)

スクレイパー (第59・60図, 341~360)

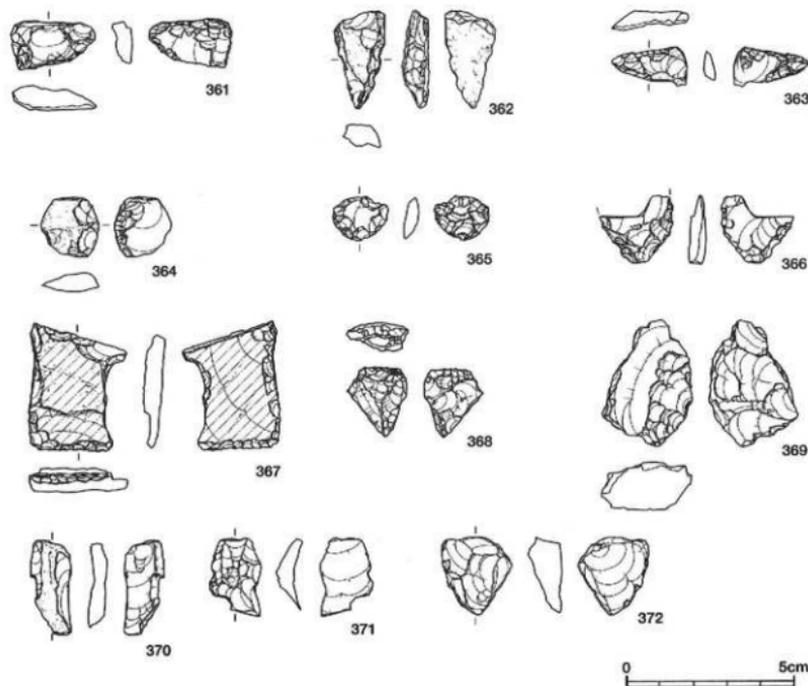
スクレイパーは20点出土し、Ⅳa層からは3点、Ⅳ層からは11点、Ⅲ層からは6点である。

Ⅳa層出土のものは、341~343である。

341は、椎葉川産黒曜石を使用している。上面に自然面が残り、下縁部に表裏からの調整剥離により刃部を形成している。342は、節理面を有する縦長剥片を素材とし、表面には主要剥離面を残す。主に裏面からの剥離によって、左側辺に刃部を形成している。343は、不純物を多く含む玉髓の縦長剥片を素材としている。三角形形状を呈しており、左側辺で底辺に刃部を有する。左側辺は表裏からの調整下縁は裏面からの調整により、刃部が形成されている。

Ⅳ層出土のものは344~354である。

344は、上牛鼻産黒曜石の縦長剥片を素材としている。表面には自然面を残し表面には主要剥離面を多く残している。左側辺には裏面からの調整が行われており、下辺部には使用痕がみられる。345は、三船産黒曜石の横長剥片を素材としている。下部に裏からの調整により外湾する刃部が形成されている。346・347・349は、三船産黒曜石の縦長剥片を素材としたものである。346・349は、両面からの調整によって、下縁に刃部を作り、347は右側辺に裏面からの調整により刃部が作られている。3点とも厚い刃を呈している。348は三船産黒曜石を素材としている。逆三角形を呈し、右側辺に主に裏からの剥離によって分厚い刃を形成している。350は、暗緑色のチャートの縦長剥片を用いている。上部と下部が欠損しているが、逆三角形を呈するものであると考えられる。両側辺に細かい調整剥離が表裏面からなされており、欠損する両側辺部にも加工が施されていたものと考えられる。351は、両面に節理面を多く有する玉髓を素材としており、上部と両肩が欠損しているものである。下辺に両面からの大まかな調整剥離による外湾した刃部を呈する。352は、玉髓を



第61図 二次加工剥片・微細剥離痕剥片

素材としている。上部が欠損しているように見えるが、そこから細かな調整が施されており、完形品であると判断した。裏からの調整により表には連続する剥離がみられる。353は、安山岩の薄い縦長剥片を素材とし、鋭い逆三角形を呈している。左側辺に荒いタッチで両面からの調整が行われ、刃部はやや内湾している。354は、黑色頁岩の大型の剥片を素材としている。両面とも自然面を有し風化がみられる。下縁に波状の刃部を持ち、細かな両面からの調整がみられる。

Ⅲ層出土のものは355～360である。

355は、自然面を有する三船産黒曜石の縦長剥片を用いている。裏面は主要剥離面がそのまま残り、裏面からの調整により、上側辺から右側辺、下側辺にかけて刃部が形成されている。

356は、三船産黒曜石の縦長剥片を横にして、底部となった部分に調整を施したものである。両面からの調整によって刃部が形成されているが連続性はなく、使用による微細剥離が観察できる。

357は、三船産黒曜石の縦長剥片を用いている。一見、上部が欠損しているように見えるが、わずかに剥離痕がみられる。右側辺に両面からの細かい調整剥離によって刃部が作られている。

358は、正面に自然面を有し、不純物が非常に多い三船産黒曜石を用いている。左側辺の上部を除

く全ての面に表裏からの調整が入っており、下縁に、使用痕であろう微細剥離が多くみられる。

359は、貞岩の縦長剥片を横にしたものを素材としている。下辺に両面からの細かい調整剥離によって刃部を形成している。360は、ハリ賀安山岩の横長剥片を素材としている。両面から大まかな剥離により、波状の刃部が作られている。

#### 二次加工剥片 (第61図, 361~368)

黒曜石、水晶、チャート、蛋白石、玉髄など緻密な石材の剥片で、剥片剥離後の二次的な剥離がみられる剥片である。本遺跡からは8点が出土し、黒曜石4点、玉髄4点である。364~366・368は、黒曜石の剥片を用いている。

364は腰岳産黒曜石、365は三船産黒曜石、366は椎葉川産黒曜石、368は三船産黒曜石を素材としている。

364は、表面に自然面を有し、表面には主要剥離面が残る。左側面に刃部形成のためと思われる剥離が両面にみられる。側面は刃を成しておらず、性格は不明である。365は、円形を呈しているが、側面全部の面に表裏からの剥片による刃部が形成されている。366は、欠損部をのぞく全ての刃に、表裏からの調整がほどこされたものである。上面に自然面を有し、刃部が丁寧な作られているが、性格は不明である。368は、逆三角形を呈している。両側面が切断されており、上辺には細かい剥離が集中しており、わずかに、つぶれがみられるため楔形石器の欠損品の可能性がある。

361~363・367は、玉髄を素材としている。361~363は、3点とも三角形形状のものである。361・363は上辺に362は右側面に連続性のみられない荒い剥離が施されている。いずれも性格は不明である。367は節理面を多く有している。薄い玉髄の剥片を用いている。左側面から底辺にかけて表裏から規則正しい剥離が行われている。

#### 微細剥離痕剥片 (第61図, 369~372)

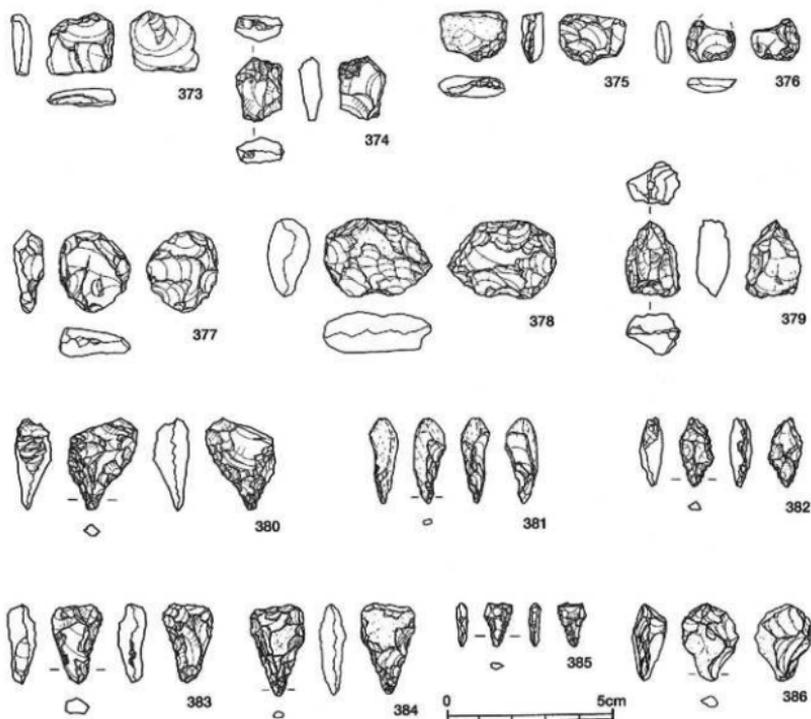
本遺跡からは4点出土した。いずれも黒曜石を用いており、母岩からの剥離の際にできた薄い部分にみられる傾向がある。369は、三船産黒曜石の横長剥片を用いている。左側面に調整痕らしき剥離がみられるが、正確性や連続性がみられず、刃部を形成していない。一見、スクレイパーのように見える。370は桑ノ木津留産黒曜石の弯曲した縦長剥片を用いている。右側面に微少な剥離が生じているが方向性、規則性はみられない。371は三船産黒曜石の縦長剥片を素材としている。剥片の末部が挟り状を呈しており、微細剥離がみられる。挟入石器として使われた可能性がある。372は三船産黒曜石の幅の広い縦長剥片を素材としている。弯曲する右側面に微細な剥離がみられるが、詳しい性格は不明である。

#### 楔形石器 (第62図, 373~379)

形状、縁部部の階段状剥離、対辺に向かって延びる剥離痕、剥離の重なり対辺同方を直線的に結ぶ断面の形成などの特徴を有する。石器及びその使用によって生じたと思われる破片を楔形石器(ピエス・エスキュー)と分類した。本遺跡からはⅣb層からⅢb層にかけて7点出土した。

使用形状を保つと考えられるもの(6点)欠損品(1点)である。

373は桑ノ木津留産黒曜石の縦長剥片を素材としており、断面が薄いものである。上辺と右側面に階段状の剥離と右側面上部につぶれがみられる。下部が欠損しているようにみられるがつぶれとわずかな剥離がみられた。374は三船産黒曜石を素材としている。両側面が切断されており、ほぼ



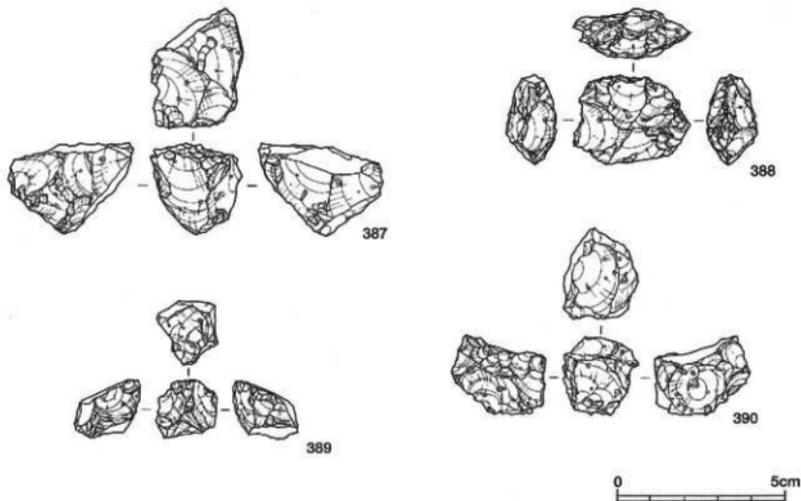
第62図 楔形石器・石錐

六角形を呈している。上辺下辺に階段状の剥離とつぶれがみられるが、特に上辺が目立つ。375は桑ノ木津留産黒曜石を使用し裏面には自然面を有する。上辺が切断されており、つぶれがみられる。上辺を除く全ての側面に階段状剥離がなされ、またそこからつぶれがみられる。376は桑ノ木津留産黒曜石を使用している。上部が欠けているが下部両側面に階段状剥離を呈し、つぶれがみられる。特に下部には叩きとつぶれが強くあらわれている。377は不純物の多い三船産黒曜石を使用している。上辺にはつぶれとわずかな階段状の剥離がみられ下部も同様の剥離とつぶれがみられる。378は三船産黒曜石を使用している。自然面を有し不純物が非常に多い。上辺には階段状の剥離がみられ、つぶれが上辺と左側面にみられる。下辺にもつぶれや階段状剥離がみられたが、正面に不純物やアバタが目立ち、剥離を見極める事が困難である。379は不純物の目立つ三船産黒曜石の縦長剥片を素材とし、ほぼ五角形を呈している。両側面は剥離面がそのまま残されており、加工痕・使用痕は上辺と下辺にみられる。上辺には、階段状剥離とたたきによるつぶれがみられ裏面には、

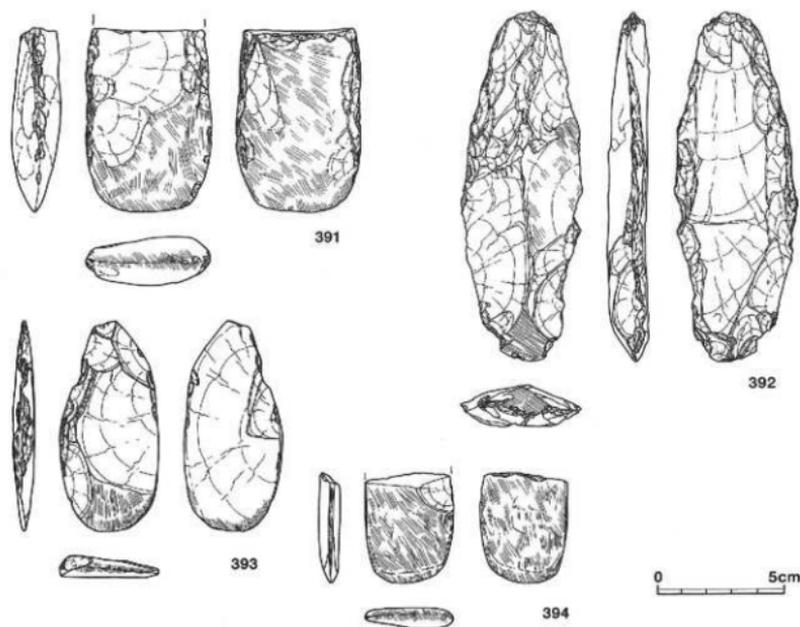
上辺から下辺に向かって延びる剥離痕もみられる。下辺には、不純物が集中しているが、階段状剥離が著しく発達しており、下辺全てにつぶれがみられる。

石錐 (第62図, 380~386)

7点出土した。緻密な石材を用いている傾向があると考えられるが、黒曜石製のものが2点ある。380は、玉髓を素材としている。上部、左側の上部が欠損しており、詳しい形成は不明である。両側辺の表裏からの調整剥離が交互になされ、側辺部から錐部へ急に移行する。錐部は、側辺からの微細剥離によって作られており、断面は不定形を呈する。381は、腰岳産黒曜石を素材としている。自然面の残る縦長剥片を用い、左側辺と右側辺の下部に調整剥離がみられるが、錐部に鋭さはみられない。錐部末端には両側辺からの細かな調整剥離が施されており、断面は方形を呈す。382は玉髓を用いている。菱形を呈し、頭部から錐部にかけて、側辺からの調整剥離が施されている。側辺の中程から緩やかに錐部へ移行し、表裏面からの調整剥離によって形成されている。断面は三角形を呈す。また、わずかではあるが、錐部に摩耗がみられる。383は、玉髓の縦長剥片を用いている。角の鈍い逆三角形を呈しており、やや弯曲している。両側縁に調整がみられるのだが、左側辺は切断面から調整されている。胴部に厚みがあり、そのまま錐部へ移行しているため、断面は鋭さのみられない五角形を呈している。384は、節理面を多く含み、逆五角形を呈している。頭部から側辺部の中ごろまでは大まかな調整がなされているが、側辺の下部に向かうにつれて、丁寧な調整が施されている。錐部は、左右側面と表裏面の4点から調整剥離が施されており、断面は円に近い五角形を呈している。385は玉髓を素材としている。小柄でやや内湾した形となっている。左側辺は、直線状であるのだが、左側辺の中央部に大きく剥離が入り、左右非対称となっている。側辺部から



第63図 石核・残核



第64図 磨製石斧・局部磨製石斧

錐部へかけて、調整がほどこされており、特に錐部には裏面からの調整が行われている。断面は不定形となっている。386は、自然面の多く残る桑ノ木津留産黒曜石を用いている。頭部から側面、錐部には大まかな調整が施されているが、錐部を形成するための細かな調整が施されていないため、未完成品の可能性がある。

#### 石核・残核（第63図、387～390）

小型剥片石器製作を目的とした素材剥片の獲得に利用されたと考えられる石核が4点出土し、内1点は残核である。いずれも三船産黒曜石を素材としている。

387・389は、やや変則的な形状に分割された素材を用いたものと考えられる。上面に横からの剥離を行い、ほぼ水平になった所を打点としている。打点に規則性がなく、上面の側面を移動している。388は、非常に幅のせまい上面をプラットホームとしている。そこから、不規則に剥離がなされ、剥離面の末端が階段状を呈している所もある。290は、残核である。素材に多くの不純物が目立ち、剥片の獲得には向かなかつたものであると考えられる。横からの剥離により獲られたプラットホームには、左面に剥離痕が多く目立つ。

### 石斧 (第64・65図, 391~396)

石斧は磨製石斧・局部磨製石斧・打製石斧があり、全て頁岩製である。磨製石斧3点、局部的磨製石斧1点、打製石斧2点の計6点出土した。

391・393・394は、磨製石斧である。3点とも基部が欠損しているが、全面に研磨がみられる。刃部は丸みをおびており、側面には形成のための調整がなされ、階段状の剥離がみられる。392は局部磨製石斧である。大まかな調整剥離の後、刃部を研磨により作りだしている。刃部は、欠損部分が多くわずかに残る程度である。395・396は打製石斧である。2点とも頁岩製であり、基部が欠損している。395は有肩の打製石斧である。側面と肩部には階段状の剥離がみられ、刃部には使用による摩耗がみられる。396も、有肩の打製石斧であるが、刃部と基部の差が不明瞭である。

### 凹石・敲石・磨石 (第66図, 397~402)

凹石・敲石・磨石は、同一個体に研磨・敲打・凹みといった加工痕があり、重複して有する場合がみられる。本報告書では、顕著に現れている使用痕により遺物を判断した。大きさは不均一で凝灰岩・花崗岩が素材とされている。

397は角礫を含む凝灰岩を用いた凹石である。表面の中心に5mmほどの深さを呈する。研磨・敲打はみられず、裏面に自然面を有する。398・399はいずれも花崗岩を用いている。398はほぼ全ての側面に敲打痕がみられ表裏面にごくわずかな擦痕がみられる。上部が欠損しており、また下部には敲打痕付近に剥離がみられる。使用によるものかは不明である。399は側面全てに敲打痕がみられ、表裏面には擦痕と敲打が共存している。左側面上部が欠損している。400~402は、いずれも花崗岩を用いた磨石である。大きさ・形状は不定である。400は正面が平滑化しているほどの研磨が施されている。側面にごくわずかの敲打がみられる。右側面が大きく欠損している。401は、平面形が円形で側面及び断面が楕円形を呈している。大型であるが、擦痕が弱い。402は扁平な円礫を用いたものである。上部と下部が欠損しており、擦痕が弱い。

### 石皿 (第67図, 403・404)

2点出土している。いずれも花崗岩を用い、欠損品である。

403は、平たい花崗岩を用い、2分の1程度が欠損しているものである。表面に強い擦痕がみられ、中心に向けて急にくぼんで行っている。404は、目の荒い花崗岩を用いている。大きく欠損しているが、正面と右側面に浅い擦痕がみられる。

### 砸石 (第68図, 405~407)

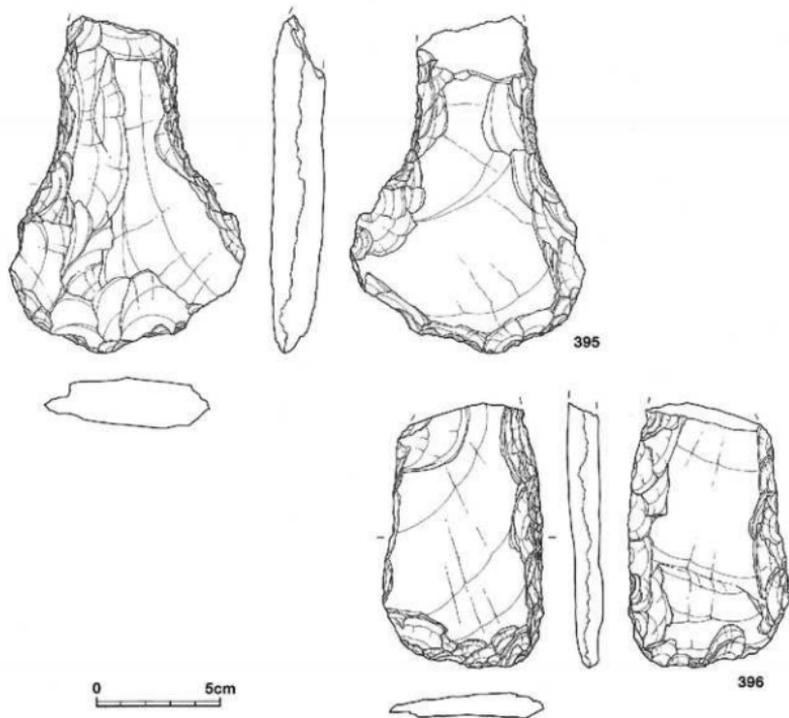
3点出土している。花崗岩製のものが2点、砂岩製のものが1点である。

405は、凹面の一面に研磨面がみられる。非常に浅くくぼんでおり、研磨に方向性がみられる。

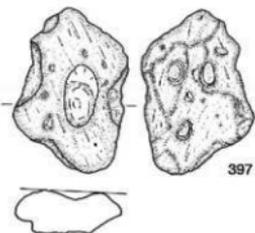
406は、砂岩を用いている。表裏面ともに研磨により強くくぼんでおり、右側面にも研磨がみられる。縦長で砥砥を思わせる形を呈している。407は、目の荒い花崗岩を用いている。研磨面を3面有し、正面と右側面には、浅く溝状に研磨がほどこされている。下部が欠損している。

### 軽石製品 (第69図, 408~412)

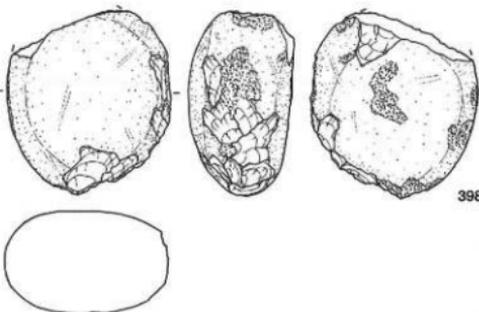
5点出土している。ほぼ楕円形を呈するものが4点、不定形のもものが1点である。いずれも一定方向への擦痕がみられるが、穿孔や加工、彫刻などはみられない。



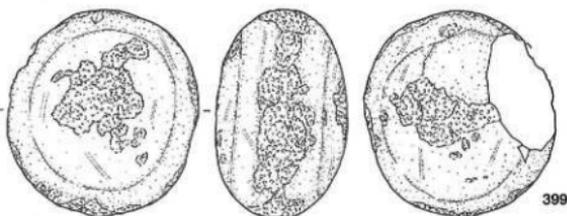
第65圖 打製石斧



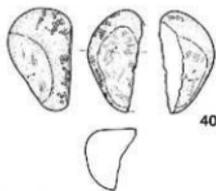
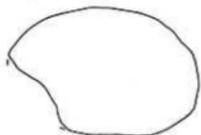
397



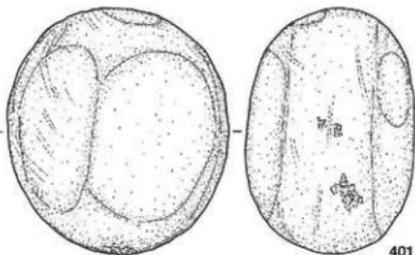
398



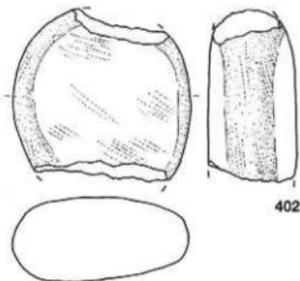
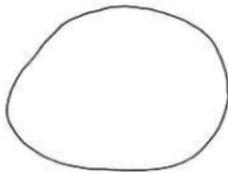
399



400



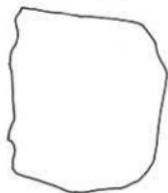
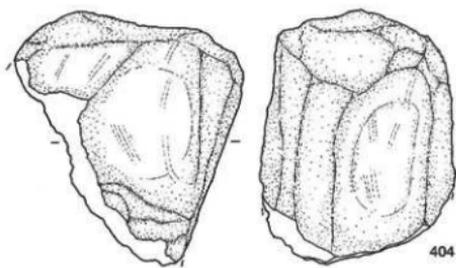
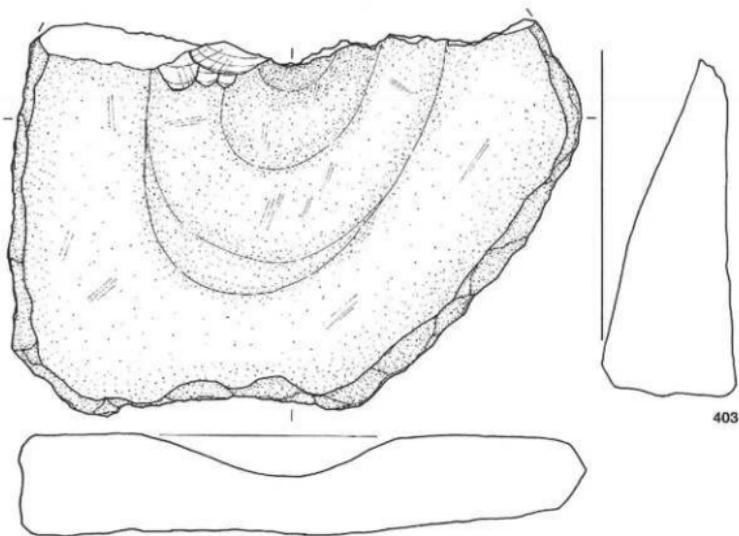
401



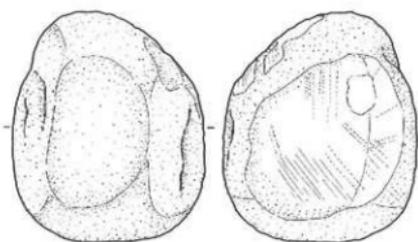
402

0 10cm

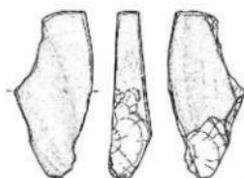
第66圖 凹石・敲石・磨石



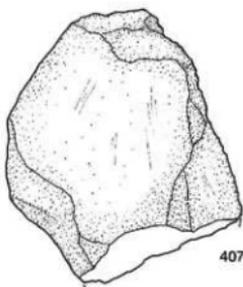
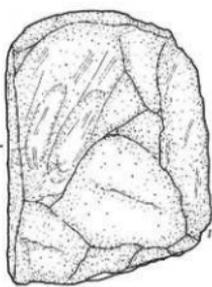
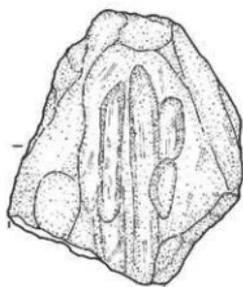
第67圖 石皿



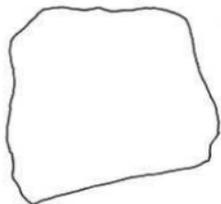
405



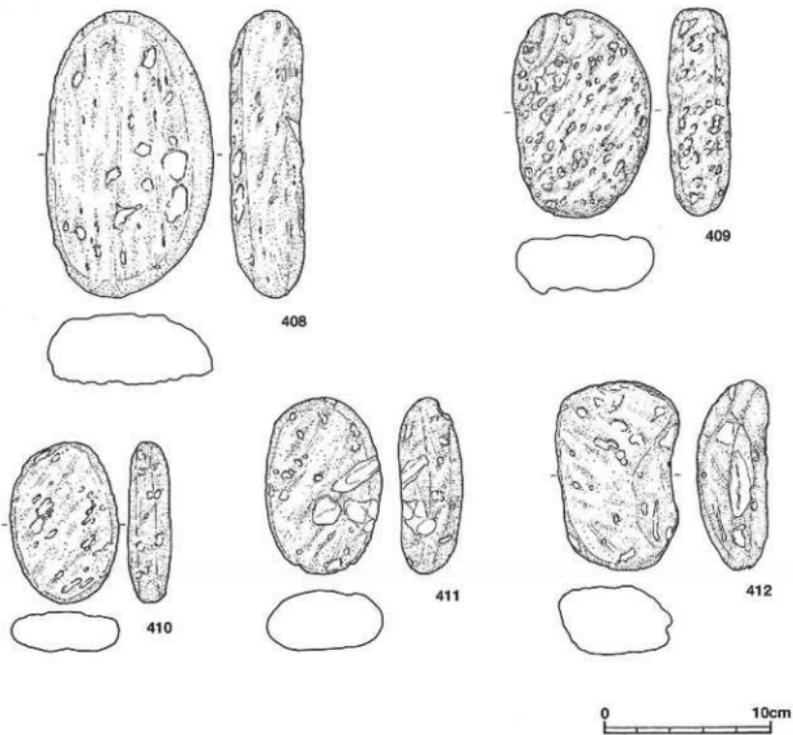
406



407



第68圖 砥石



第69図 軽石製品

第11表 鷲ヶ追跡縄文石器観察表(1)

検出 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
55	257	4031	磨製石鏃	頁岩	C50	IVa	1.8	1.6	0.2	0.6	
	258	5605	磨製石鏃	頁岩	D36	IVa	1.7	1.5	0.2	0.6	
	259	2808	打製石鏃	黒曜石三船	D7	IVa	1.6	1.2	0.8	1.3	
	260	12597	打製石鏃	玉髄	C7	IVa	1.5	0.9	0.6	0.8	
	261	10360	打製石鏃	玉髄	C6	IVa	1.6	1.0	0.5	0.6	
	262	15290	打製石鏃	黒曜石腰弁	D2	IVa	4.0	1.5	0.5	3.5	
	263	1725	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	---	IVa	2.3	1.1	0.4	0.6	
	264	3111	打製石鏃	黒曜石針尾	D6	IVa	1.6	1.0	0.3	0.3	
	265	3062	打製石鏃	黒曜石三船	D7	IVa	1.6	1.0	0.6	0.5	
	266	1166	打製石鏃	黒曜石三船	D6	IVa	1.6	1.0	0.4	0.3	
	267	11765	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	C7	IVa	1.8	1.2	0.4	0.6	
	268	8990	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	C7	IVa	1.5	1.0	0.4	0.5	
	269	5668	打製石鏃	瑪瑙	D7	IVa	1.3	1.0	0.3	0.2	
	270	10135	打製石鏃	瑪瑙	C6	IVa	1.3	1.1	0.3	0.2	
	271	9260	打製石鏃	瑪瑙	C5	IVa	1.7	0.9	0.4	0.3	
	272	7950	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	C1	IVa	1.4	1.2	0.2	0.3	
	273	10304	打製石鏃	黒曜石針尾	C6	IVa	1.1	1.2	0.4	0.3	
	274	12076	打製石鏃	瑪瑙	C6	IVa	1.5	1.1	0.4	0.6	
	275	1112	打製石鏃	玉髄	D3	IVa	1.3	1.2	0.4	0.5	
	276	912	打製石鏃	安山岩	D3	IVa	2.5	1.8	0.3	1.1	
	277	13003	打製石鏃	黒曜石椎葉川	C7	IVa	1.4	1.1	0.4	0.7	
	278	7139	打製石鏃	黒曜石三船	C1	IVa	1.5	1.5	0.3	0.5	
	279	7539	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	C6	IVa	1.6	0.9	0.2	0.2	
	280	338	打製石鏃	黒曜石三船	D4	IVa	2.0	1.2	0.5	0.7	
	281	10313	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	C6	IVa	1.7	1.1	0.3	0.4	
	282	112	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	C6	IVa	1.6	1.0	0.3	0.3	
	283	2398	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D4	IVa	1.7	1.0	0.5	0.5	
	284	3960	打製石鏃	黒曜石三船	D7	IVa	2.6	1.3	0.4	0.6	
	285	6087	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D7	IVa	1.3	0.9	0.3	0.2	
	286	299	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	D4	IVa	1.0	0.9	0.3	0.2	
	287	8266	打製石鏃	ハリ質安山岩	C2	IVa	2.0	1.8	0.4	0.8	
	288	5750	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D7	IVa	1.9	1.3	0.5	1.3	
	289	10216	打製石鏃	玉髄	C6	IV	1.3	1.0	0.2	0.2	
	290	15228	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	D1	IV	1.0	1.3	0.3	0.2	
	291	8576	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	C6	IV	1.0	1.1	0.3	0.2	
292	5198	打製石鏃	黒曜石三船	D7	IV	1.4	1.1	0.4	0.4		
293	4966	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	D7	IV	1.1	0.8	0.4	0.2		
294	4423	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D7	IV	1.3	1.0	0.3	0.3		
295	6328	打製石鏃	安山岩	D5	IV	1.4	1.0	0.5	0.4		
296	12941	打製石鏃	安山岩	C7	IV	1.8	1.1	0.2	0.5		
297	14319	打製石鏃	黒曜石三船	D1	IV	1.5	1.2	0.2	0.2		
298	1402	打製石鏃	黒曜石針尾	D5	IV	1.3	1.0	0.4	0.3		
299	4243	打製石鏃	鉄石英	C50	IV	1.9	1.5	0.3	0.6		
300	6976	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	C2	IV	2.2	1.8	0.5	1.4		
301	12087	打製石鏃	黒曜石三船	C6	IV	1.9	1.5	0.6	1.8		
302	8647	打製石鏃	黒曜石椎葉川	C6	IV	1.4	1.1	0.2	0.4		

第12表 鷺ヶ泊遺跡縄文石器観察表(2)

検出 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
56	303	15831	打製石鏃	黒曜石委ノ木津留	D2	IV	1.3	1.2	0.4	0.4	
	304	15812	打製石鏃	黒曜石針尾	D2	IV	1.7	1.4	0.5	0.7	
	305	15175	打製石鏃	黒曜石三船	D1	IV	1.2	1.1	0.2	0.2	
	306	15255	打製石鏃	黒曜石椎葉川	D1	IV	0.9	1.1	0.2	0.2	
	307	5953	打製石鏃	玉髄	D7	IV	1.8	1.7	0.7	1.8	
	308	2971	打製石鏃	瑪瑙	D7	IV	1.8	1.2	0.3	0.7	
	309	479	打製石鏃	瑪瑙	D6	IV	1.3	1.3	0.4	0.5	
	310	2016	打製石鏃	玉髄	D7	IV	2.4	2.3	0.7	3.4	
	311	8064	打製石鏃	黒曜石腰岳	C1	IV	2.1	1.5	0.4	1.2	
	312	12098	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	25レンテ	IV	1.8	1.6	0.3	0.7	
	313	470	打製石鏃	安山岩	D6	IV	1.7	1.4	0.3	0.5	
	314	3940	打製石鏃	安山岩	C45	IV	2.5	1.7	0.4	1.2	
	315	7144	打製石鏃	黒曜石椎葉川	C1	IV	1.9	1.6	0.2	0.5	
	316	11294	打製石鏃	黒曜石三船	C6	IV	1.7	1.4	0.4	0.7	
	317	12189	打製石鏃	黒曜石三船	C6	IV	2.2	1.4	0.5	1.6	
	318	3268	打製石鏃	安山岩	C51	IV	3.5	1.2	0.5	1.9	
	319	1074	打製石鏃	チャート	D3	IIIb	1.7	1.0	0.4	0.6	
	320	10070	打製石鏃	安山岩	B31	IIIb	1.1	1.5	0.4	1.1	
321	3640	打製石鏃	安山岩	C46	IIIb	2.5	1.4	0.3	0.6		
322	1073	打製石鏃	安山岩	D3	IIIb	1.5	1.2	0.3	0.5		
323	3769	打製石鏃	黒曜石腰岳	D7	IIIb	1.9	1.1	0.4	0.6		
324	4874	打製石鏃	黒曜石腰三船	D37	IIIb	1.1	0.9	0.3	0.2		
325	3154	打製石鏃	黒色頁岩	C2	IIIb	1.9	1.1	0.5	0.7		
326	3647	打製石鏃	黒曜石三船	C1	IIIb	1.3	1.0	0.3	0.2		
327	3770	打製石鏃	玉髄	D7	IIIb	1.7	1.5	0.7	1.8		
328	8854	打製石鏃	黒曜石委ノ木津留	D30	IIIb	2.1	1.4	0.4	0.7		
329	3730	打製石鏃	黒曜石針尾	D7	IIIb	1.8	1.2	0.5	0.8		
330	6895	打製石鏃	安山岩	D29	IIIb	1.9	1.3	0.3	0.5		
331	9243	打製石鏃	黒曜石三船	D31	IIIb	1.3	1.6	0.3	0.6		
332	—	打製石鏃	安山岩	—	IIIb	2.7	1.6	0.4	1.5		
333	1443	磨製石鏃	頁岩	C2	IIIb	2.5	2.8	0.4	2.9		
334	—	石槍	黒色安山岩	55レンテ	—	4.8	2.1	0.8	120	表採	
335	3777	石匙	玉髄	C3	IV	2.8	4.3	0.9	7.5		
336	6171	石匙	玉髄	C3	IV	3.6	4.2	1.1	11.3		
337	10976	石匙	チャート	C2	IV	2.5	3.6	0.6	3.9		
338	2070	石匙	玉髄	D7	IV	4.7	2.0	1.1	7.0		
339	10869	石匙	黒色安山岩	C2	IV	4.3	3.2	0.7	10.7		
340	15907	石匙	黒色安山岩	D2	IV	4.0	3.6	0.5	5.5		
341	2216	スクレイパー	黒曜石椎葉川	D5	IVa	1.3	1.8	0.7	1.1		
342	5365	スクレイパー	玉髄	D7	IVa	1.8	1.4	0.6	1.9		
343	4096	スクレイパー	玉髄	C6	IVa	2.3	1.8	0.4	1.8		
344	15072	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	C7	IV	1.6	1.4	0.5	0.9		
345	9448	スクレイパー	黒曜石三船	C5	IV	1.4	1.7	0.7	1.3		
346	10618	スクレイパー	黒曜石三船	C7	IV	2.1	2.5	0.7	4.1		
347	13539	スクレイパー	黒曜石三船	B6	IV	3.2	3.2	1.4	12.3		
348	13307	スクレイパー	黒曜石三船	C6	IV	1.7	1.7	0.6	1.5		

第13表 鷺ヶ迫遺跡縄文石器観察表(3)

採回 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区 層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
59	349	4011	スクレイパー	黒曜石三船	C6	IV	2.2	2.8	0.9	4.8
	350	9899	スクレイパー	チャート	C2	IV	3.3	3.3	0.6	5.6
	351	3614	スクレイパー	玉髓	C2	IV	4.0	4.0	1.3	13.9
	352	4739	スクレイパー	玉髓	C5	IV	1.4	2.7	0.6	1.8
	353	7230	スクレイパー	安山岩	C5	IV	4.7	2.7	0.6	6.7
354	13781	スクレイパー	黒色頁岩	C6	IV	12.6	7.0	1.1	96.0	
60	355	3144	スクレイパー	黒曜石三船	C2	Ⅲb	2.7	2.2	1.0	4.8
	356	3606	スクレイパー	黒曜石三船	D5	Ⅲb	2.0	2.9	0.7	3.5
	357	3421	スクレイパー	黒曜石三船	C3	Ⅲb	2.6	2.1	0.8	4.2
	358	3699	スクレイパー	黒曜石三船	D5	Ⅲb	2.1	2.1	0.9	3.8
	359	3607	スクレイパー	頁岩	D5	Ⅲb	2.4	3.9	0.6	4.9
360	8375	スクレイパー	ハリ賀安山岩	E29	Ⅲb	1.6	2.6	0.5	3.1	
61	361	2031	二次加工剥片	玉髓	D7	IVb	2.5	1.4	1.7	2.6
	362	1745	二次加工剥片	玉髓	D4	IVa	3.0	1.5	0.8	3.2
	363	1018	二次加工剥片	玉髓	D3	IVa	2.3	1.2	0.6	1.2
	364	12541	二次加工剥片	黒曜石腰岳	C7	IV	2.0	1.7	0.6	1.8
	365	8958	二次加工剥片	黒曜石三船	C7	IV	1.5	1.3	0.5	0.9
	366	9849	二次加工剥片	黒曜石椎栗川	C2	IV	2.2	2.1	0.5	1.6
	367	12636	二次加工剥片	玉髓	C5	IV	2.4	3.6	0.6	7.7
	368	4222	二次加工剥片	黒曜石三船	D7	Ⅲb	2.1	1.7	0.8	2.9
	369	4803	微細剥離痕剥片	黒曜石三船	C6	IV	4.0	2.6	1.3	9.0
	370	3609	微細剥離痕剥片	黒曜石桑ノ木津留	C2	IV	3.0	1.2	0.5	1.8
371	10395	微細剥離痕剥片	黒曜石三船	C6	IV	2.6	1.7	0.6	1.7	
372	14102	微細剥離痕剥片	黒曜石三船	C7	IV	2.5	2.0	1.4	4.8	
62	373	2677	楔形石器	黒曜石桑ノ木津留	29レンヂ	IVb	2.4	2.0	0.5	1.9
	374	2389	楔形石器	黒曜石三船	D4	IVa	2.0	1.4	0.7	2.2
	375	9507	楔形石器	黒曜石桑ノ木津留	C6	IV	2.0	1.5	0.7	2.2
	376	8695	楔形石器	黒曜石桑ノ木津留	C6	IV	1.5	1.1	0.5	0.8
	377	13221	楔形石器	黒曜石三船	C6	IV	2.5	2.1	1.0	3.9
	378	8204	楔形石器	黒曜石三船	D5	Ⅲb	3.3	2.4	1.2	9.2
	379	6066	楔形石器	黒曜石三船	C36	Ⅲb	2.3	1.4	1.2	4.0
	380	5039	石鏃	玉髓	D7	IVa	2.5	2.2	0.9	4.9
	381	9626	石鏃	黒曜石腰岳	B6	IV	2.7	0.9	0.9	1.4
	382	15361	石鏃	玉髓	C7	IV	2.0	0.9	0.7	1.2
383	13814	石鏃	玉髓	C3	IV	2.5	1.3	0.7	2.7	
384	13913	石鏃	玉髓	C7	IV	2.7	1.6	0.8	3.0	
385	12574	石鏃	玉髓	D5	Ⅲb	1.3	0.8	0.2	0.3	
386	3373	石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D7	Ⅲb	2.3	1.7	1.0	3.0	
63	387	5716	石核	黒曜石三船	D38	Ⅲb	3.7	2.7	2.4	23.6
	388	2307	石核	黒曜石三船	D5	IVa	2.8	3.3	1.4	11.6
	389	5776	石核	黒曜石三船	D7	IVa	1.6	1.7	1.5	5.1
	390	3789	残核	黒曜石三船	D7	Ⅲb	2.1	2.3	2.7	13.3
	391	7505	磨製石斧	頁岩	B5	IV	7.4	4.8	1.9	104.9
64	392	14551	局部磨製石斧	頁岩	C6	IV	14.5	5.0	1.6	116.4
	393	14841	磨製石斧	頁岩	B6	IV	4.5	3.5	0.9	20.4
	394	7915	磨製石斧	頁岩	C1	IV	8.5	3.9	0.9	32.4

第14表 鷺ヶ迫遺跡縄文石器観察表(4)

採回 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
65	395	2494	打製石斧	頁岩	C18	IVa	13.8	9.6	2.0	283.3	
	396	4561	打製石斧	頁岩	D37	IIIb	10.8	6.7	1.3	120.0	
	397	1238	門石	凝灰岩	B14	IV	10.5	7.2	2.2	145.3	
66	398	1500	蔽石	花崗岩	D19	IVa	11.2	9.9	6.3	940.0	
	399	1892	蔽石	花崗岩	B19	IV	12.4	11.3	7.8	148.0	
	400	11019	磨石	花崗岩	C6	IV	6.2	3.9	2.5	78.3	
	401	13464	磨石	花崗岩	B6	IV	15.2	13.2	10.2	266.0	
67	402	621	磨石	花崗岩	D7	IVa	10.2	10.8	5.2	845.0	
	403	6913	石皿	花崗岩	C2	IV	24.2	35.0	8.1	920.0	
	404	2346	石皿	花崗岩	—	IVa	15.4	13.3	11.6	254.0	
68	405	6777	砥石	花崗岩	E33	IVa	13.9	12.6	11.3	266.0	
	406	4418	砥石	砂岩	C7	IV	10.2	4.6	2.3	93.2	
	407	14399	砥石	花崗岩	C7	IV	16.2	14.0	12.5	336.0	
69	408	4605	軽石製品	—	B12	IVb	17.7	10.0	4.1	188.1	
	409	1984	軽石製品	—	C20	IVa	12.6	8.4	3.7	154.8	
	410	1595	軽石製品	—	C23	IVa	9.9	6.4	2.5	48.7	
	411	3333	軽石製品	—	C20	IVa	10.9	7.0	3.7	83.6	
	412	5912	軽石製品	—	D18	IVa	11.7	7.3	4.1	145.2	

#### 第4節 古墳時代の調査

古墳時代の遺構・遺物はⅢa層で検出された。遺構はD-4・5区、C・D-27区、C-50・51区で竪穴住居跡が6軒検出され、その他、土坑14基、古道4条、溝状遺構15条が検出された。

遺物は成川式土器（甍形土器・壺形土器・高坏・埴形土器）、手捏土器と石器（凹石・敲石・磨石・石皿・台石・軽石製品）が出土した。

##### ① 1号住居跡

1号住居跡は、D-4・5区、Ⅲa層で検出された。昭和時代の厩場整備により西側半分が削平されていた。外径の長さ3.8m、内径は3.5mを測る方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約30cmを測る。主軸方向はN-10°-Eである。内部に柱穴・硬化面が検出したが、主柱穴は不明だった。

出土遺物は甍形土器・壺形土器・高坏・埴形土器・手捏土器が出土した。

##### 2号～4号住居跡

D-5区、Ⅲa層で検出された住居群で、3軒の住居跡が切り合っていることから検出順に2～4号住居跡と名称した。いずれも方形プランを基準にした間仕切りされた施設（ベッド状施設）があることから花卉状住居と想定される。

##### ② 2号住居跡

2号住居跡は、D-5区、Ⅲa層で検出された重複している竪穴住居跡である。柱穴が1個検出され、その周辺に硬化面がみられたが内部施設は不明である。また、4号住居跡との切り合い関係も判明しなかった。西側側壁が間仕切りされていることから、これも花卉状住居と想定される。

出土遺物は、甍形土器、壺形土器が出土したが細片であった。

##### ③ 3号住居跡

3号住居跡は、D-5区、Ⅲa層で検出された重複している竪穴住居跡である。長軸4.5m、短軸4.3mの方形の竪穴住居跡で、長軸方向の南側ライン上に90cm×75cmの間仕切り部をもつものである。遺構検出面からの深さは25～30cmを測る。主軸方向はN-57°-Eである。内部には約30cmの深さを測る柱穴が5個検出され、中央部には硬化面がみられる。

この住居跡から出土した炭化物の年代測定を行ったところ、別項の科学分析でも記載しているが、C<sup>14</sup>年代はそれぞれ1740±50yrBP、1720±30yrBP、1690±30yrBP、1660±30yrBPであり、古墳時代中期に該当する。

出土遺物は、土器が甍形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏・埴形土器・手捏土器、石器は敲石が出土した。

##### ④ 4号住居跡

4号住居跡は、D-5区、Ⅲa層で検出された重複している竪穴住居跡である。柱穴が1個検出

されたが、内部施設は不明である。また、2号住居跡との切り合い関係は判明しなかった。遺構の大半が調査区域外に想定されるため、プランは不明である。

#### ⑤ 5号住居跡

5号住居跡は、C・D-27区、Ⅲa層で検出されたものである。西側が後世の削平により残されていない。長軸は4.3mを測る方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約60cmを測る。主軸方向はN-15°-Eである。西側壁面近くに焼土が検出され、中央部には炭化物が出土した。柱穴等の内部施設はみられなかった。この住居跡から出土した炭化物の年代測定を行ったところ、別項の科学分析でも記載しているが、C<sup>14</sup>年代は1530±30yrBPである。

出土遺物は、西側壁面近くに一拵して出土した。出土遺物は、甕形土器・壺形土器・高坏・椀形土器である。

#### ⑥ 6号住居跡

6号住居跡は、C-50・51区、Ⅲa層で検出された。外径3.0m×3.0m、内径2.8m×2.8mを測る方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは5cmを測り、掘り込み等は削平されていた。主軸方向はN-12°-Eである。柱穴等の内部施設はみられなかったが、部分的に硬化面が検出された。

出土遺物は、甕形土器・壺形土器が出土した。

#### 土坑（第89・90図）

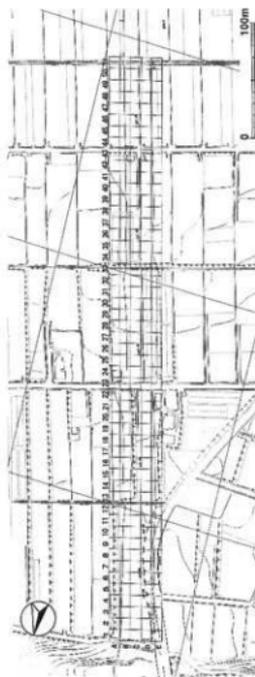
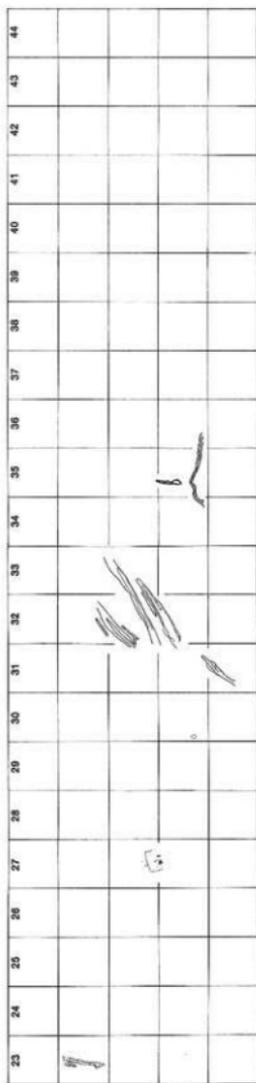
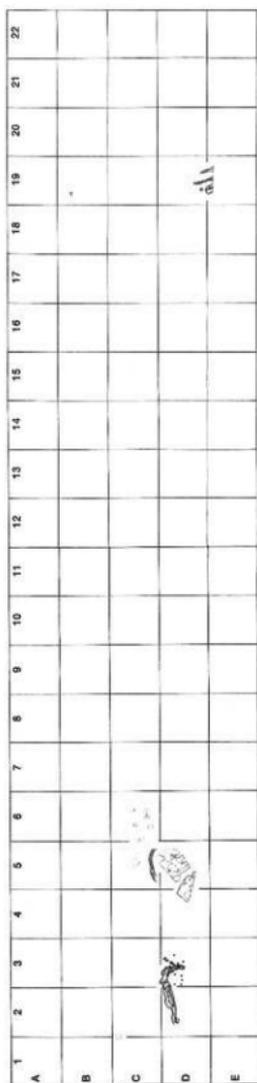
土坑は遺跡全体で散発的に調査区域内で14基が検出した。ほぼ同タイプの土坑で直径0.6~1.5m前後の楕円形プラン・方形プランで、遺構検出面からの深さは約20~120cmを測る。性格等は不明である。

#### 古道（第86図）

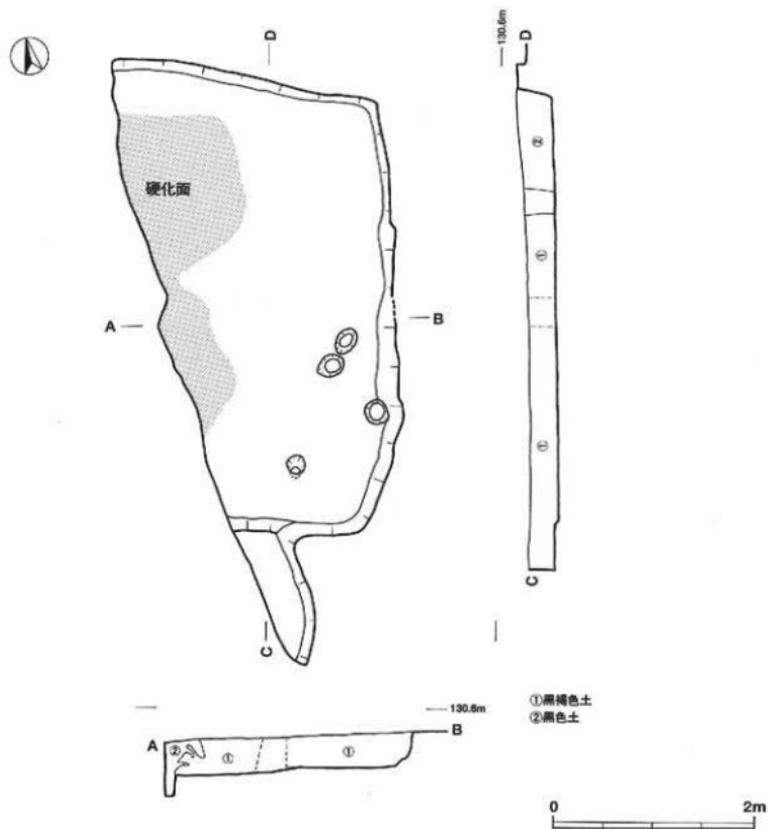
B~E-31~33区、Ⅲa層上面で硬化面のある道跡を4条検出した。検出された幅は50~70cmで、硬化面の硬さ・締まり具合の程度は部分により異なっている。古道の主軸方向はN-55°-Eで、4条ともほぼ同方向である。総延長は最大で約20mである。

#### 溝状遺構（第87・88図）

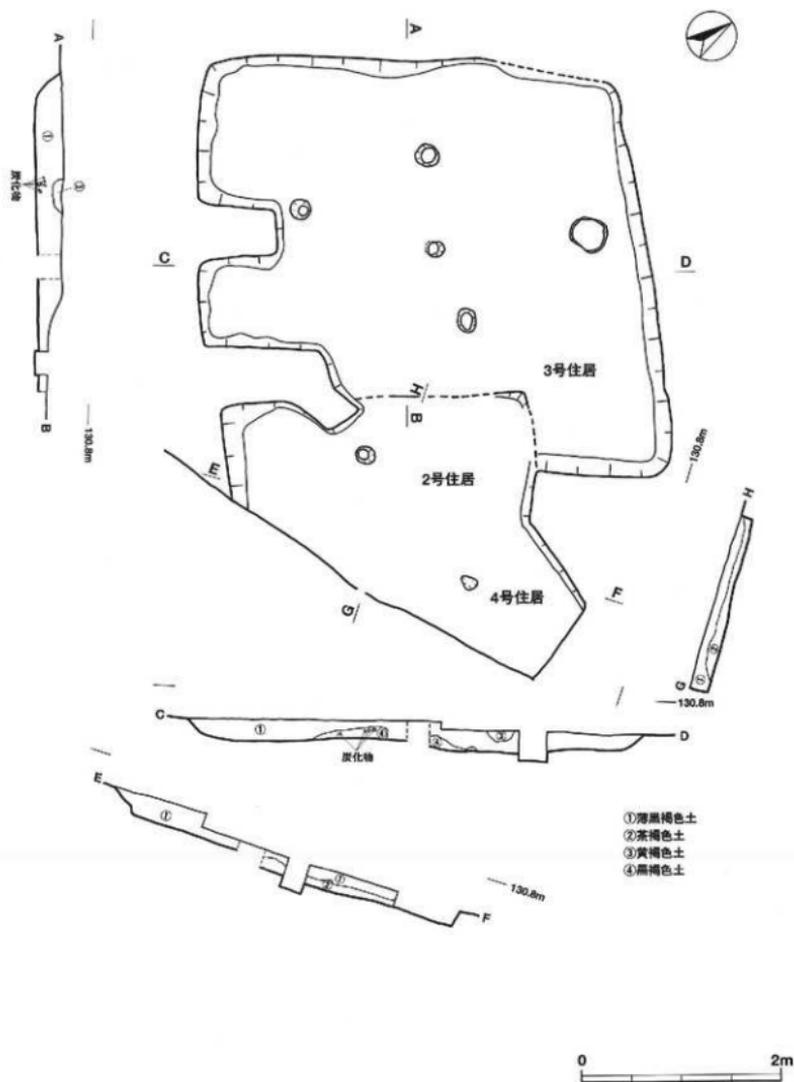
D-2・3区、C・D-5区、D・E-19区、B-23区、C・D-35区、B・C-45区、C・D-46・47区のⅢa層上面で溝状遺構15条が検出された。主軸方向は、南北方向と東西方向に向かっているものに分かれた。検出された溝状遺構の幅は40~50cmで、深さは30~60cmを測るものである。



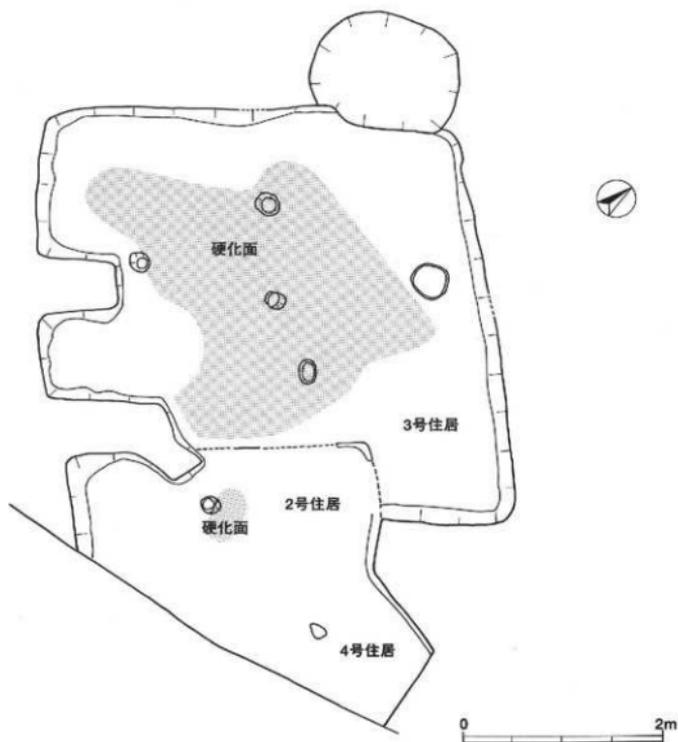
第70図 古墳時代遺構配置図



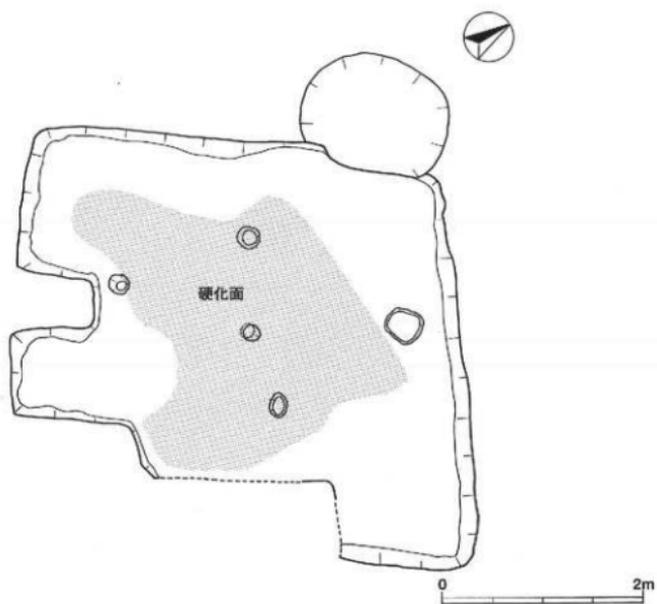
第71图 1号住居跡



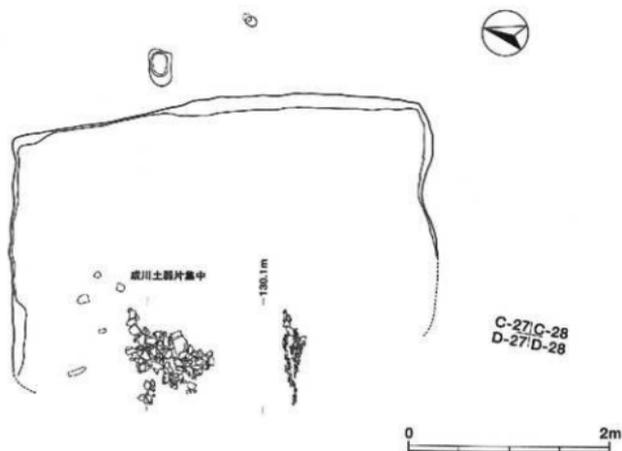
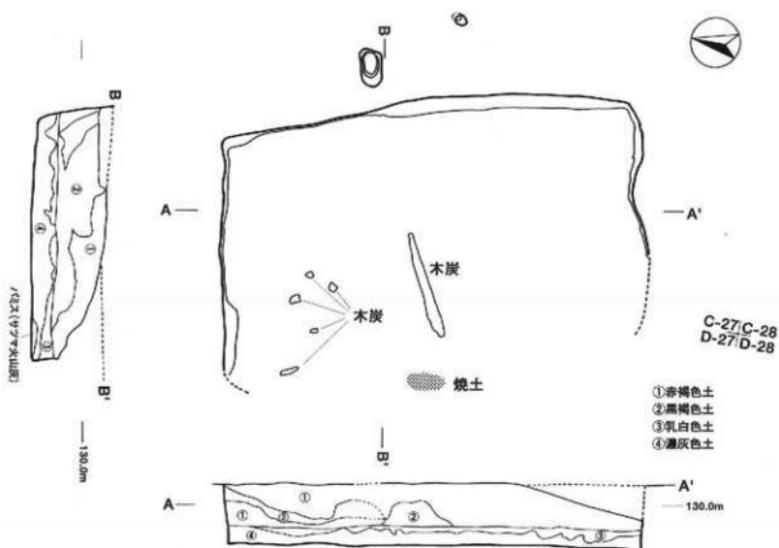
第72图 2~4号住居跡



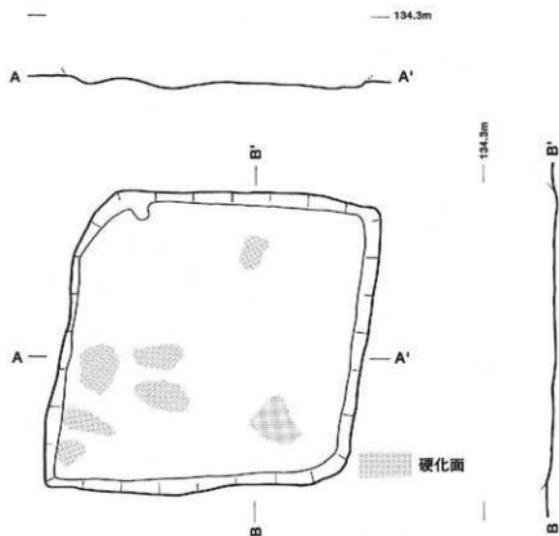
第73図 2～4号住居跡



第74図 3号住居跡



第75图 5号住居跡



第76図 6号住居跡



## 遺構出土の土器

### 1号住居跡

413・414は甕形土器の外反する口縁部で、内外面ともナデ調整を施している。415・416は甕形土器の底部で中空のあげ底底部である。417は高坏の口縁部で外開きになるものである。418は小型丸底の埴形土器である。内面はナデ調整し、外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。

### 2号住居跡

420は2号住居跡から出土した中空のあげ底底部である。

### 3号住居跡

421～469は3号住居跡から出土した土器である。

421～444は甕形土器である。

421～423は「く」の字状に外反する口縁で、胴部はそれほど膨らみになだらかに底部へつながるものである。復元口径は21.0cm, 26.0cm, 16.8cm, 器高は27.6cm, 24.0cm, 14.4cm, 脚台径は9.6cm, 10.2cm, 6.9cmを測る。器面調整はナデ整形である。424は「く」の字状に外反する口縁で、口径は21.6cmを測り、胴部はやや膨らむものである。ナデ整形で器面調整がなされている。426・429・433～437は口縁下部に絡縄突帯の貼り付けを廻らしたものである。426・429は刻目を付する。430は口径26.7cmを測る口縁部で、外開きに直口するものである。431はやや内向気味に直口する口縁で、口径は29.2cmを測る。432はやや内湾する口縁部で、ナデ整形で器面調整がなされている。434～437は外湾する口縁部をもつもので、口縁下部に絡縄突帯を施すものである。復元口径は36.0cm, 35.2cm, 33.2cm, 29.8cmを測る。438～444は甕形土器の底部で、何れも中空のあげ底底部である。

445～448は鉢形土器である。

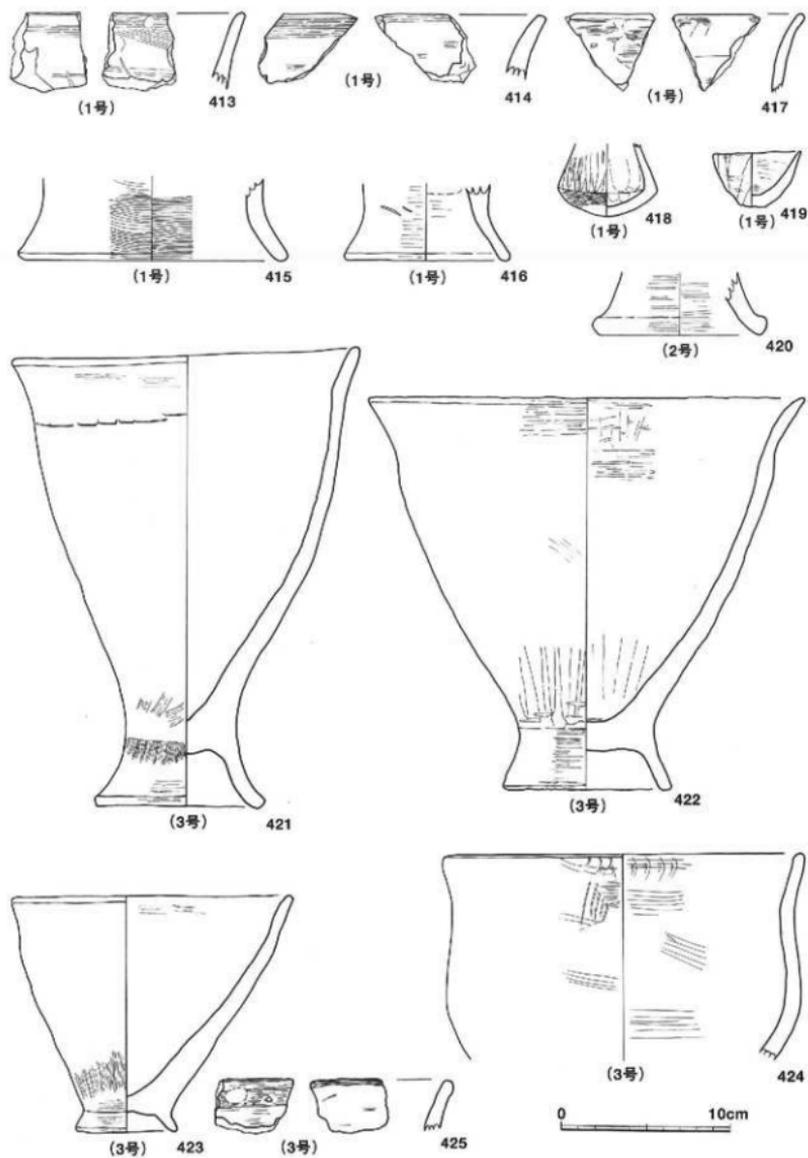
445は胴部の張った器形で立ち上がりは直交し、口縁部は緩やかに外反している。口径24.4cmを測る。446～448は鉢形土器の底部で低い脚台が付く。脚台径はそれぞれ9.0cm, 7.8cm, 8.4cmを測る。内外面ともナデ整形を施している。

449～454は壺形土器である。

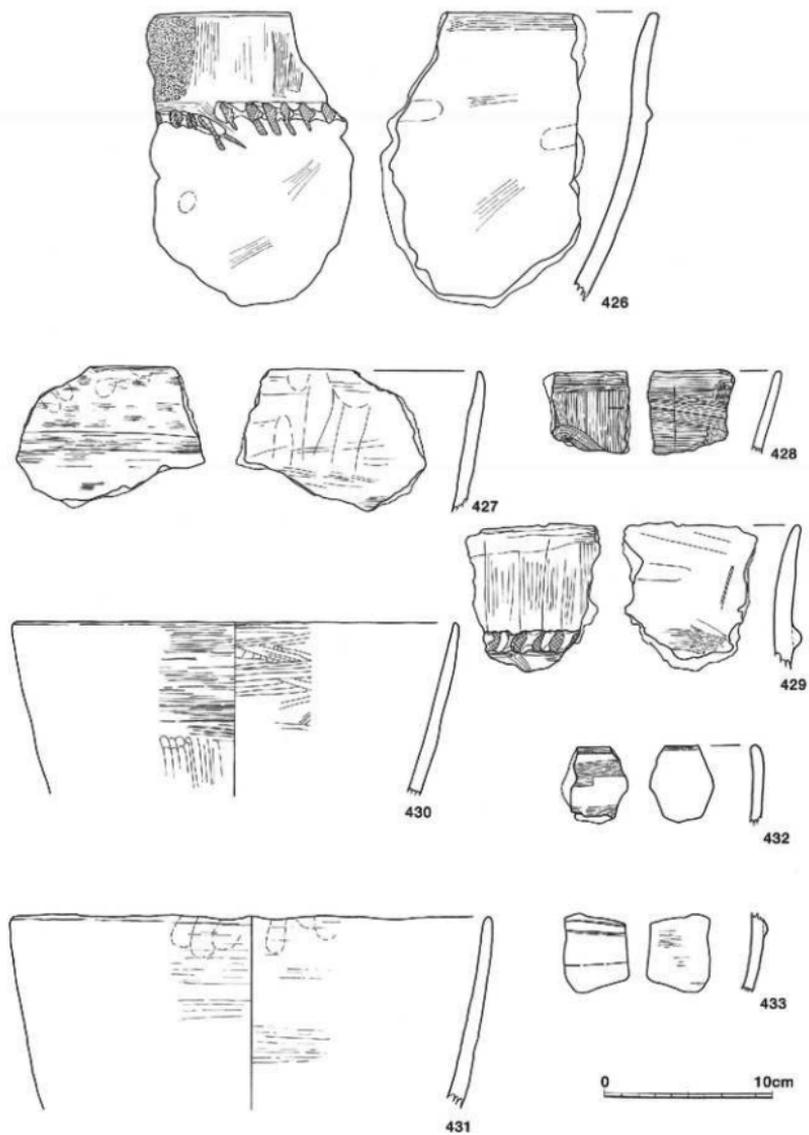
449は丸底の完形壺形土器である。口径は12.0cm, 器高15.8cm, 胴部径13.8cmを測る。内面はナデ整形、外面はハケ目調整を施している。450・451は口径が12.6cm, 10.5cmを測る、頸部が「く」の字状に折れ口縁部が外反するものである。452は丸底底部で、453は平坦面をもつ丸底である。454は緩やかな尖底をもつ壺形土器の底部である。

455～459は高坏である。455は完形品で、口径23.7cm, 器高24.0cm, 脚部形15.6cmを測る。口縁部が体部から大きく外折反転し、外開きになるものである。脚部は、底部から筒部をもたず、すぐ裾部になる形状を呈している。456は、坏部は455と類似している。口径は19.2cmを測り、脚部は筒部が短く、裾部が緩やかに外反するものである。457も同類であるが、外面に屈曲部がみられる。

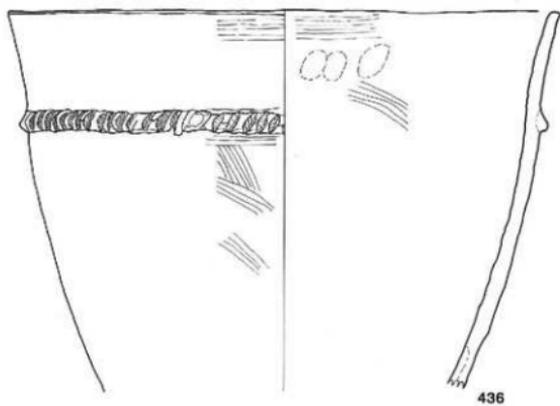
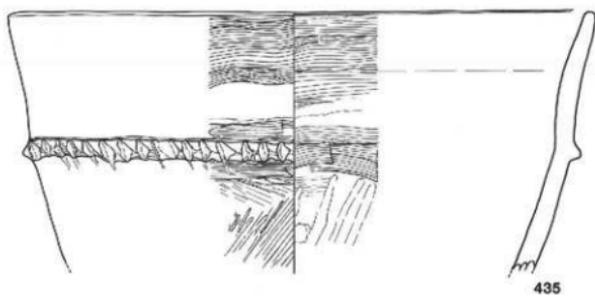
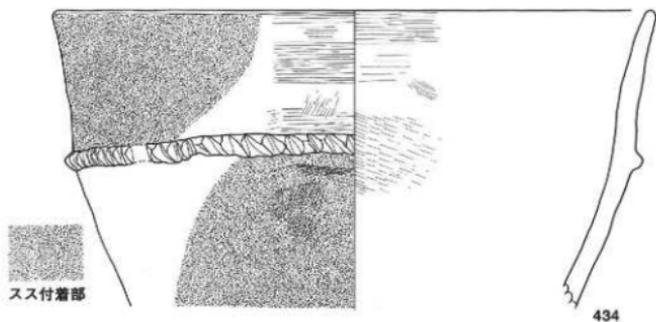
458・459は底部から筒部をもたず、すぐ裾部になる形状で裾部が屈曲するものである。



第77图 1·2·3号住居跡出土遺物

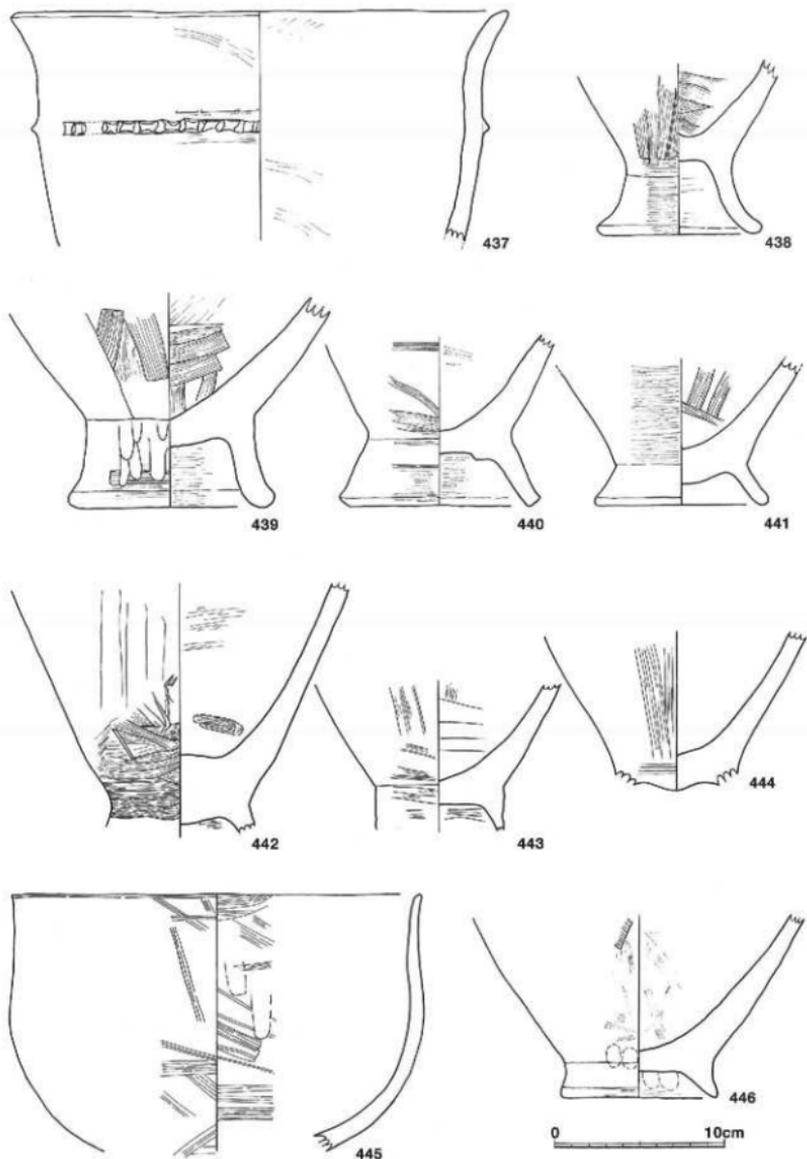


第78图 3号住居跡出土遺物(2)

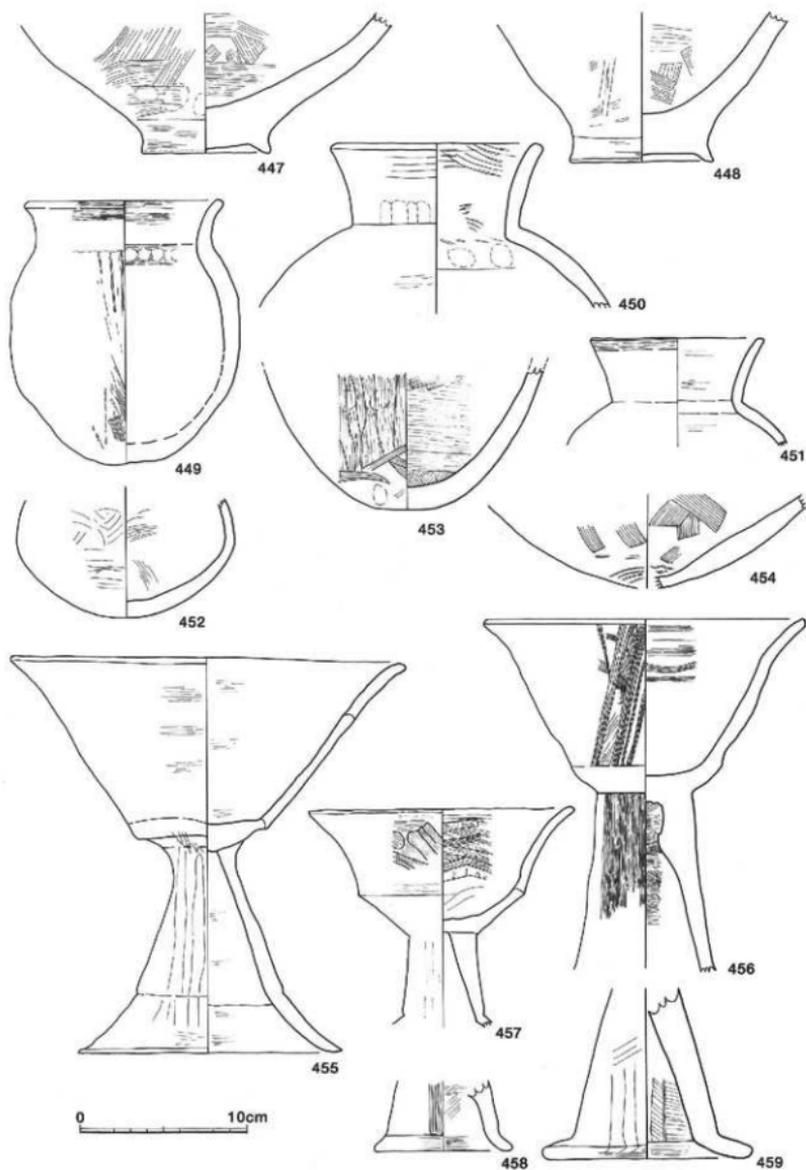


0 10cm

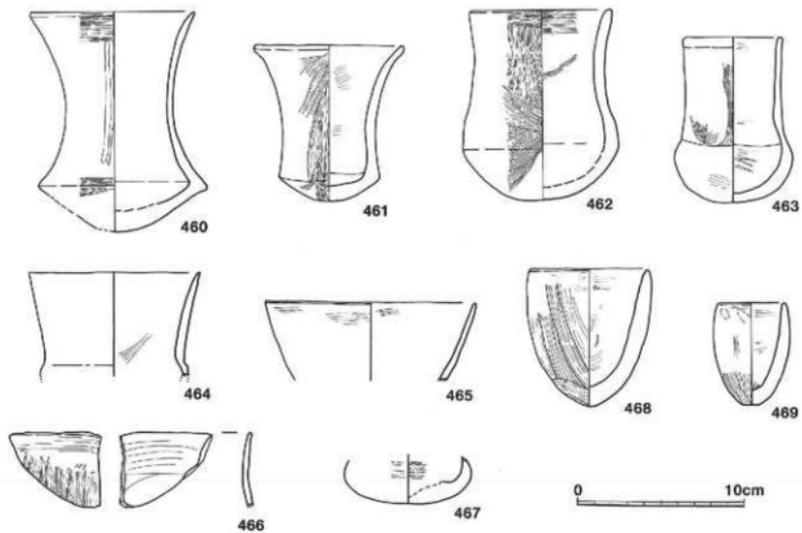
第79図 3号住居跡出土遺物(3)



第80图 3号住居跡出土遺物 (4)



第81图 3号住居跡出土遺物 (5)



第82图 3号住居跡出土遺物 (6)

460～467は埴形土器である。

460・461は外反する長い口縁部をもつ小型丸底壺である。小さい丸底と外へ細長い口縁からなり、胴部で稜をもつ。口縁端部は尖り気味である。口径は9.8cm, 9.0cm, 器高は13.5cm, 9.6cm, 胴部径は10.2cm, 6.0cmを測る。外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。462は胴部がややくびれ口縁部が外反する。胴部は浅く底部は丸底である。口径8.7cm, 器高11.7cm, 胴部径9.3cmを測る。463も同様のもので、口径6.0cm, 器高10.2cm, 胴部径7.2cmを測る。口縁端部は胴部から立ち上がり直交するものである。464・465は口径10.5cm, 12.6cmを測る小型壺の口縁部である。口縁端部は尖り気味である。468・469は手捏土器である。底部が尖り気味で、口縁部はやや内弯し、口唇部が尖り気味なものである。口径は7.2cm, 4.2cm, 器高は8.4cm, 6.3cmを測る。

#### 4号住居跡

出土遺物は、甕形土器・壺形土器が出土したが細片であった。

#### 5号住居跡

470～485は5号住居跡出土の土器である。

470～478は甕形土器である。470～475は内弯する口縁部をもつもので、ナデ整形で器面調整がなされ、結縄突帯を施すものである。470は完形土器で、口径25.5cm, 器高33.3cm, 脚台径8.2cmを測るものである。器面調整はナデ整形であり、外面には煤が付着している。471～475の口径はそれぞれ27.8cm, 24.0cm, 28.8cm, 24.8cm, 28.2cmを測る。何れもナデ整形を施している。476は内弯気味に直口する口縁部である。

478は中空のあげ底底部である。

479～484は高坏であり、何れも外面には丹塗りが施されている。479・480は碗形の器形をした坏部で、内弯気味の口縁部をもつものである。口径は18.6cm, 18.0cmを測る。481は直口する口縁をもつ坏部である。483・484は底部から筒部をもたず、すぐ据部になる形状である。484は据部が大きくなる。

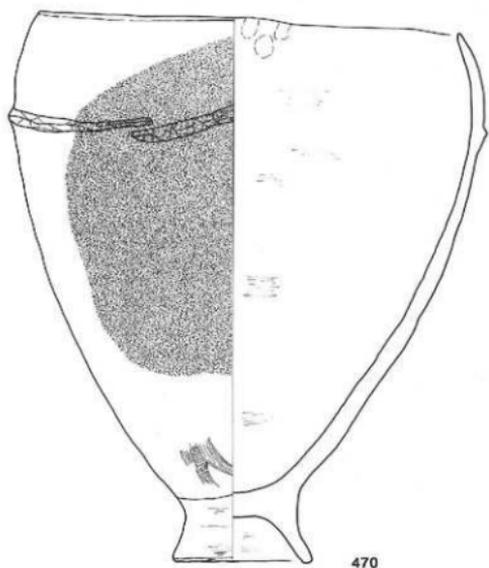
485は平底の鉢形土器である。底部からやや膨らみながら口縁部に直口し、口唇部内面がやや外に反る形状で、口唇部は丸みをもつ。内外面とも丁寧なヘラミガキ調整を施している。口径12.8cm, 器高6.0cm, 底径6.6cmを測る。

#### 6号住居跡

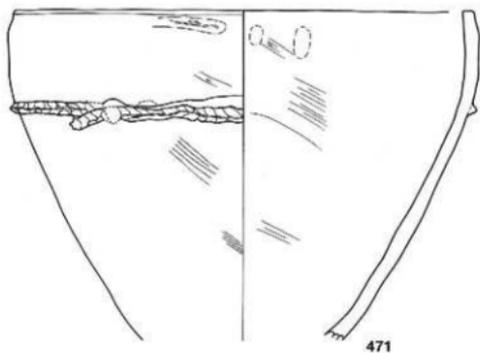
486～490は6号住居跡から出土した土器である。

486～488は甕形土器の口縁部であり、486は直交する口縁部で、487は外反する口縁をもつものである。488は結縄突帯を施すもので、ナデ整形で器面調整がなされている。

489・490は壺形土器である。489は口径12.8cmを測る外反する口縁部で、490は平底の底部である。



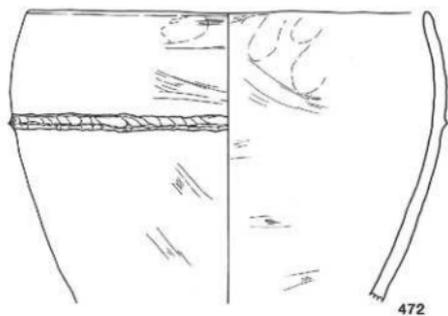
470



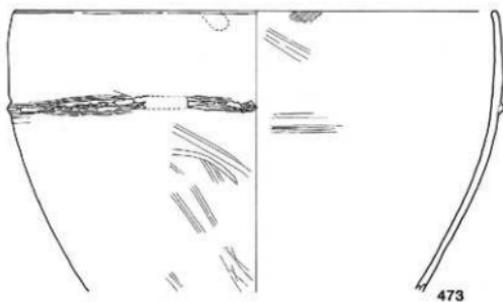
471



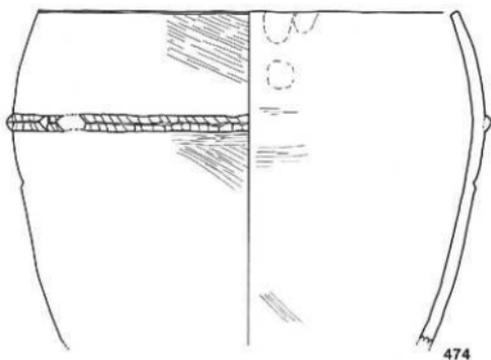
第83图 5号住居跡出土遺物(1)



472



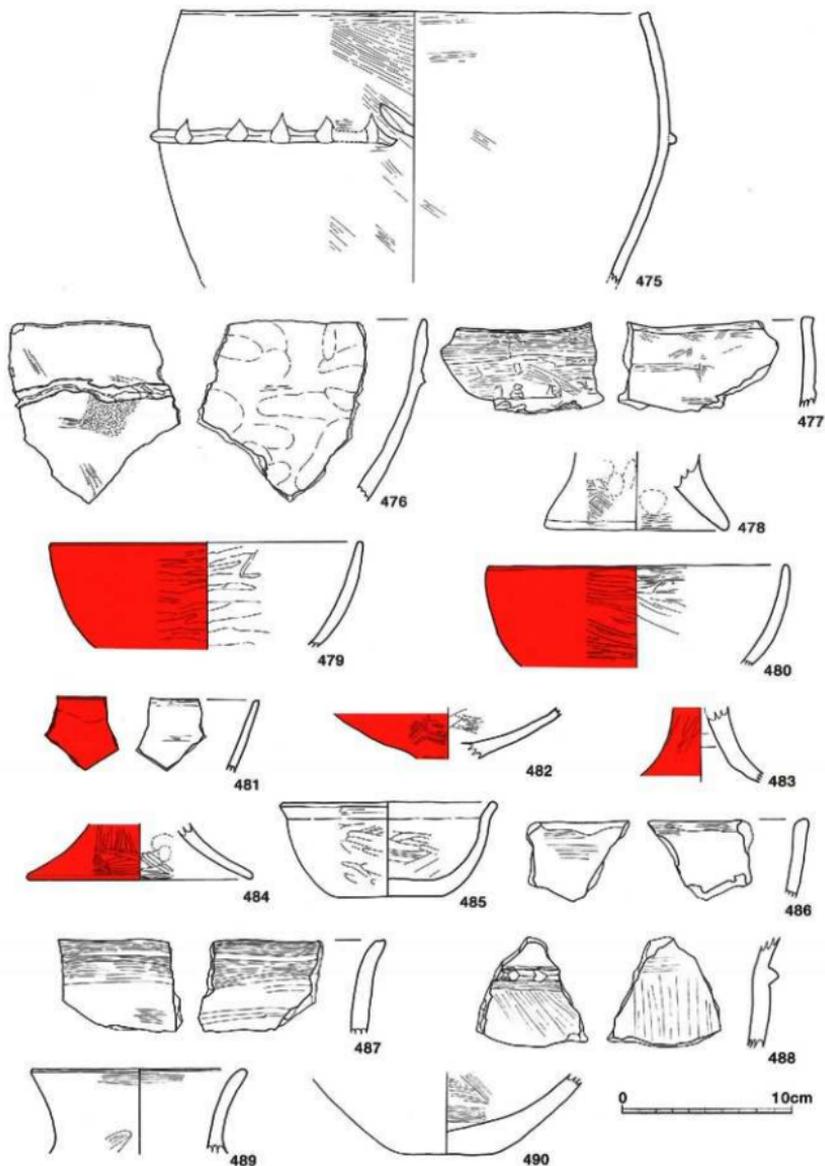
473



474

0 10cm

第84图 5号住居跡出土遺物(2)



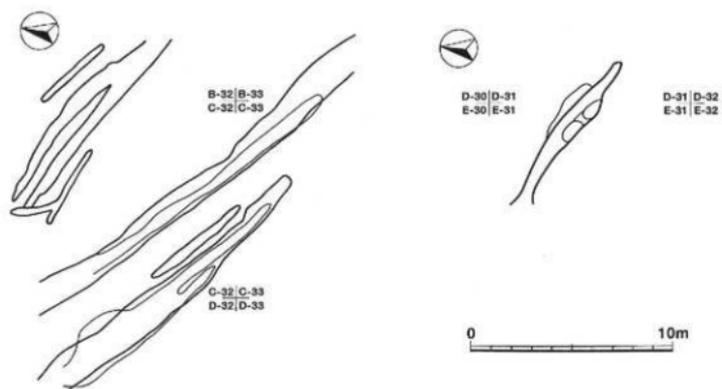
第85图 5·6号住居跡出土遺物

第16表 鷲ヶ迫遺跡構内遺物観察表(1)

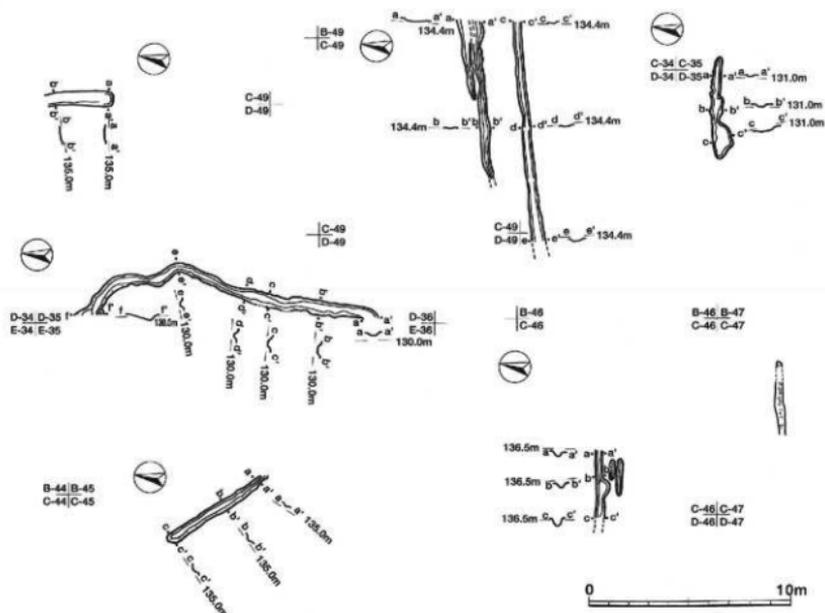
探出 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	分類	調 整		胎土	色 調		取上番号	備 考	
						外面	内面		外面	内面			
77	413	D4-5	住1	口縁	斐	ナデ	ナデ	qz	にぶい棕色	にぶい棕色	848		
	414	D4-5	住1	口縁	斐	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	8191		
	415	D4-5	住1	底部	斐	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	明褐色	8586		
	416	D5	住1	底部	斐	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	13245		
	417	D5	住1	口縁	高坏	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	明褐色	11049		
	418	D4-5	住1	底部	埴	ヘラムガキ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	8629		
	419	D4-5	住1	完形	手づくね	ヘラケズリ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黒褐色	8201		
	420	D5	住2	胴	斐	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	8255		
	421	D5	住3	完形	斐	ケズリ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい褐色	10他		
	422	D5	住3	完形	斐	ケズリ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい褐色	241他		
	423	D5	住3	完形	斐	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	75		
	424	D5	住3	口縁	斐	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい赤褐色	10158他		
	425	D5	住3	口縁	斐	ナデ	ナデ	ho,qz	黒褐色	にぶい赤褐色	8215		
	78	426	D5	住3	口縁	斐	ケズリ	ナデ	qz	灰黄褐色	赤褐色	153他	
		427	D5	Ⅱa住3	口縁	斐	ナデ	ナデ	qz	黒色	黄褐色	16231	
428		D5	住3	口縁	斐	ケズリ	ナデ	qz	黒色	明赤褐色	一括		
429		D5	住3	口縁	斐	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい褐色	12411		
430		D5	住3	口縁	斐	ケズリ	ナデ	qz	赤褐色	暗黄褐色	1239		
431		D5	住3	口縁	斐	ケズリ	ナデ	qz	にぶい黒褐色	にぶい褐色	10150他		
432		D5	住3	口縁	斐	ナデ	ナデ	qz	黒色	にぶい棕色	160		
433		D5	住3	胴	斐(小型)	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	10134		
79	434	D5	住3	口縁	斐	ナデ	ナデ	qz	灰黄褐色	にぶい褐色	?	スス付着	
	435	D5	住3	口縁	斐	ナデ	ケズリ	qz	暗褐色	にぶい褐色	30他		
	436	D5	住3	口縁	斐	ナデ	ナデ	qz,障	暗褐色	にぶい褐色	136		
	437	D5	住3	口縁	斐	ナデ	ナデ	qz,障	明赤褐色	にぶい褐色	12741他		
80	438	D5	住3	底部	斐	ケズリ	ケズリ	qz	にぶい黄褐色	にぶい褐色	32		
	439	D5	住3	底部	斐	ケズリ	ケズリ	qz	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	47他		
	440	D5	住3	底部	斐	ケズリ	1.具ケズリ	qz,障	にぶい褐色	にぶい褐色	167		
	441	D5	住3	底部	斐	ケズリ	ヘラケズリ	ho,qz	にぶい赤褐色	暗黄褐色	109		
	442	D5	住3	胴~底	斐	ヘラケズリ	ナデ	qz,障	にぶい赤褐色	暗黄褐色	12740		
	443	D5	住3	底部	斐	ケズリ	不判	qz,障	暗赤褐色	暗黄褐色	159		
	444	D5	住3	底部	斐	ケズリ	ナデ	qz	暗赤褐色	暗黄褐色	162		
	445	D5	住3	底部欠	鉢	ナデ	ナデ	qz	暗黄褐色	にぶい赤褐色	11640		
	446	D5	住3	底部	鉢	ケズリ	ナデ	qz	暗赤褐色	明赤褐色	151他		
	447	D5	Ⅱa住3	胴~底	鉢	ケズリ	ケズリ	qz	にぶい黒褐色	にぶい赤褐色	6239他		
	448	D5	Ⅱa住3	胴~底	鉢	ケズリ	擦押さえ	qz	明赤褐色	にぶい黒褐色	10234他		
81	449	D5	住3	完形	壺	ケズリ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい赤褐色	55他	小型壺	
	450	D5	住3	口縁	壺	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	54他		
	451	D5	住3	口縁	壺	ナデ	ナデ	qz,障	明赤褐色	暗黄褐色	10607		
	452	D5	住3	胴~底	壺	ミガキ	ナデ	qz	暗灰黄色	灰黄色	113他		
	453	D5	住3	底部	壺	ケズリ	ナデ	qz	暗赤褐色	にぶい赤褐色	86他		
	454	D5	住3	底部	壺	ナデ	ナデ	qz	灰黄色	明赤褐色	4他		
	455	D5	住3	完形	高坏	ケズリ	ナデ	qz	明赤褐色	褐色	111他		
	456	D5	住3	胴部欠	高坏	ケズリ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	灰褐色	49他		
	457	D5	住3	胴部欠	高坏	ケズリ	ナデ	ho,qz	にぶい赤褐色	にぶい褐色	12679他		
	458	D5	住3	底部	高坏	ケズリ	ナデ	ho,qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	203他		
	459	D5	住3	脚部	高坏	ケズリ	1.具底	qz	にぶい褐色	暗褐色	74		

第17表 鷲ヶ迫遺跡遺構内遺物観察表(2)

埋蔵 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	分類	観 察		胎土	色 調		取上番号	備 考
						外面	内面		外面	内面		
82	460	D5	住3	完形	埴	ミガキ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	185他	
	461	D5	住3	完形	埴	ミガキ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	53他	
	462	D5	住3	完形	埴	ナデ	ナデ	qz	灰褐色	黒褐色	ナシ	
	463	D5	住3	完形	埴	ミガキ	工具痕	qz	橙色	赤褐色	12379	
	464	D5	Na住3	門縁	埴	ケズリ	ミガキ	ho,qz	赤褐色	赤褐色	1863他	
	465	D5	住3	口縁	埴	ミガキ	ナデ	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	72	
	466	D5	住3	口縁	埴	ミガキ	ナデ	qz	淡黄色	淡黄色	10540	
	467	D5	住3	胴~底	埴	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	12496	
	468	D5	住3	完形	手づくね	ナデ	ナデ	ho,qz	暗褐色	赤褐色	?	
	469	D5	住3	完形	手づくね	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	12387	
	470	C27	住5	完形	壺	ナデ	ナデ	qz	暗褐色	赤褐色	8704他	スス付着
	83	471	C.D27	住5	口縁~胴	甕	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	明赤褐色	8771
472		D27	住5	口縁~胴	甕	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	明赤褐色	ナシ	
84	473	C.D27	住5	口縁~胴	甕	ナデ	ナデ	ho,qz	黒褐色	にぶい赤褐色	7869他	
	474	C.D27	住5	口縁~胴	甕	ナデ	ナデ	qz,糲	暗赤褐色	にぶい赤褐色	8780	
85	475	C.D27	住5	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	暗赤褐色	赤褐色	12431他	
	476	C.D27	住5	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい赤褐色	9535	
	477	D27	住5	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい赤褐色	ナシ	
	478	C.D27	住5	底部	甕	ケズリ	ナデ	qz	赤色	にぶい黄褐色	ナシ	
	479	D27	住5	口縁~胴	高坏	ミガキ	ミガキ	qz	赤色	にぶい赤褐色	9622	丹塗り
	480	C.D27	住5	口縁	高坏	ミガキ	ミガキ	qz	赤色	明赤褐色	9621	丹塗り
	481	D27	住5	口縁	高坏	ミガキ	ミガキ	ho,qz	赤色	にぶい褐色	9633	丹塗り
	482	C.D27	住5	口縁	高坏	ミガキ	ミガキ	qz	赤色	赤褐色	ナシ	丹塗り
	483	D27	住5	口縁	高坏	ミガキ	工具ナデ	qz	赤色	暗褐色	9647	丹塗り
	484	C.D27	住5	口縁	高坏	ミガキ	ミガキ	ho,qz	暗赤褐色	黒褐色	12145	丹塗り
	485	C.D27	住5	完形	桶	ミガキ	ミガキ	qz	暗褐色	にぶい赤褐色	12596他	
	85	486	C50	住6	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	明褐色	明褐色	2914
487		C50	住6	口縁	甕	ナデ	ナデ	ho,qz	明赤褐色	明赤褐色	2934	
488		C50	住6	胴部	甕	ナデ	ケズリ	ho,qz	暗灰黄色	暗灰黄色	2917	
489		C50	住6	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	赤褐色	3134他	
490		C50	住6	底部	甕	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい赤褐色	赤褐色	2921他	



第86図 古道跡



第87図 溝状遺構 (1)